

飯盛町文化財調査報告書第1集

築 崎 遺 跡

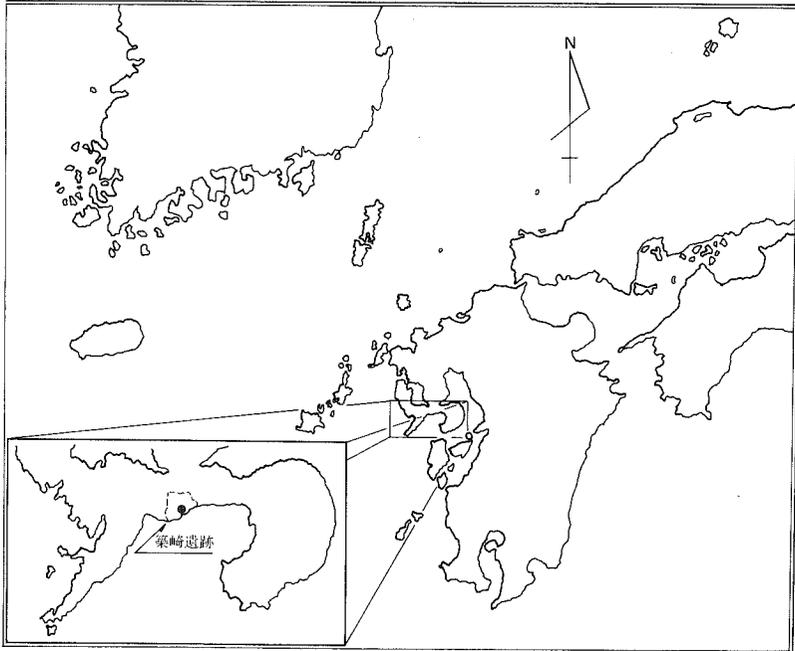
1990

長崎県飯盛町教育委員会

飯盛町文化財調査報告書第1集

筑^{つき} 崎^{さき} 遺 跡

— 長崎県北高来郡飯盛町所在の遺跡 —



1990

長崎県飯盛町教育委員会

発刊にあたって

飯盛町内の遺跡地図（昭和57年版）をみると、16か所の地点に印を付されています。その中に築崎遺跡があり、先土器・縄文時代遺物の散布地となっています。

本遺跡付近は、大昔、千々石湾の海水が深く流れる入江に面した位置にあることがわかります。『月の港』と呼ばれた入江は、江戸時代（元禄年間）の干拓工事を経て、現在の水田・畑作地帯および住宅地になりました。

昭和61年度、飯盛地区南部農免道路工事の計画がなされ、遺跡付近もその予定路線となったため、県教委文化課の御指導を得て、今回の発掘調査に至った次第であります。

本町の遺跡の中で築崎の場合、それ程、町民に関心を持たれていただけではありません。むしろ、田結里名の条理遺構（奈良）、下釜名の石棺群などが目立っています。しかし、今回の調査結果により、飯盛町の歴史を語る、新たな貴重な場所として、築崎遺跡が重要な役割を果たすことになりました。縄文、弥生、中世と重なり合う数々の発掘品を見ながら、この地が5,000年もさかのぼる、古くからの人間活動の場であったことに、新たな感動を覚えるものであります。

今回の調査にあたり、種々御指導、御尽力を賜りました、文化課の先生方、そして、調査の作業に従事していただいた、近隣地域の皆様に衷心より感謝申し上げます、発刊の言葉といたします。

平成2年3月31日

飯盛町教育長 張 本 武 春

- 1 本書は長崎県北高来郡飯盛町後田名所在の築崎遺跡に関する発掘調査の報告書である。
- 2 調査は昭和63年12月に試掘調査を実施し、その結果をふまえて平成元年8月～10月に本調査を実施した。
- 3 試掘調査は諫早土木事務所の依頼を受け、本調査は飯盛町教育委員会の委託を受けて県文化課が実施した。試掘調査は県文化課主任文化財保護主事安楽勉と文化財保護主事村川逸朗が、本調査については主任文化財保護主事藤田和裕と文化財保護主事町田利幸が担当した。
- 4 本報告書の作製は上記の担当者によって行い、文責については文末に記している。写真図版はそれぞれの調査担当者および執筆者によるものである。
- 5 出土遺物は平成2年3月の時点では県文化課立山分室に保管しているが、近い将来は飯盛町教育委員会において保管・展示される予定である。
- 6 本書の編集は藤田による。

本文目次

I はじめに

- (1) 調査に至る経緯…………… 1
- (2) 築崎遺跡周辺の地形と遺跡…………… 2

II 調査

- (1) 試掘調査の概要…………… 4
- (2) 本調査の概要…………… 5
- (3) 土 層…………… 6
- (4) 遺 構…………… 9
- (5) 遺 物
 - 1. 遺物の概要……………10
 - 2. 石 器……………11
 - 3. 土 器……………38
 - 4. 中・近世の陶磁器……………55
 - 5. その他の遺物（滑石製品、鉄滓他）……………58

III まとめ……………62

挿 図 目 次

第1図	周辺の地形と遺跡地図(1/25,000)	3
第2図	試掘調査坑位置図	4
第3図	調査区域図	5
第4図	土層図	7
第5図	柱穴検出状況図	9
第6図	石器①	11
第7図	石器②	13
第8図	石器③	14
第9図	石器④	15
第10図	石器⑤	16
第11図	石器⑥	18
第12図	石器⑦	19
第13図	石器⑧	20
第14図	石器⑨	21
第15図	石器⑩	22
第16図	石器⑪	23
第17図	石器⑫	24
第18図	石器⑬	25
第19図	石器⑭	26
第20図	石器⑮	28
第21図	石器⑯	29
第22図	石器⑰	30
第23図	石器⑱	31
第24図	石器⑲	32
第25図	橘昌信分類「石鋸」より	33
第26図	礫石錘比率計測法模式図	33
第27図	縄文式土器(1)	38
第28図	縄文式土器(2)	39
第29図	縄文式土器(3)	41
第30図	縄文式土器(4)	42

第31図	縄文式土器(5).....	43
第32図	縄文式土器(6).....	44
第33図	縄文式土器(7).....	45
第34図	縄文式土器(8).....	47
第35図	土器の底部.....	49
第36図	弥生式土器・土師器.....	51
第37図	須恵器.....	52
第38図	須恵器・須恵質土器.....	53
第39図	瓦器.....	54
第40図	中・近世の陶磁器（中国製輸入陶磁器）.....	56
第41図	中・近世の陶磁器（中国製輸入陶磁器、国内製近世陶磁器）.....	57
第42図	その他の遺物（滑石製品、石鍋）.....	59
第43図	その他の遺物（滑石製石鍋、土錘、羽口）.....	61
第44図	橘湾沿岸の遺跡分布図.....	63

図版目次

図版 1	遺跡遠景・試掘調査風景	69
図版 2	試掘調査時の土層と出土遺物	70
図版 3	遺跡近景・調査風景	71
図版 4	遺跡近景・調査風景	72
図版 5	調査風景	73
図版 6	土層の状況（B列北壁）	74
図版 7	土層の状況（11列・16列東壁）	75
図版 8	遺構・遺物出土状況	76
図版 9	石器①・②	77
図版10	石器②・③	78
図版11	石器③	79
図版12	石器④・⑤	80
図版13	石器⑤・⑥	81
図版14	石器⑦・⑧	82
図版15	石器⑧・⑩	83
図版16	石器⑪・⑫	84
図版17	石器⑨・⑬	85
図版18	石器⑬・⑭	86
図版19	石器⑮	87
図版20	石器⑯	88
図版21	石器⑰	89
図版22	石器⑱	90
図版23	石器⑲	91
図版24	土器①	92
図版25	土器②	93
図版26	土器③	94
図版27	土器④	95
図版28	土器⑤	96
図版29	土器⑥	97
図版30	土器⑦	98

図版31	土器⑧	99
図版32	土器⑨	100
図版33	土器⑩	101
図版34	土器⑪	102
図版35	中世の遺物（滑石製品、石鍋）	103
図版36	中・近世の陶磁器（中国製輸入陶磁器等）	104
図版37	中・近世の遺物（土錘、鞆の羽口）	105

表 目 次

表 1	石器重量表①	34
表 2	石器重量表②	35
表 3	石器重量表③	36
表 4	石器重量表④	37

I はじめに

(1) 調査に至る経緯

本県では農業基盤整備事業予定地内に位置する埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和50年の農林省構造改善局長と文化庁長官の覚書に沿って、県農林部各課と事業予定地内における文化財の保護についての協議をルール化し、事業との調整を図っている。

以上の件に基づいて県耕地課より昭和62年4月、事業計画書である「地区別調」が提出された。それによると、本遺跡の所在地である飯盛町江ノ浦地区には畑の利便性と生産性の増大を図るため農免農道が計画され、初年度は測量および用地買収にあてられていた。

この事業は正確には「飯盛町南部地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業」と呼ばれ幅員10m、長さ2400mの農道を新設するものである。

築崎遺跡はこの起点部分の後田名字築崎にあたり、江ノ浦の干拓地に接し丘陵端部に立地する県の遺跡地図No.30-62に該当する周知の遺跡である。県文化課では、遺跡の保護を前提に計画の変更を協議したが、この地区ではすでに用地買収交渉が進んでいることや、起点の変更による全体的な見直しが、地形などの関係で不可避な面があり、まずは試掘調査を行うことで合意された。

事業主体は県耕地課であるが実際の担当部局は県諫早耕地事業所である。調査主体は飯盛町教育委員会があたった。

試掘調査は、県文化課職員の2名が担当し、起点から東へ約200mの範囲で昭和63年12月5日～12月10日の6日間実施された。

調査は2m×2mの試掘坑を8箇所設定し、5箇所から遺物の出土が確認された。時期的には縄文時代前期から中世まで断続的に見られ、本調査を実施し記録保存の必要が生じた。

本調査予定面積は700m²が見込まれ、再度の協議が行われた。その結果、本調査は前回の体制で実施することとなり、予算措置は覚書の第5条によった。(安楽)

(2) 周辺の地形と遺跡

築崎遺跡は長崎県本土部の南側、千々石湾の奥まった場所に位置している。西に長崎半島、東側は島原半島に抱かれた千々石湾の北岸部である。行政的には、北高来郡飯盛町後田名字築崎に所在し、現状は水田で一部が宅地となっている。

古く「月の港」と称された浅い入江であった場所に向いて位置している。この「月の港」は、江戸時代、17世紀の末から干拓工事が始められ、面積160町ほどの干拓が完成したのは18世紀初頭のころと伝えられている。その後水田として利用されてきたが、地名として小島・塩屋内・下大中州などがあり、かつて海であったことや、海に注ぐ川の出口であったことを示すものが残されている。この干拓地は東西約0.8km、南北は樋門の部分から約1.9kmほどになる。しかし

南端に設置された樋門部分は狭隘で、その幅は100mほどしかない。このため干拓時には川と海の境にあたり、潮の満ち引きのたびに急流となって大層な難工事であったと伝えられている。昭和32年の諫早大水害のおりには、この干拓地一面に水が溜り、それこそ古い時代の「月の港」の再現というような状況であったと言われている。

この干拓地の回りは、高さ100mを超す丘陵となっている。北は鐘状火山で標高296.7mの八天岳があり、東側は牧野・後田の丘陵が続き、西には整然とした姿で標高292mの飯盛岳と佐田岳が並んでいる。これら丘陵地から流れる小河川は、江ノ浦川となって南流し、また、後田の丘陵から注ぐ川は築崎遺跡のすぐ北側で、丘陵先端を回り込んで南に向きを変えている。

築崎遺跡は「月の港」に接する後田の丘陵の西端部、標高約2.7mから8mほどの場所に立地している。ゆるやかな西向きの斜面で、南の千々石湾側は高い丘陵があり、湧水点も川の上流にはあるとのことで、この周辺を生活の場所として選んだ理由、その結果として豊富な遺物を残した理由の一端が首肯できる。

飯盛町町内のほぼ中央部を国道251号線が東西に走り、長崎と雲仙・島原方面とを結んでいる。また南北方向には、県道諫早～江ノ浦線があり、飯盛町の中央部で交差している。

周辺の遺跡

周辺の遺跡として、最も築崎遺跡に関係の深いものは下釜の貝塚と石棺墓群であろう。この遺跡は、江ノ浦の入江に南西方向から北東方向に向いて伸びた礫丘上に営まれた遺跡である。後背湿地を控えた礫丘上に位置するもので、三和町の為石遺跡、飯盛町の大門貝塚、諫早市の有喜貝塚など、千々石湾岸の他の遺跡と共通する性格が強い。下釜の貝塚は縄文後期に形成され、出土遺物として縄文・弥生の土器のほか貝輪・礫器・石斧などが知られている。

石棺は昭和2年に発見され、人骨が3体あり、うち一体には石枕が、他の一体には貝輪が装着されていたと伝えられている。2基の石棺が残っているが、いずれも大きめの石を立てて基礎部分とし、その上に石を横に積んで形を整え、上部に天井石を乗せている。このような構築方法と、長さが2m近い大きさであることを合わせて考えると、この石棺の築かれた時期については弥生時代以降の、あるいはまだ新しい時代の可能性についても考える必要を感じている。

いずれにしても築崎遺跡と関連のあるものと思われ、その存在については興味を持たれる。

下釜貝塚の南西側、標高20mから40mほどの、南側にゆるく傾斜した場所は遺物の散布地である。黒曜石の剝片、須恵器片などがあるが、遺構や性格などについては未調査でもあり詳しくは知られていない。

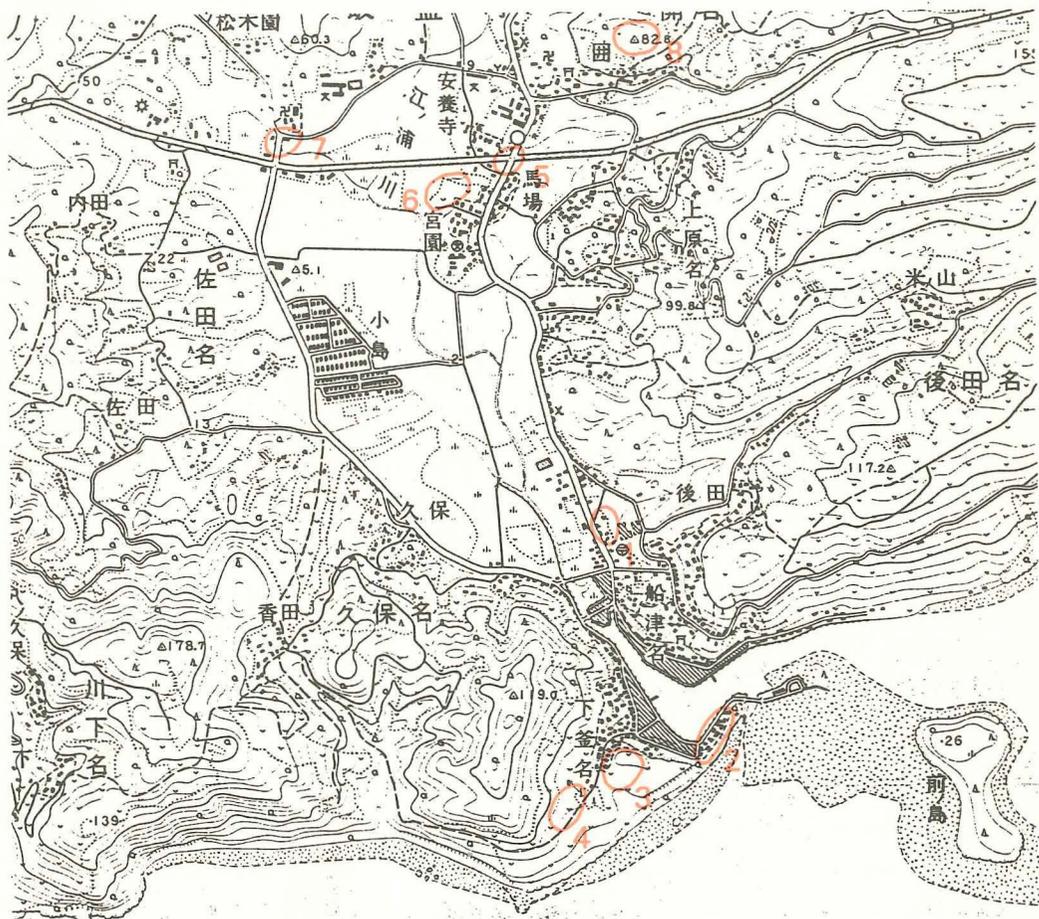
「月の港」の北側に、北東方向から伸びた標高10mほどの丘陵があり、この上にも遺跡が知られている。北側の、現在国道251号線と諫早～江ノ浦線が交差する付近の遺跡が開遺跡で、昭和46年7月に調査が行われた。小さな溝や柱穴状の遺構が確認され、弥生時代から古墳時代を経て中世に至るまでの遺物が出土している。

開遺跡の南西側の丘陵地の畑地に西馬場遺跡がある。黒曜石の剥片が散布した状況が知られているが、性格や時代については明確にはなっていない。

「月の港」の北西隅の丘陵先端部に普同寺がある。この寺の下の道路拡張がなれた時、青磁や石鍋の破片が採集されたと言われている。

8は囲城で、空堀を持つ。南西方向に伸びた丘陵の頂上部、標高80mほどに位置し、一度尾根の部分縦に切って空堀とし、その南西側に主体部を設置している。主体部は方形で、空堀を掘り上げてその内側に土塁を巡らし、南西側の辺のほぼ中央部を一箇所のみ開き、その部分に幅1mほどの土橋を渡している。主体部の規模は一辺が30mから40mほどである。各辺の土塁の高さは、空堀の底から約4mある。調査がされていないが、保存状況は良好である。

なお本遺跡の東北東、約6.5kmに有喜貝塚がある。諫早市松里町で、本遺跡と同じように千々石湾に面した丘陵上に位置しており、縄文時代中期から後期にかけてのものである。京都大学の浜田耕作氏によって、大正14年調査がなされ、広く知れわたっていた貝塚である。(藤田)



第1図 周辺の地形と遺跡地図 (1/25,000)

Ⅱ 調 査

(1) 試掘調査の概要

本遺跡は江ノ浦の干拓地に接する丘陵端部に立地する周知の遺跡である。かつて、丘陵を削平した際多くの貝殻がでたといわれており、貝塚が存在していたものと思われる。

調査は遺跡の広がりを見るため2m×2mの試掘壙を8ヶ所設定し、西から東へ番号を附した(第1～8試掘壙)。また、遺物の包蔵状況を詳しく観察するために第5試掘壙の1箇所を広く設定した(2m×4m)。以下、各試掘壙の状況を記述する。

第1・2試掘壙……宅地跡で造成時に攪乱され、遺物包含層はほとんど残っていなかった。

第3試掘壙……病院跡地最奥部にあたるため遺物包含層(縄文時代中期)が残存していた。包含層の厚さは50cm程である。

第4～7試掘壙……いずれも縄文時代・古墳時代・中世の遺物を包含している。

第5試掘壙……2～4層は縄文時代・古墳時代・中世の遺物を包蔵するが、中世以降の二次堆積と判断される。5・6層は中世の遺物包含層で、中国からの輸入陶磁器(青磁・白磁)や石鍋等の遺物が出土した。

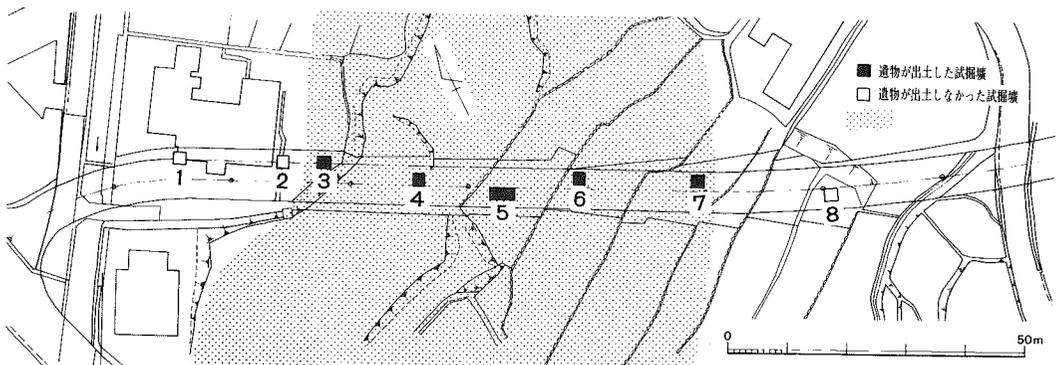
第6試掘壙……5層(茶褐色土層)は縄文時代前期の包含層で、土器(曾畑式土器)・石器(磨製石斧・黒曜石製剝片等)が出土した。

第7試掘壙……出土遺物量は第5・6試掘壙より少ない。4層が縄文時代包含層。

第8試掘壙……二次堆積層と判断される。

各試掘壙から縄文時代～中世の遺物が出土したわけであるが、これらは、貝塚と山城(本遺跡の南部に位置する後田城)の存在に強い結び付きが考えられ、本遺跡は広範囲に広がることが推察された(第3～7試掘壙を遺跡範囲としてとらえた。下図では網点をかけている)。

(村川)



第2図 試掘調査壙位置図

(2) 本調査の概要

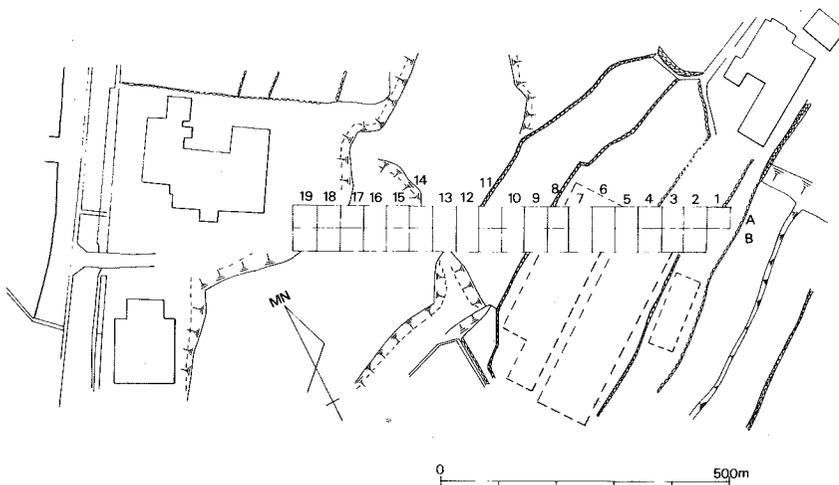
試掘調査の結果を受けて、平成元年度での本調査の実施が決まった。工事は9月から開始と
いうことで、それ以前の調査を計画したが、諸般の事情で8月初旬からの実施となった。

8月7日、飯盛町の現場に向かい、現場の草刈りなどを始め、午後、工事用の中心杭No.4と
No.6を結ぶ線を基準線として使用し、グリッドを組んでいった。中心線は磁北から63° 振れ、
東西方向に近い。グリッドは工事範囲との関係で4m×4mの大きさとし、二列に設定し北側
をA列、南側をB列とした。また東側から西側に向かって1・2・3のNo.を付けることとした。

A列、B列ともに、1～8区にかけてのグリッドでは、黒曜石の剥片や縄文式土器片、須恵
器、陶磁器類が出土したが、いずれも小破片となっていた。現地表面から地山までが浅く、水
田化工事を行う際に削平されたものと考えられた。9列から11列にかけては中世の包含層とさ
れていた層があり、その中に青磁・白磁などの陶磁器類、滑石製の石鍋片、韃の羽口などが出
土し、多くの鉄滓も認められた。12列から18列にかけては、円礫の間に小さな礫や砂が混じる
土層となっており、旧海岸に近い場所であることを窺わせた。遺物は縄文時代早期から前期に
かけての土器と石器であった。石器も種類が多く、サヌカイトの剥片が多いのも注目された。

9月になると雨が多く、15列以西では湧水があり、時間的にも効率が落ちるようになった。
9月の中旬にA列の15～19区は調査を終え、この部分の排土を重機で横に移動させ、B列のグ
リッドを設定した。ここでの状況もA列のそれと同じで、縄文時代前期の土器と多くの石器が
相次いで出土した。9月の下旬になって今回の調査地区のほぼ中央、A・B列の10、11区とそ
の間のあぜを取りはずし、掘り下げる作業にかかった。10月になって11列、12列も順次あぜを
はずし、遺物を層ごとに取り上げ、転石などの状況や全景の写真撮影を行った。

10月8日の午後、道具の水洗と片付け、周辺の清掃などを行い、予定していた全ての作業を
無事に終了することができた。 (藤田)



第3図 調査区域図

3. 土 層

現状は、水田耕作地の標高3m～8mにあり遺跡南側に河口で江ノ浦川と合流する山道川が流れる。

昭和63年12月の試掘調査によって、第3試掘壙に縄文時代中期の遺物が出土し、第4～7試掘壙にかけては縄文時代・古墳時代・中世の遺物包蔵地であることが確認されていた。

本調査では、標高約3.5m～7mに中世の遺物、遺構と旧石器及び縄文時代の石器や土器の出土があった。また、標高2.5m～3mにかけては縄文時代前期の竈・曾畑式土器を主体とする遺物の出土があった。

土層堆積状況は、A・B-2～8区には5層に中世遺物と遺構を確認しているが水田区画の石垣作り時に削平を受けかろうじて層が残る状況であった。A・B-9～12区では、5層に鉄滓、フイゴの羽口、滑石製石鍋、土師器、青磁白磁等が集中して出土した。また、6層には縄文時代晩期の土器・石器が、7層に縄文時代後期の注口土器・石器等の遺物の出土があった。

A・B-13～19区では、約2.5m程の埋め土がおこなわれており、この土砂の除去作業と湧水による水汲み作業とで毎日がおわれ、調査に困難をきたした。このような状況で埋め土を除去し掘り下げを行なっていった。その結果、旧表土下20cmに中世の遺物が若干出土し、8層には縄文時代前期の遺物包含層がA・B-13～19区に20cm程堆積するが、A・B-13区東側で8層が稀薄になりA・B-12区ではこの層は消滅していた。

以下に基本層序の色調及び文化層の主体を記載する。

- 0 層；客土（A・B-13～19区で約2.5m埋め立てがあった。）
- 1 層；耕作土
- 2 層；暗黄灰色土（水田床土）
- 3 層；黄褐色土（黒斑が多少混入）
- 4 層；暗黄茶色土（小礫が混じり黄色みがつよい）
- 5 層；黒褐色土（A・B-13～19区では暗灰色を呈し、小礫が多く混入するが基本的には粘質で黒味がつよい）……………中世の遺物を主に包蔵
- 6 層；茶褐色土（礫をあまり含まず粘質土壌である）……………縄文時代晩期
- 7 層；明褐色土（安山岩の風化礫がやや混じるが粘質ぎみ）……………縄文時代晩期・後期
- 7' 層；明黄茶色土（安山岩の風化礫が多く遺物の出土がない）
- 8 層；暗灰色土（20～30cm程の礫が混じる。）……………縄文時代前期
- 9' 層；暗黄淡白色土（砂質ぎみで、桃色にちかい色調を呈する。遺物の出土なし。）
- 9'' 層；明黄淡白色土（9層と同様であるが黄色味がつよい。遺物の出土なし。）
- 9 層；明黄褐色土（30～40cm程の礫が混じる。）
- 10層；青灰色土（安山岩の風化礫が混じり砂質ぎみ。遺物の出土なし。）

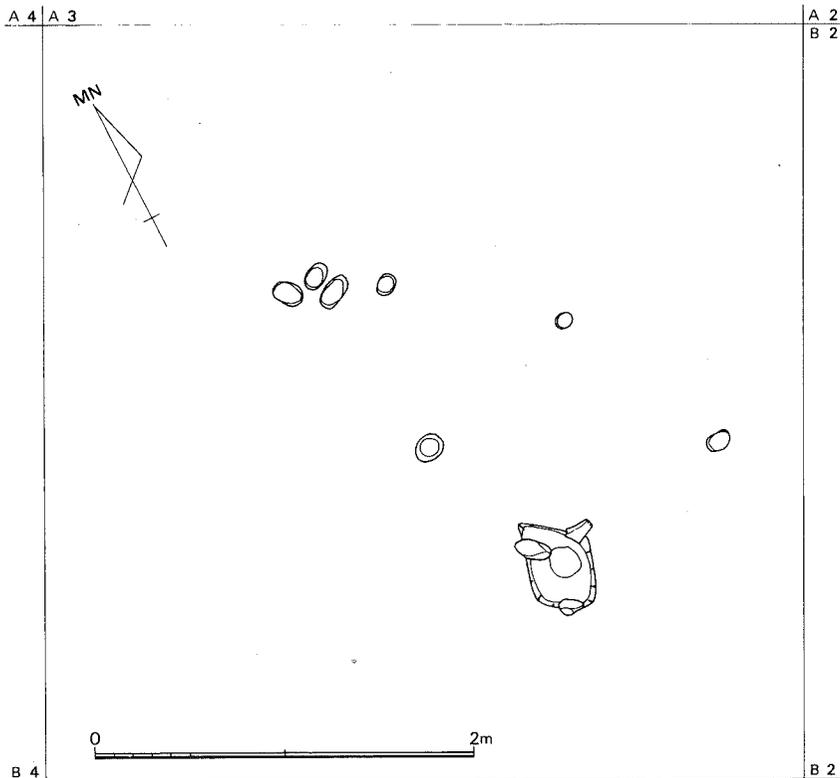
（町田）

(4) 遺 構

築崎遺跡では、性格が明らかな遺構は検出していない。1～6列間では柱穴と考えられる掘り込みが確認されたが、いずれも規則性が認められず、同一時期の、規模の明瞭な建物というようなものを考えることができない。北・南側の未調査部に残るであろうものとの関係があるのかもしれない。また形状がさまざまで、大きさも小大あり、礫石らしいものがないなどという点から、大規模な建物ではなく、農作業用の小屋や物置小屋などとも考えられる。建物跡などには復原できないが、柱穴の出土時の状況を一部分のみ図に示した。

9～12列では何らかの、特に鉄を使う作業に関係したと考えられる遺構があるが、ここでもその内容についての断言ができない。ただそのことを示唆する遺物、韃の羽口、鉄滓などの遺物が出土する事実からの推測にとどまる。さらにこれらに混じって青磁や白磁などの輸入陶磁器類があること、滑石製石鍋があることの意味については、近辺に生活の跡の存在する可能性を示すものであろう。この付近に集中させたような円礫や角礫は、何らかの作業をする際の基礎の部分に使用する目的で集められたものであろうか。現在の水田の境となっている部分であるが、それ以前の畑の石垣の可能性も否定できない。

13区以西には遺構は認められなかった。縄文前期の海進時に海岸であったような転石が認められ、当時の海浜での生活遺物の豊富な包含層が確認された。



第5図 柱穴検出状況図

(5) 遺物

1. 遺物の概要

遺物の出土する状況は大きく二箇所に分けられ、また遺物の属する時代も大きく二つに分けることができる。すなわち標高2mほどを中心とした、縄文時代早期から前期にかけてのもの、標高6m前後を中心とする中世の遺物を出土する場所とである。

前者は甕式土器と曾畑式土器を出土し、これに多種多様のサヌカイトや黒曜石製の石器を伴うものである。後者は、下層には縄文式土器を含み一部に弥生式土器や須恵器などもあるが、主体としては輸入陶磁器や滑石製石鍋の破片を多く含んだ中世の遺構で、しかも韃の羽口や鉄滓の出土から「小鍛冶」の遺構に関係のあるものと考えられる。以上のほかの地点からも縄文式土器片や須恵器、黒曜石剥片などが出土しているが、明瞭な遺構に伴うものではない。

以下、石器、土器、陶磁器などについて概略を述べる。

・石器

各種のものが大量に出土しているが、特に目を引くものとしてサヌカイトの製品がある。刃を付け、切るため、削るために加工を施したものが圧倒的である。これに突くための道具が加わり、サヌカイト製品のほとんどを占めている。黒曜石の製品は先土器時代のナイフ形石器・台形様石器から縄文時代の刃器・石鏃など比較的小形のものに限定される。蛇紋岩製の磨製石斧も数十点が出土しているが、縄文晩期を主体とする他の遺跡で出土例の多い扁平打製石斧の量の少なさは、奇異な感じを受ける。片岩製の十字形石器、石錘も多く、蛇紋岩の石斧の多いこととあわせ、長崎半島方面との交流の強さを感じさせている。このほか、石ノミや砥石も数点見つかっている。凹石の出土も多く、大小さまざまな形である。ただその使用目的が判然としない直径10cm内外の円礫と扁平な礫が多量にあり、何のために、どのように使用するのかなど、疑問の残るものもある。滑石製石鍋の破片も出土しているが、種類の異なるものが混じっている。

・土器

量的に最も多いものは縄文式土器であるが、時代的には後期末から晩期初頭ころのものが多。次いで早前期の甕式土器・曾畑式土器があり、中期のものは少ない。復原できるものはさほどなかったため、部位が明確で図上で復原できるもの、文様が明瞭で、時代をよく示すようなものから優先して図示することとした。

弥生式土器は数量としてはさほど多くない。胎土や色調から弥生式土器と考えられるものもあったが、部位の明らかでないものは図に示していない。甕の口縁部が最もよく特徴と時代を表していると思われたので、図示したものの中で大部分を占めるようになった。

須恵器も小破片での出土で、量的にもさほどではない。土師質の土器や黒色の瓦器、陶磁器は数量的に多く、これらが製鉄に関する遺構、または鉄の加工に伴う遺構と同じころの時期としてよいと思われる。中国明代のものと考えられる染付も出土しているが、形状の明確なものはほとんどなく、いずれも小さな破片となっていた。

(藤田)

2. 石 器

遺跡の主体をなす遺物には、石銛とスクレイパー類があげられる。これらは、縄文時代前期から後期にかけて西北九州を中心とした海岸部での報告例を受けている。このほか縄文時代で普遍的に使用された・凹石・磨石・磨製石斧・石鏃等がある。

また、旧石器時代の所産である台形様・ナイフ形石器と弥生時代の遺物として抉入石斧の出土があった。

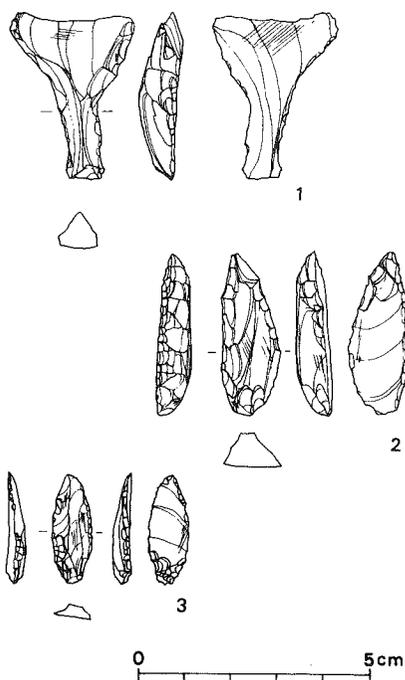
旧石器時代の石器 (第6図)

1・台形様石器で、直線の刃部を有し両側縁に粗い調整剥離により基部作出後細部に渡るブランディングを加え、刃部は平坦剥離を施す。2・ナイフ形石器で厚みのある灰黒色のハリ質安山岩の剥片を素材に正面左側縁部と右側縁部 $\frac{1}{2}$ 程にブランディングを施す。3・小型のナイフ形石器で右側縁部と基部周辺に二次調整を行なう。

縄文時代の石器 (第7図～第24図)

縄文時代を通して、もっとも量的に出土する遺物に石鏃があるが、その形態も時期によって特異な形状なしている。築崎遺跡でも多種多様な資料がある。この中で注目されるのが海岸部に特有な鋸歯状の鏃である。これは、山麓部では出土例が少なく海洋性の色彩が強い遺物である。これとならんで、海に関する資料として石銛と称される一群の石器がありこれには、大型・中型・小型のもの形態的にも基部のあるものないもの等多様であるが、対象物に大型の海獣が想定されている。次

にスクレイパー類があり、これは大きく2種類がある。即ち、つまみを有する石器とつまみを持たない石器があり、海獣の解体用具としての利用が考えられる。また、現在もみかける石錘がこの時期にも使用されており、石材に結晶片岩があてられていることは、磨製石斧の蛇紋岩と共に原石の原産地に共通点があることが窺える。磨製石斧は、蛇紋岩を石材としたものが多い。打製石斧については、一般的に九州地方で、縄文時代後・晩期頃に扁平打製石斧と呼ばれ多量に出現する石器として知られている。現調査では、打製より磨製石斧が多く出土している。この他に特異な石器に縄文時代後期の遺跡でみかける十字形石器がこれと類似の加工形態の遺物があった。また、凹石・磨石が大量に出土しており、この資料が魚撈に関係するものであるか現時点では不明である。



第6図 石器 ① (2/3)

石鏃（第7図～第8図）

1. 局部磨製石鏃で正面二次調整の後、磨きをかける。裏面は磨きはなく二次調整で、終えている。2・鍬形鏃の部類に入るもので、細部にわたり調整加工を施している。3～13は鋸歯鏃類で3は極端に胴部から頭部までが長い。13・大型のもので側面部の抉りを深くし突起状のついた側縁部を作出している。14～21は脚が短い部類のものである。18・サヌカイトの剥片を両縁より調整を行なっただけの剥片鏃である。22～26は、先端部を極端に細め胴部から脚部へ三角形に作出したものである。27～30は、大型の鏃にあたるもので銛を意識させる資料である（つぐめの鼻遺跡E類^{註1}）。以上の代表的なものを図化した。

錐状石器（第8図・第15図）

31・サヌカイト質で両側縁を正裏面から整形している。32・ハリ質安山岩を利用し、上部裏面には、自然面残る。33・チャート石の石材で上部から調整剥離を施す。119～121は、刃部に抉を施し上部直線的な形状をとる。調整剥離は下部部に集中する。

異形石器（第8図34～36）

34・上部欠損するが、下部同様に脚を有するものでありチョウネクタイ形を呈し、サヌカイト質の石材使用。カギ状の形態をなすものに35・36があり35・両側縁から二次調整を施す。36・湾曲部を両側縁からと背部を裏面から二次調整を施している。

彫器（第8図37～40）

いずれも槌状の剥離をもち、端部にクラックを生じている。

石核（第8図41・42）

41・上面打面調整を行ない、その後剥片剥離作業を上部より行なう。42・打面整形行なうことなく、剥離する。

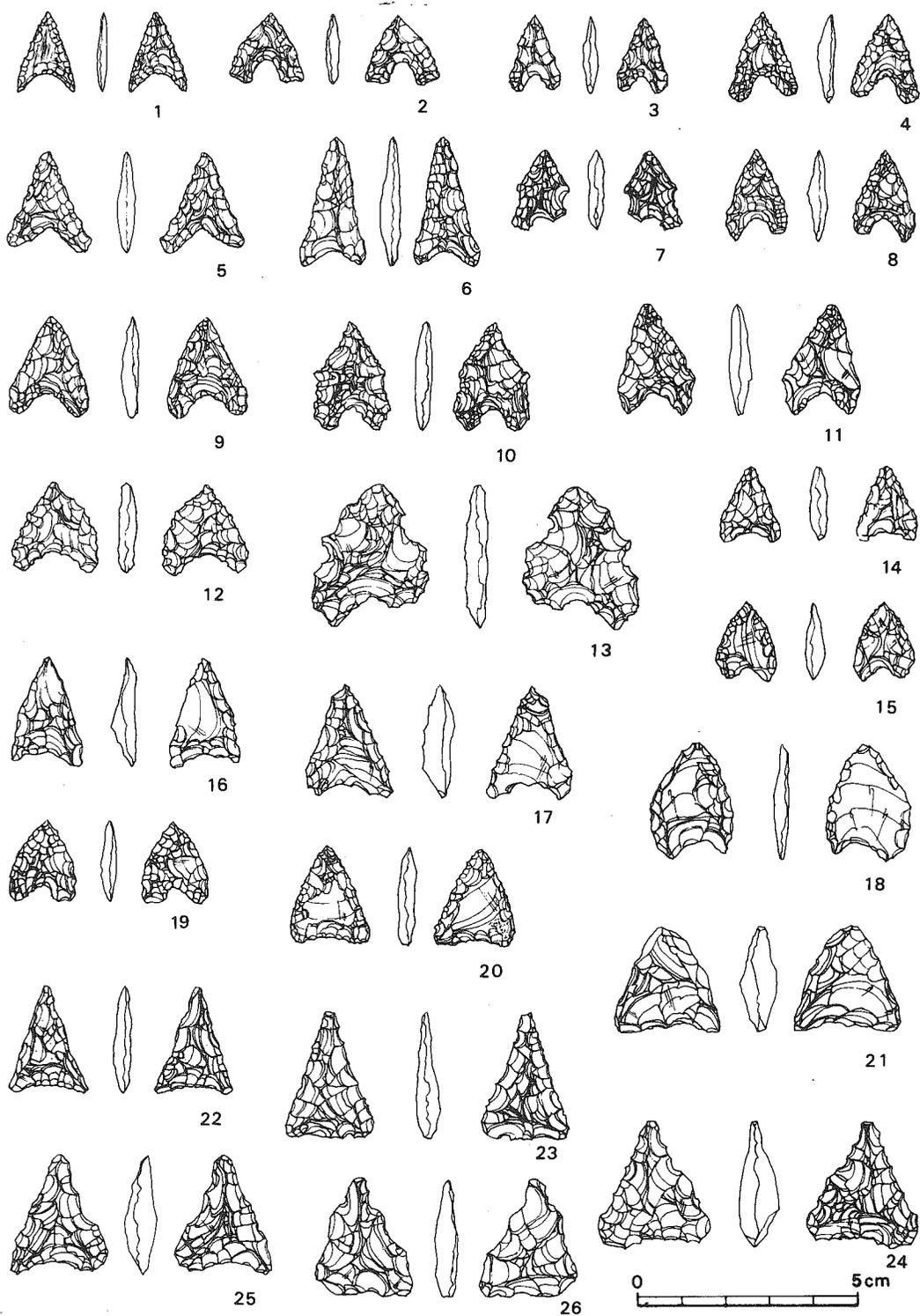
石銛（第9図～第12図）

大型・中型・小型に分け、主要剥離面を残すものと厚みをもち両縁から粗い交互剥離を施すものがある。出土地区によっても、石器の形態に違いがあり、A・B-2～12区（43～46・48・50～54・59・70・72・78・80・86・87）では縄文時代後期・晩期の土器が伴うもので、自然面を残すものが多くこの自然面をそのまま利用し鋭角部を作出している。これに対し、A・B-13～19区（47・49・55～58・60・61・63～69・71・73～77・79・81～85）では、縄文時代前期の土器と共伴するもので、自然面を交互剥離によって除去しており形態的にも、ととのった状態である。

大型石銛（43～50）

基部を作り出すものではなくサヌカイトの石材を使用する。

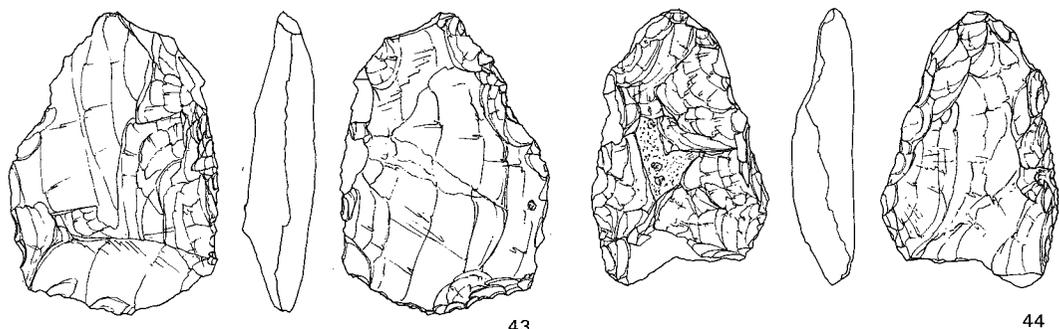
43・主要剥離面を残すが、正面右側を二次調整し、裏面右側先端部からと下部から二次調整を行なっている。44・正面中央部に自然面残し、交互剥離を施す。45・主要剥離面残し正面先端部自然面があり、粗い剥離なすが主要剥離面側には右側縁部及び下部に二次調整をする。断



第7图 石器 ② (2/3)

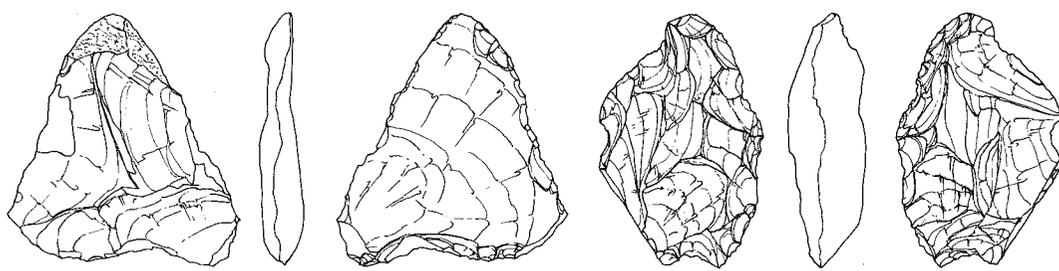


第8图 石器 ③ (2/3)



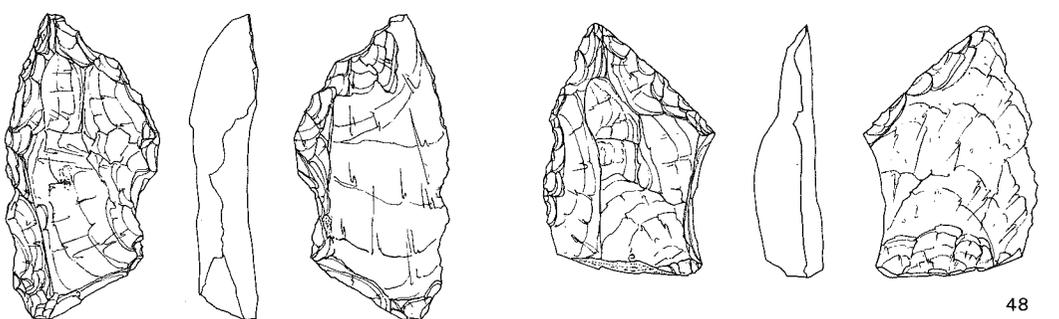
43

44



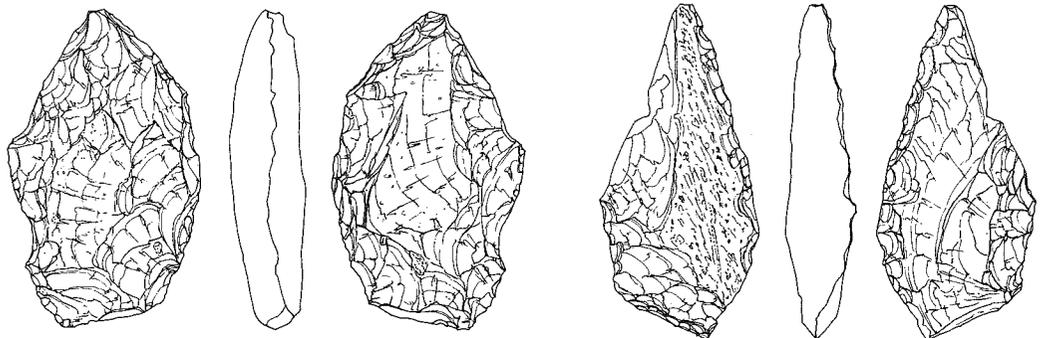
45

46



47

48

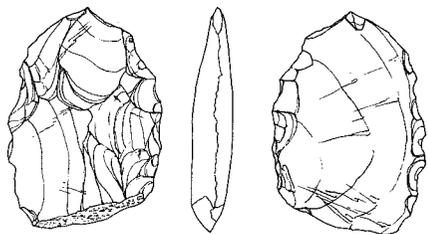


49

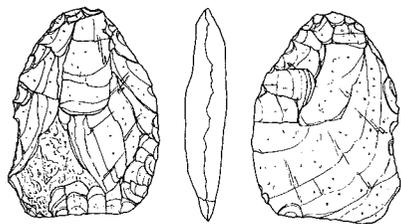
50



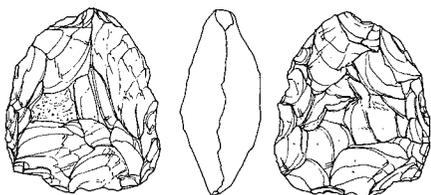
第9图 石器 ④ (1/2)



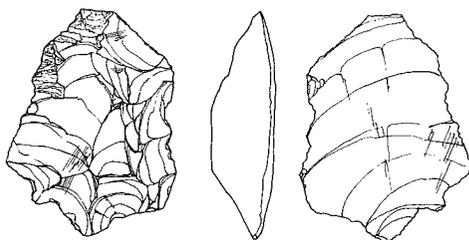
51



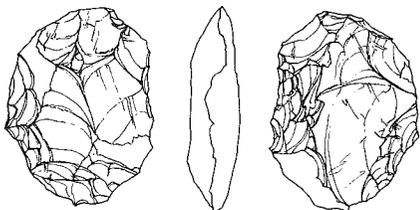
52



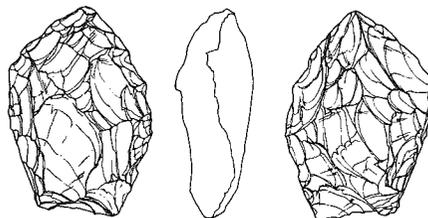
53



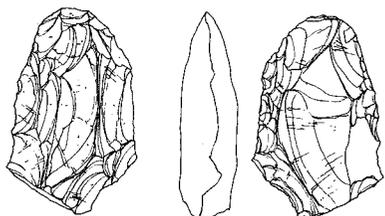
54



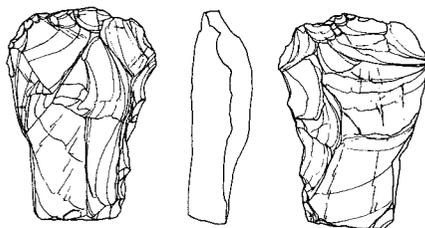
55



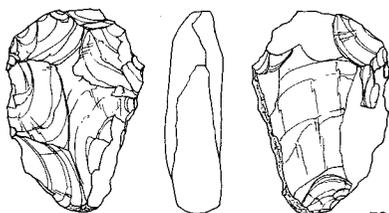
56



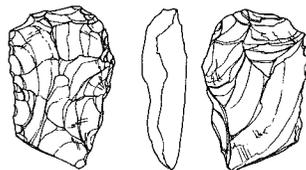
57



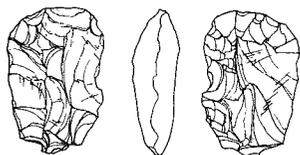
58



59



60



61



第10图 石器 ⑤ (1/2)

面が薄くスクレイパーとしての機能にも適応できるものである。46・先端部に鋭利さを欠くが、交互剥離を表裏ともに施す。47～50は先端部を鋭利に作出したものであり、B類に類似する資料として47・49がある。

中型石鋸① (51～57・87)

長軸と短軸が比較的均衡し、三角形状をなす。51・52・54は主要剥離面を残し側縁を鋸歯状に剥離整形しているもので、F 2類の形態をそなえている。53・55・56・87は断面肉厚でいずれも交互剥離を行なっている。

中型石鋸② (62～68・70・71・73～76)

長軸が長く、基部の作出を意図する資料が多い。57・基部が付属していたと思われるものである。62～68は、C類近似の資料である。70・71・73・76は基部を作出し、短軸が均衡する切出ナイフ状を呈している。72・基部のある欠損品。尖頭状の形状なす石器として、74・肉厚な断面で、正裏面に交互剥離を施すものと、75・両側縁に二次調整があり断面扁平なものがある。

小型石鋸 (69・77～86)

使用石材は小型化するにしたがい黒曜石を利用した素材が出現しだす傾向にある。77・長軸が長くなる切出ナイフ状を呈する。69・78は尖頭状石器のもので交互剥離を正裏面に施す。79・83は、中型石鋸②のC類を小型化した形態である。80～82・84～86は中型石鋸①の小型品。

筥状石器 (第5図 58～61)

先端部が半円形状をなすものである。58は、鐘ヶ崎貝塚^{註2}で類似の報告がある。

スクレイパー類 (第12図)

つまみを作出(石匙)したものⅠ類とつまみを有しない石器類Ⅱ類とがある。

Ⅰ類 (88～94)

つまみ部の幅が狭い88・89・91・92があり、つまみ部の幅が広いものに、90・93・94がある。これは剥片の幅に規定されるようで、つまみ部の幅と剥片幅に比例関係がある。

Ⅱ類 a (95～107)

小型の剥片石器をあてた。形態は上面あるいは側面に自然面を残し、主要剥離面にあまり調整剥離を施さない。

Ⅱ類 b (108～118)

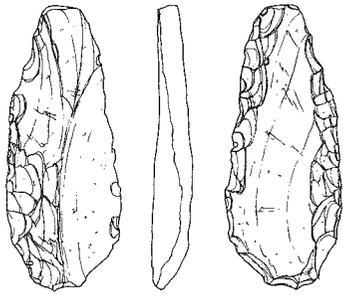
Ⅱ類 a 同様にいずれも上面あるいは側面に自然面を残すが、やや断面に厚みがあり主要剥離面からの二次調整が施されている。

Ⅱ類 c (122～125)

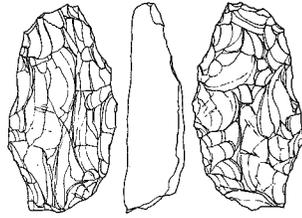
縦長剥片を利用し側縁に二次調整を施す。

Ⅱ類 d (126～131)

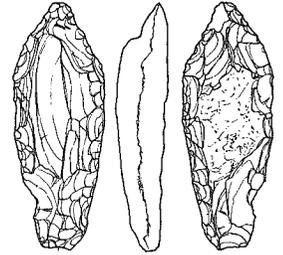
厚みのある素材を利用して、刃部が円形、円形状となるもので正裏面ともに交互剥離を行なっている。131は礫器状の石器類で周辺から正裏面ともに調整剥離を施す。



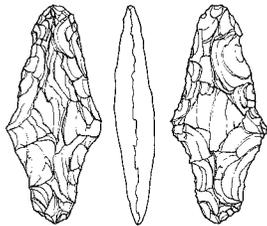
62



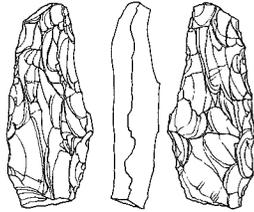
63



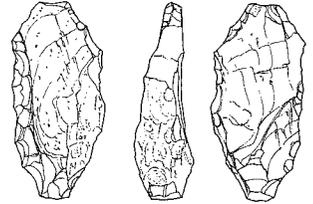
64



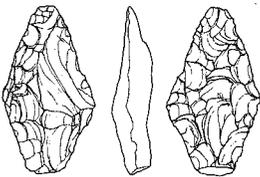
65



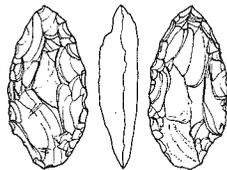
66



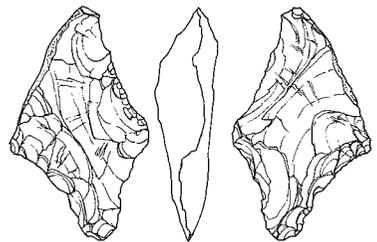
67



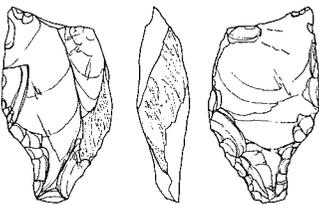
68



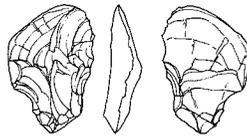
69



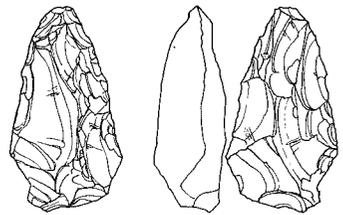
70



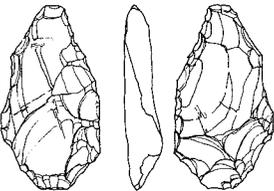
71



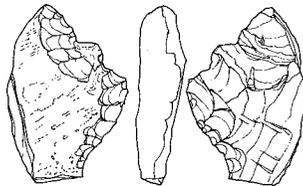
72



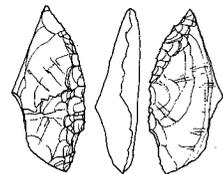
74



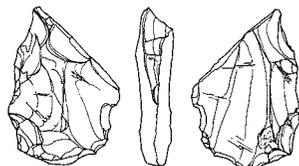
75



73



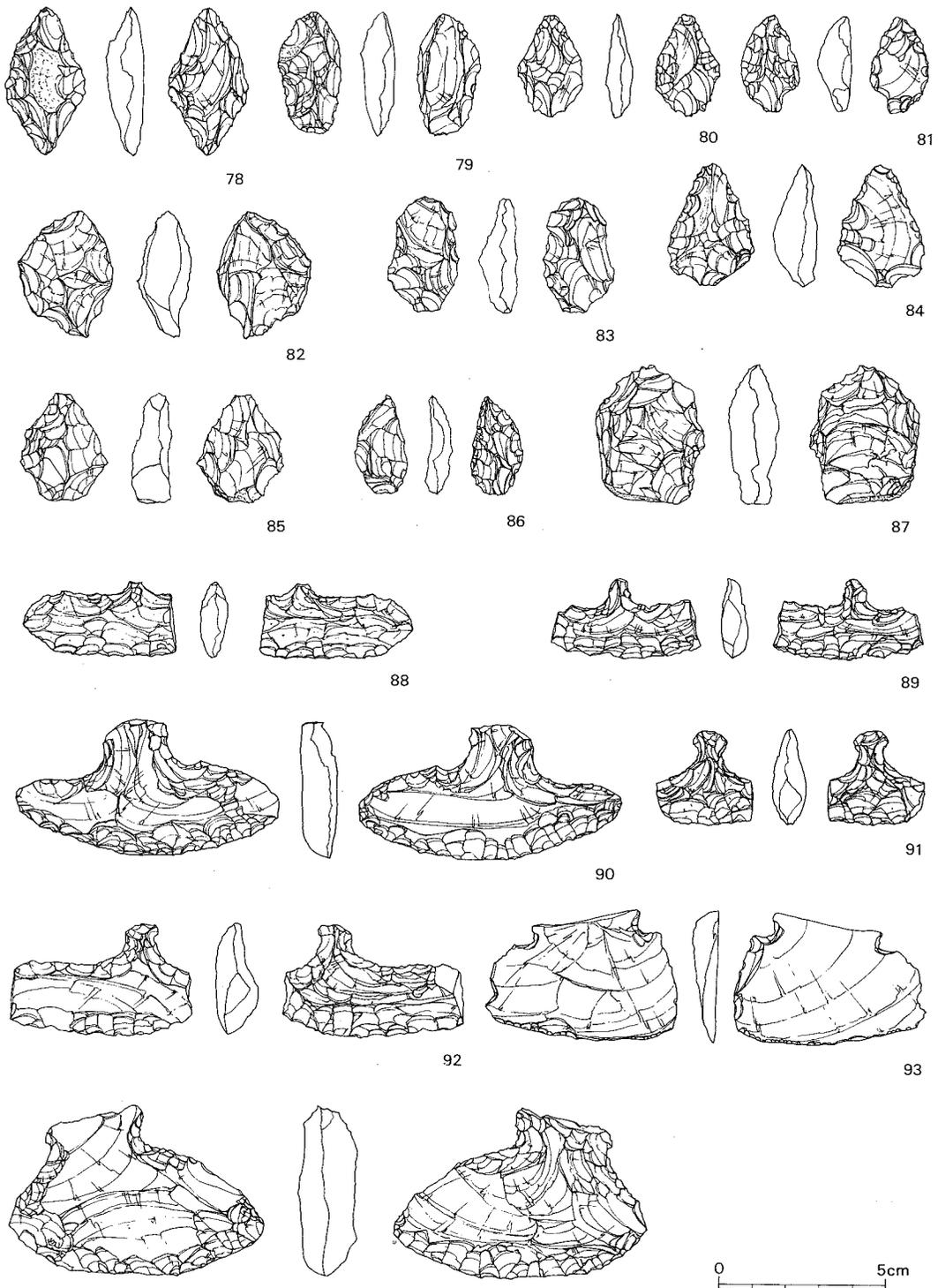
77



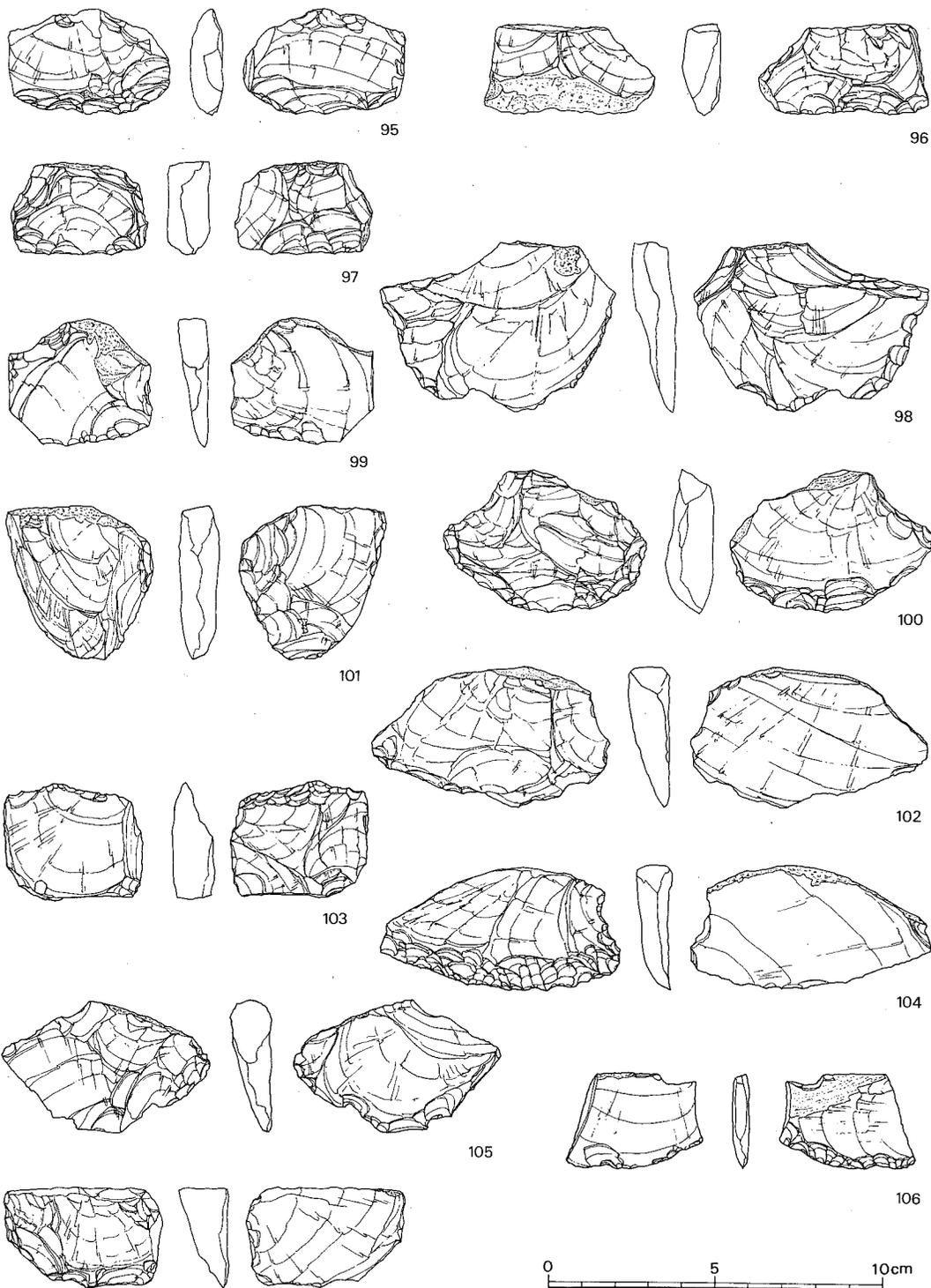
76



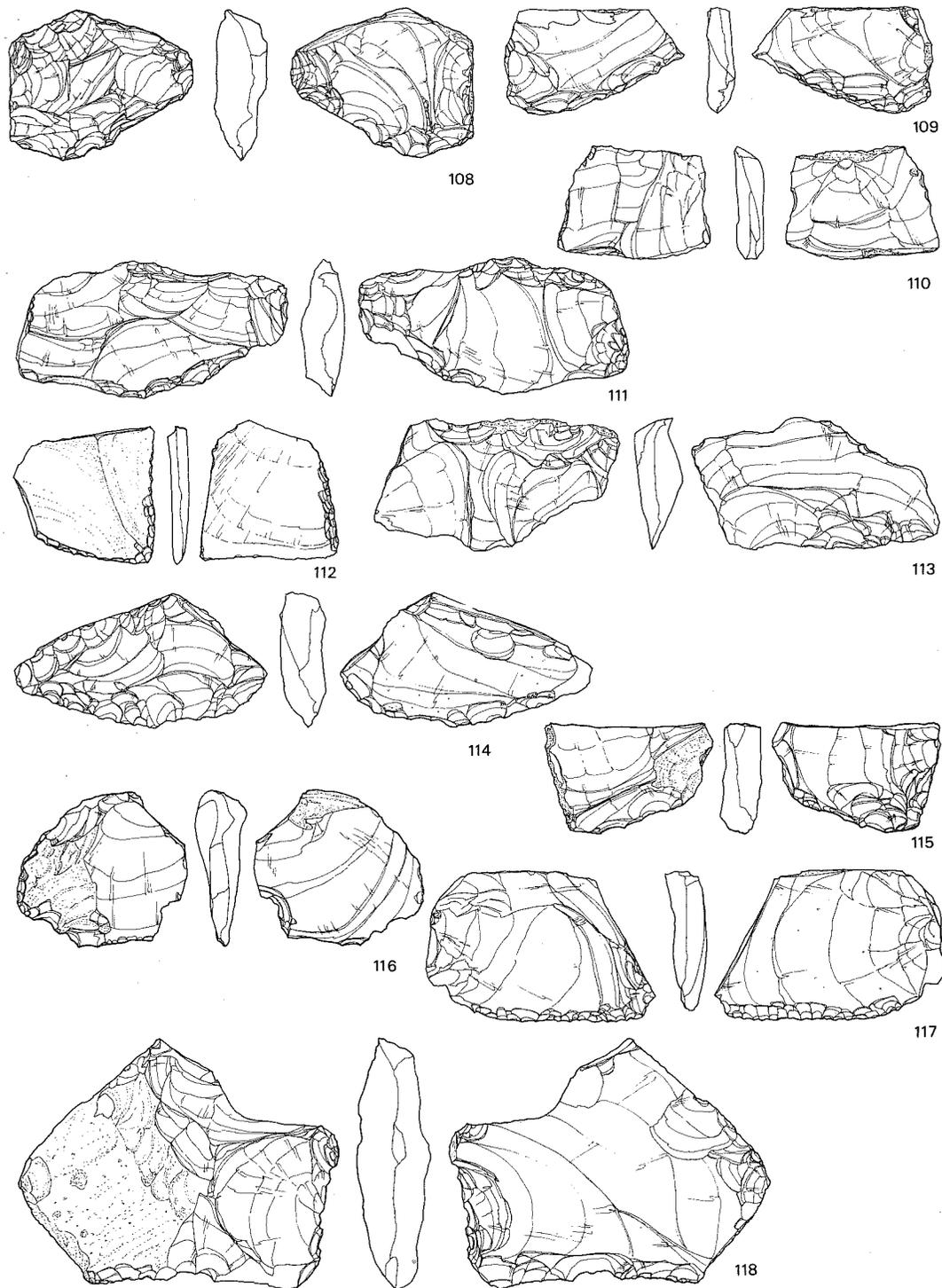
第11图 石器 ⑥ (1/2)



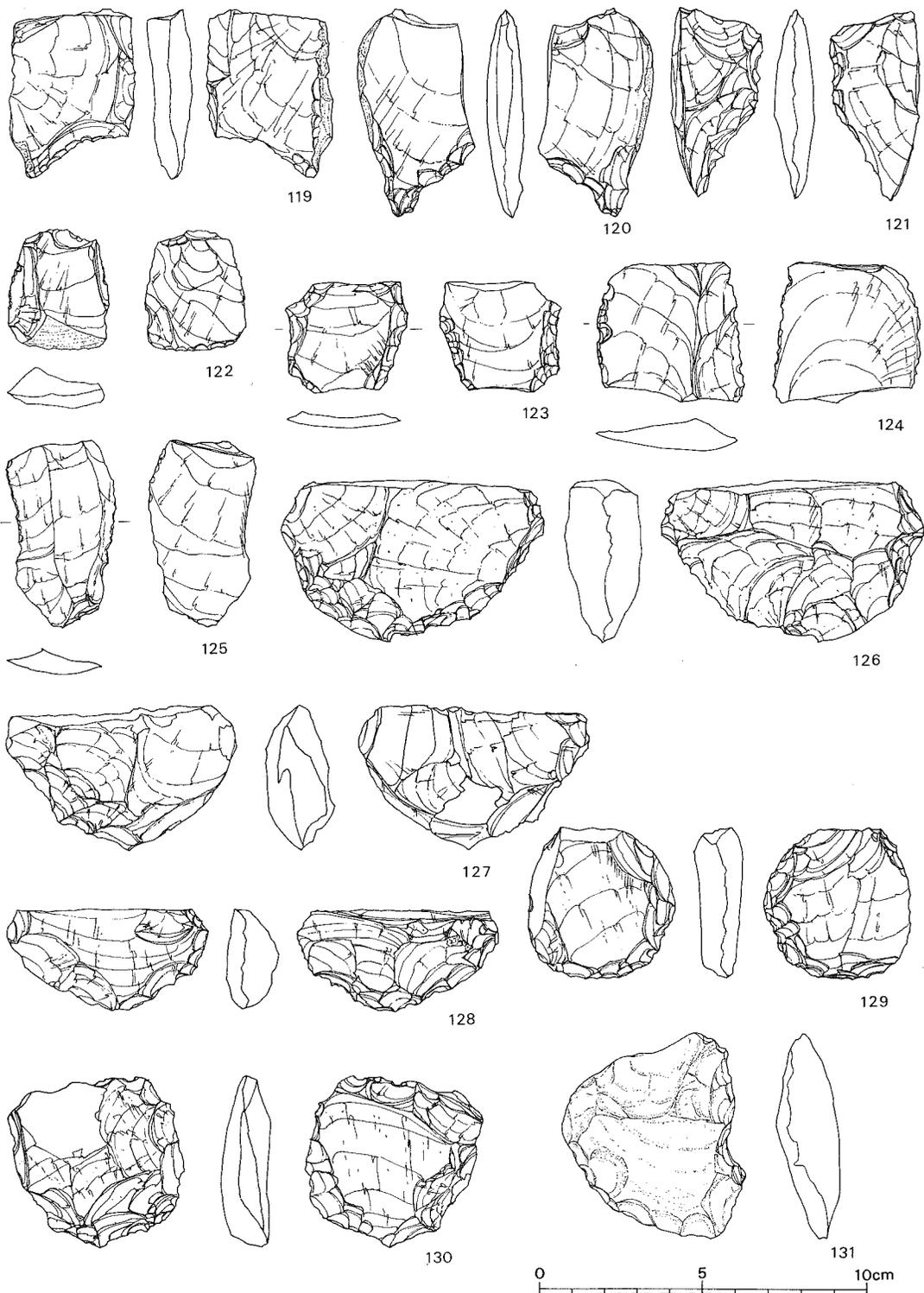
第12图 石器 ⑦ (1/2)



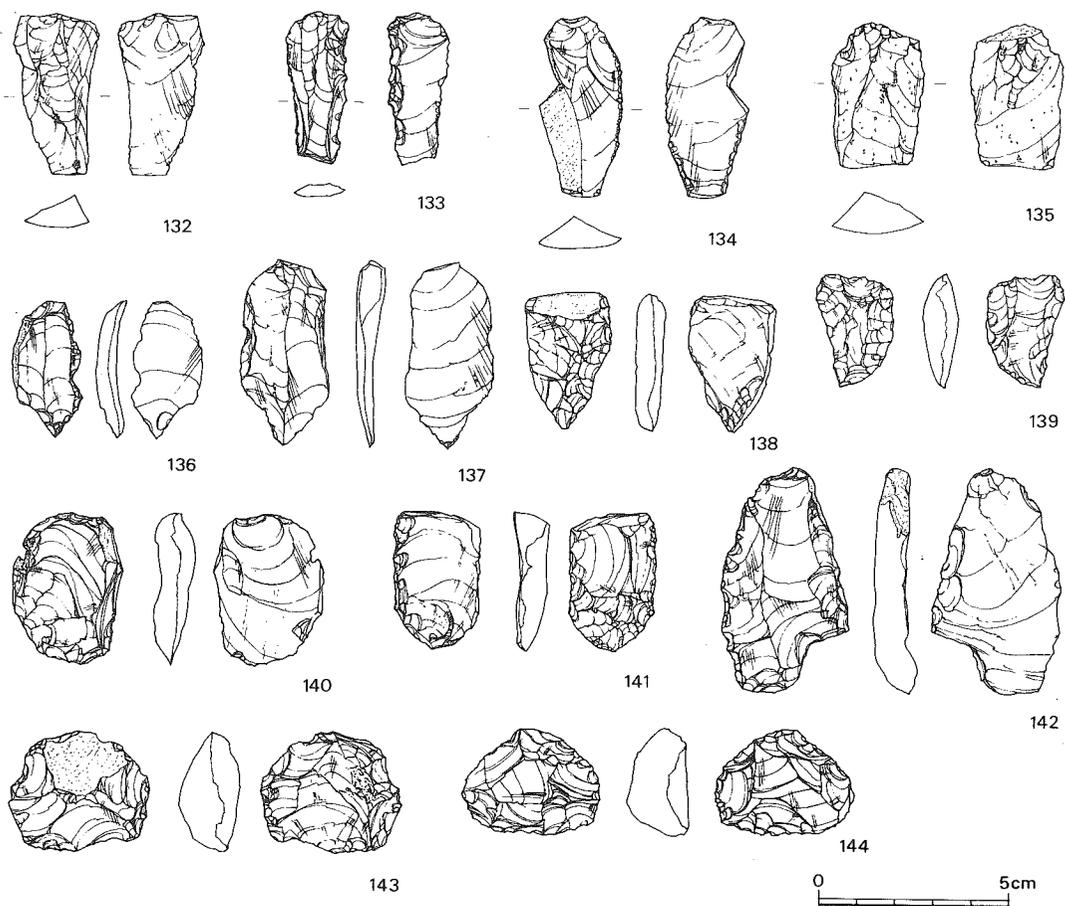
第13图 石器 ⑧ (1/2)



第14图 石器 ⑨ (1/3)



第15图 石器 ⑩ (1/2)



第16図 石器 ㊦ (1/2)

Ⅱ類 e (132~144)

黒曜石を素材にする石器類である。132~137は縦長剥片の側縁を刃部とした使用痕ある剥片である。136・正面右側縁に2箇所の手を施す。138・139は、やや厚い断面をなし138・チャート石を素材とする。140・141は刃部を下にもち主要剥離面を多く残す。142・基部のあるスクレイパーで、上部端には自然面を残し、正面左側縁に使用痕を残している。143・144はラウンドスクレイパーで素材に黒曜石を使用する。

石斧 (第17図~第19図)

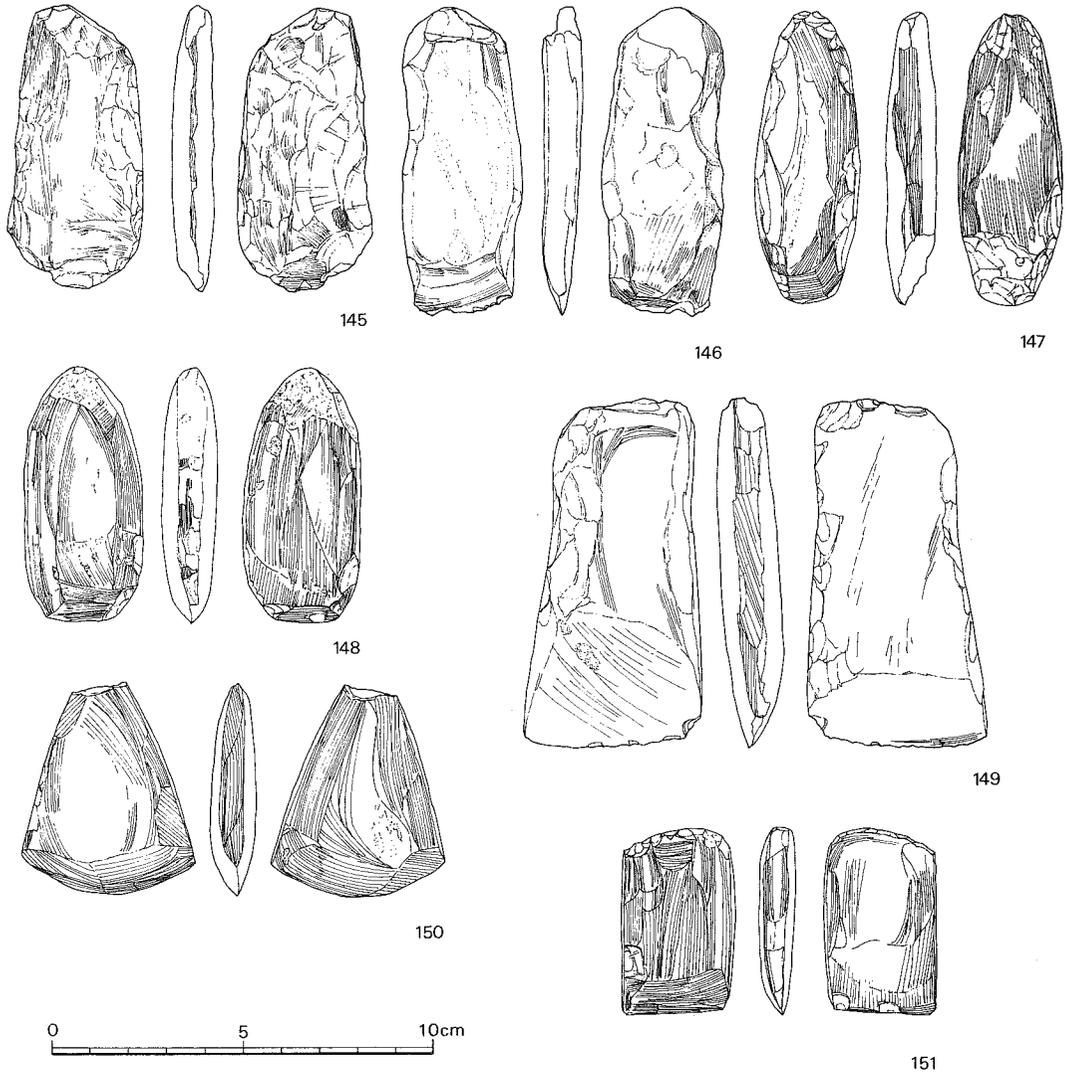
磨製と打製の石斧がある。磨製石斧では蛇紋岩製が多数出土している。打製の石斧は安山岩系の扁平打製石斧である。

小型磨製石斧 (145~151)

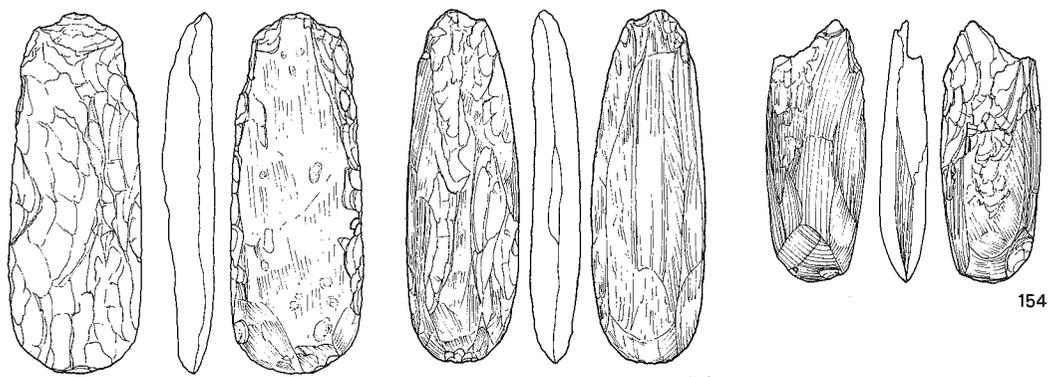
基部が細くなるものと刃部とほぼ平行をなすものがある。また、刃縁は円刃^{註3}のものと直刃とがある。刃部の作出は、151をのぞいて両刃である。石質は、145・147~149・150が蛇紋岩で146が玄武岩質151が粘板岩質のものである。

大型磨製石斧 (152~163)

これにも、基部と刃部の幅が平行な短冊形のもの、基部端と刃部が狭く基部中央がふくらみかけんの鏢形のもの、刃部が基部より幅広のもの等がある。刃縁は、159・160が欠損のため不明であるが他は全て円刃である。刃部は、158が両平刃である他は、両刃である。石材には蛇紋岩が152~162で、163が頁岩を使用。



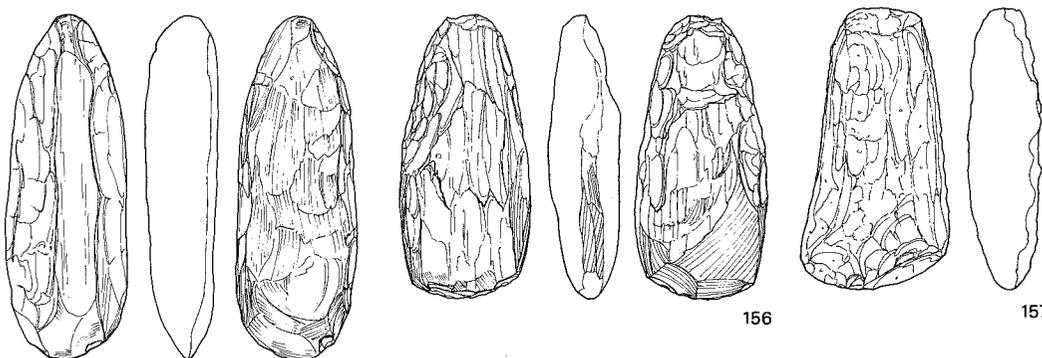
第17図 石器 ⑫ (½)



152

153

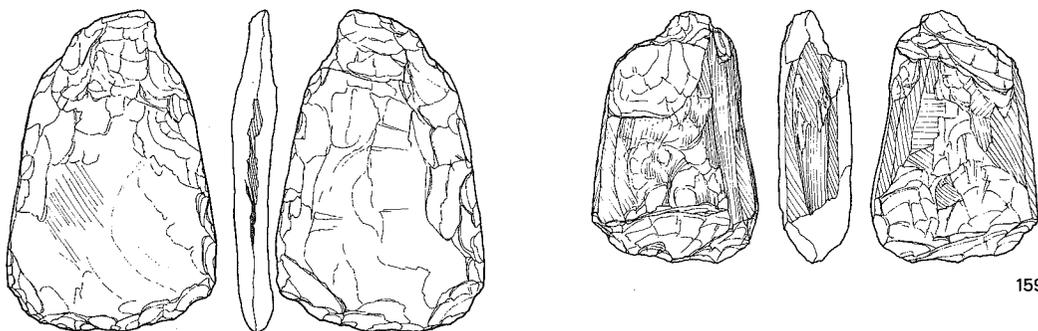
154



155

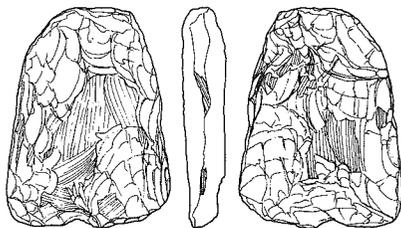
156

157



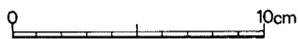
158

159

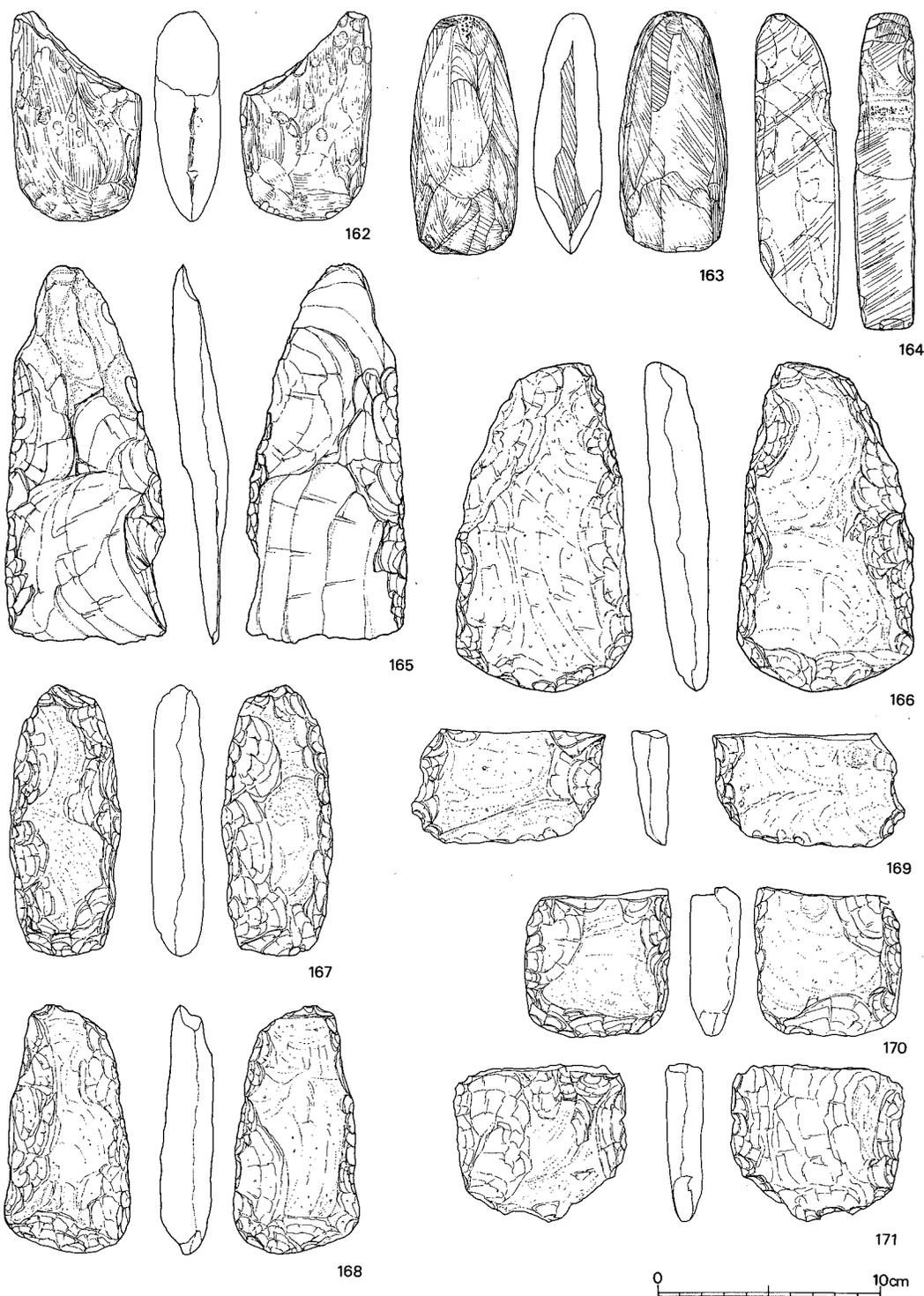


160

161



第18图 石器 ⑬ (1/3)



第19图 石器 ⑭ (1/8)

抉入片刃石斧 (164)

B-12区石垣より出土。刃縁は直刃で、基部 $\frac{1}{3}$ 程に抉5mm幅20mmを作出している。

打製石斧 (165~171)

169・170が刃縁直刃で他は、円刃である。石材は安山岩を使用。165・両側縁に二次調整行なう。167・168は断面レンズ状をなす。

磨製石斧未製品 (172~175)

いずれも、蛇紋岩の石材である。172・刃部から基部端までの剥離を正面に施す。裏面の一部を剥離するが、自然面残したままである。173・基部正面の左側に磨きをかけた状況があるが、刃部は、剥離段階で終わっている。174・刃部作出の剥離と基部整形段階である。裏面扁平な自然面の状態で残す。175・表皮を一撃で剥離した状態にあり、表皮除去作業が素材としての使用段階かのいずれかである。

石錘 (第20図・第21図・第24図)

タイプとしてⅠ型・Ⅱ型・Ⅲ型・Ⅳ型^{註4}・有溝石錘に分類できる。石材は、結晶型岩(緑色)・蛇紋岩・輝石安山岩を原材としている。176・Ⅳ型で4箇所を打欠している。177・蛇紋岩をもちいたⅠ型である。178・輝石安山岩を利用し、中央部側縁を利用の磨耗痕のあるⅠ型である。

179・Ⅰ型で両側縁を打欠する。180・短軸部を大きく剥離し、長軸部には、小さな剥離が残るⅣ型。181・長軸部に打欠があるⅡ型。182・183は長軸部に打欠があるⅡ型である。184・185は長軸上部端に浅い打欠があるが、下部にはみられない。186・187・230には長軸に打欠があるⅡ型。188・189は短軸に打欠をもつⅠ型190~192はⅡ型で191・蛇紋石斧を転用し、3箇所に打欠をもうける。192・231は長軸部の打欠深部が深いものである。

異形十字形及び十字形石器 (第22図194~199)

石材は、いずれも結晶片岩を使用。194~197・上部が窠状にまるみをもち、下部が逆T字状を呈する。198・十字形石器にあたるものである。199・縦長の結晶片岩に両縁から打撃痕が認められる。

砥石 (第22図200~203)

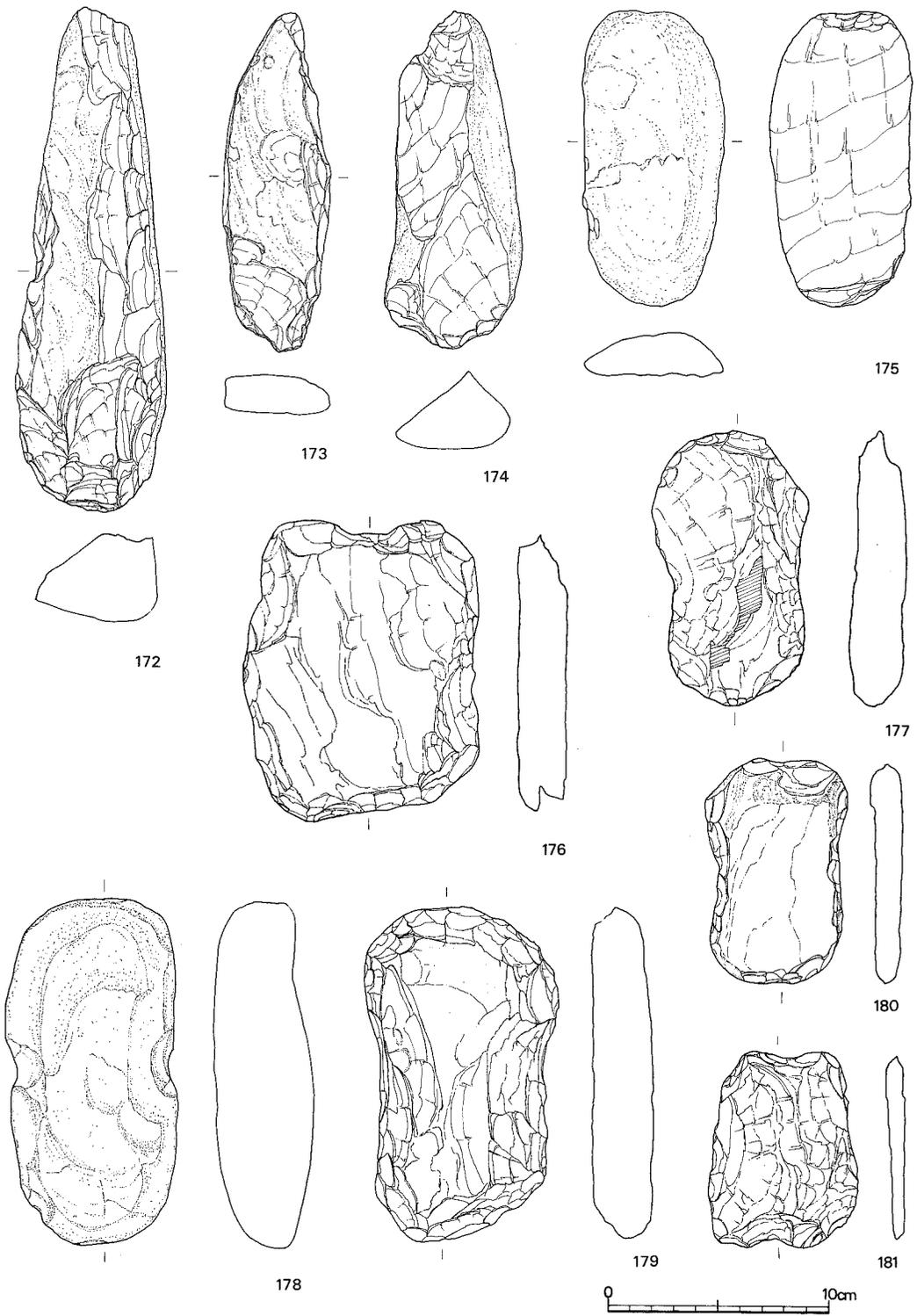
いずれも砂岩を石材として使用。202・凹石として転用していて、敲打による凹が残る。

不明石器 (第22図204・205)

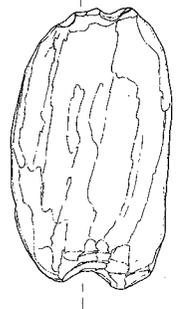
204・砂岩を利用して、上部につまみをもち断面扁平で、全周に渡り調整痕がある。一見石匙状を呈する。205・結晶片岩を研磨し、上部に穿孔をもつ側縁はよく面取りが施されている。

凹石・磨石 (第23・24図)

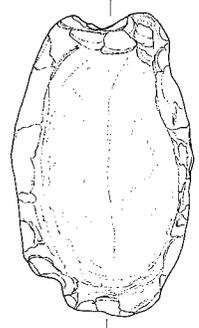
総計で、520点の出土があった。凹石にも両面と片面使用あるいは、大小の違い等とがある。従来植物加工道具と云われるものであるが、海岸部において多量の出土があったことは、魚撈に関係する使用方法を考慮する必要がある。



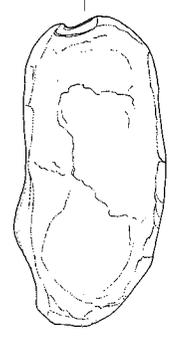
第20図 石器 ⑮ (1/3)



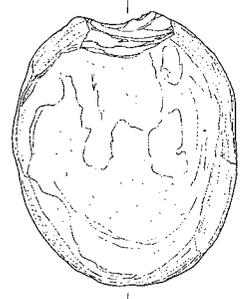
182



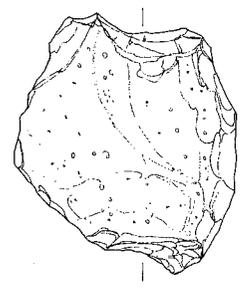
183



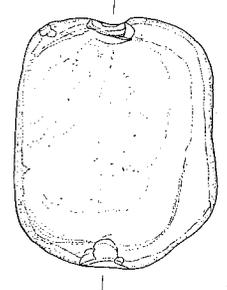
184



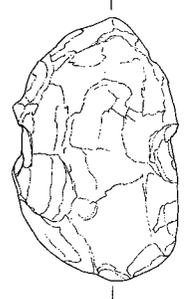
185



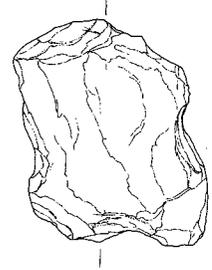
186



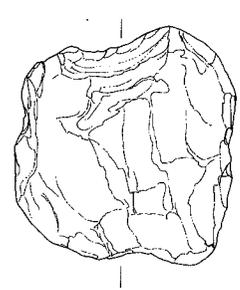
187



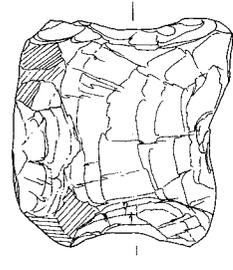
188



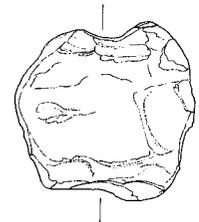
189



190



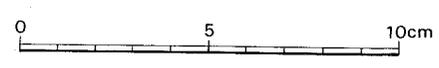
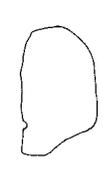
191



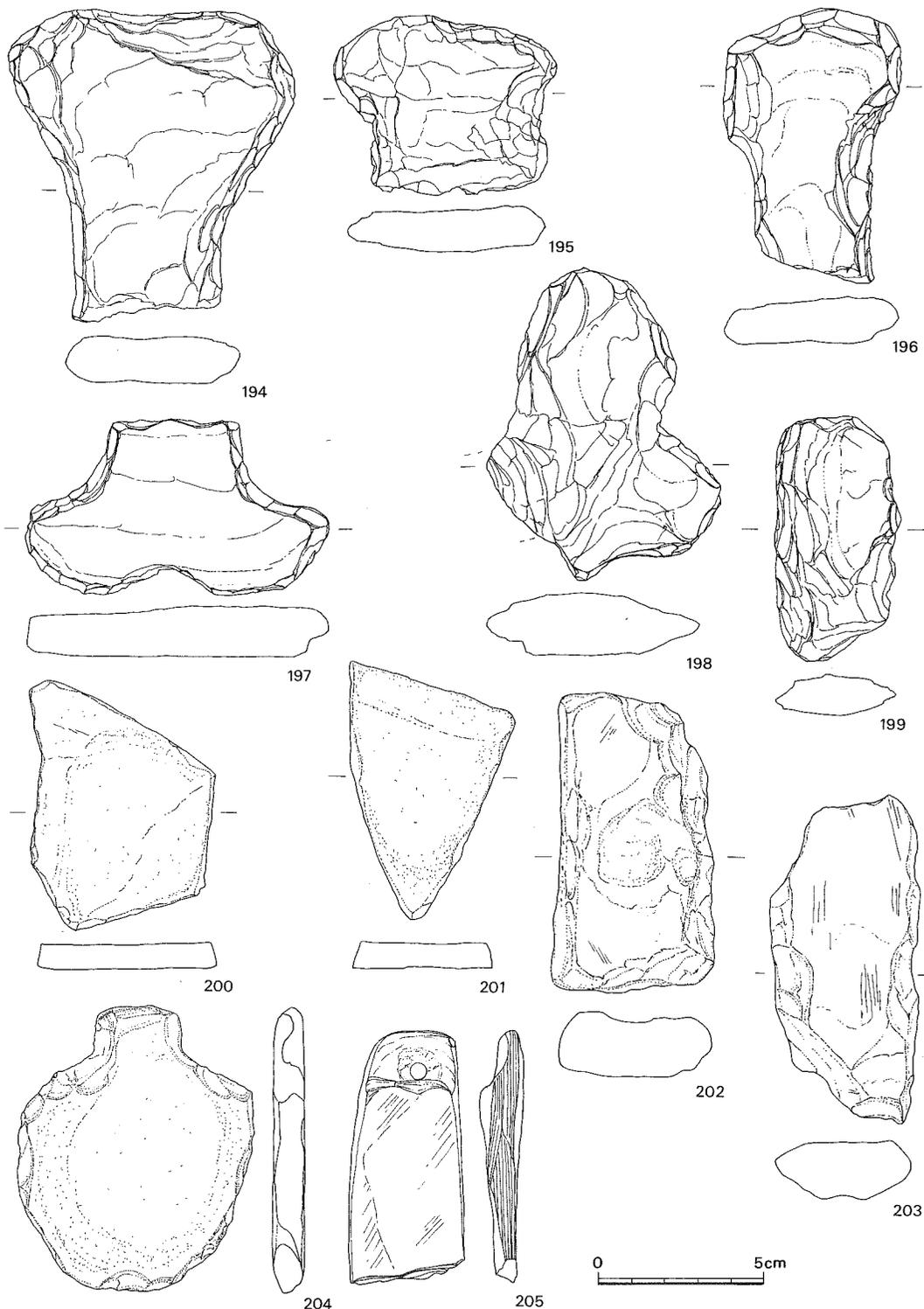
192



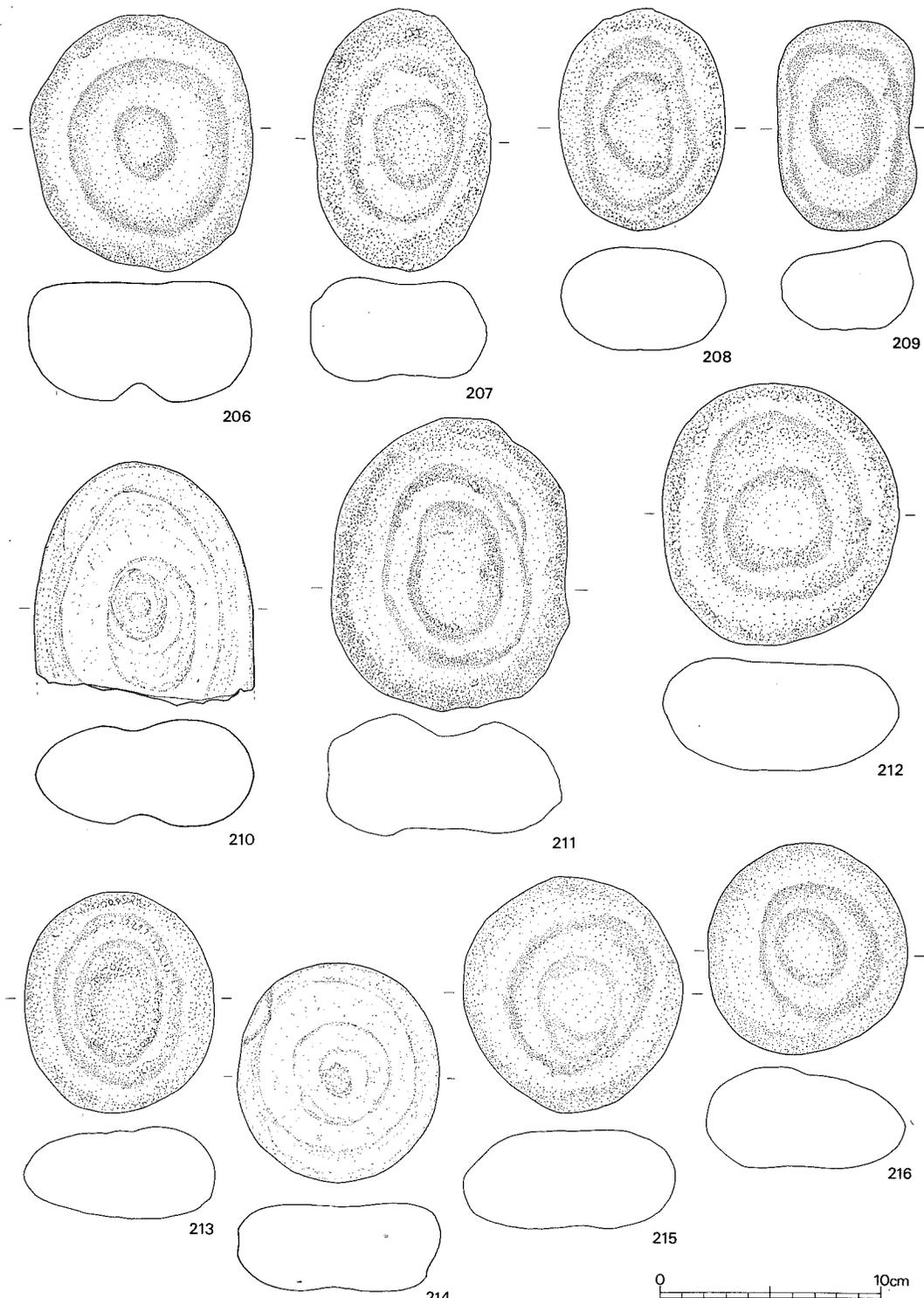
193



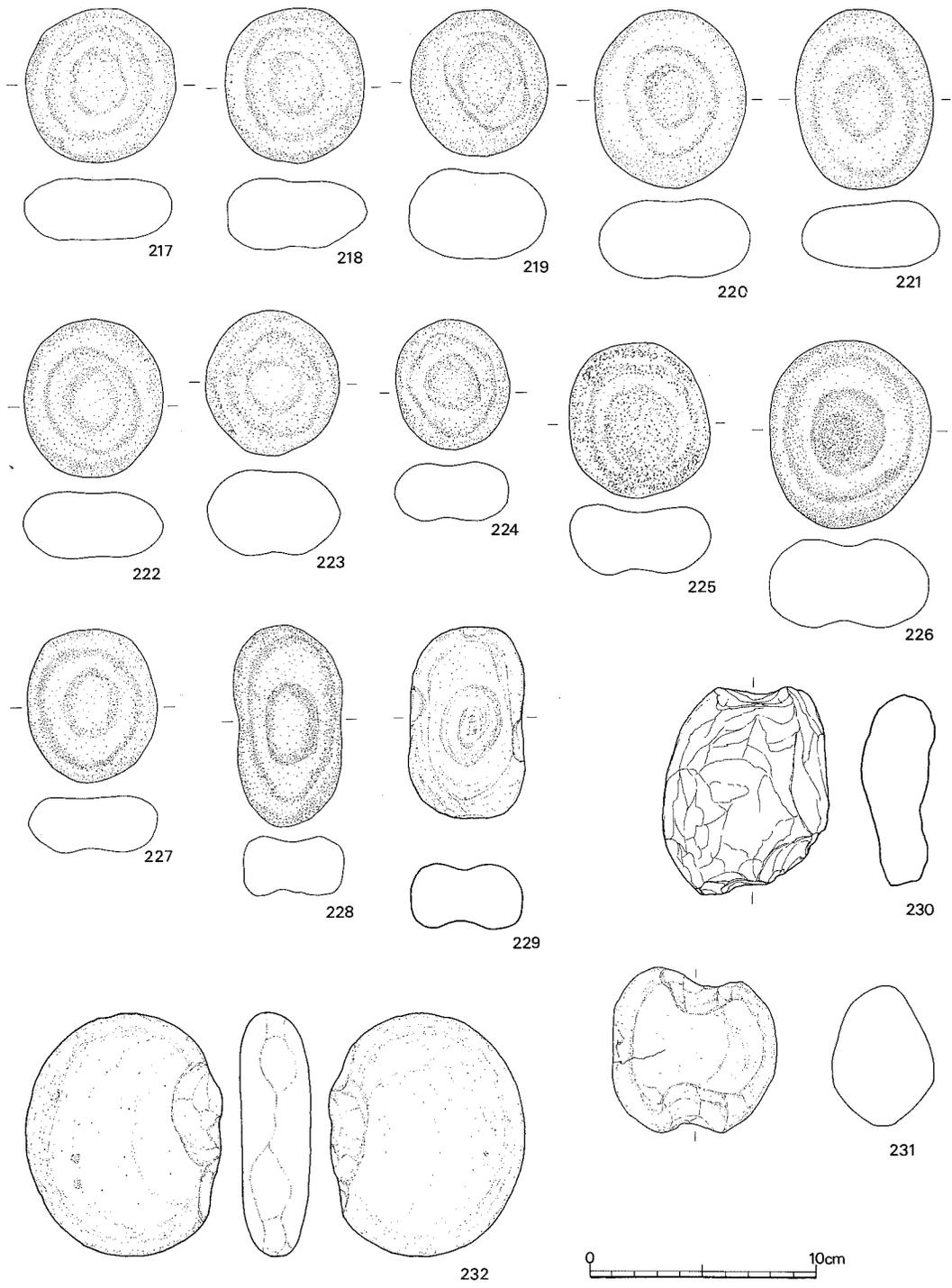
第21图 石器 ⑩ (1/2)



第22図 石器 ⑰ (1/2)



第23図 石器 ⑬ (1/3)



第24图 石器 ⑱ (1/3)

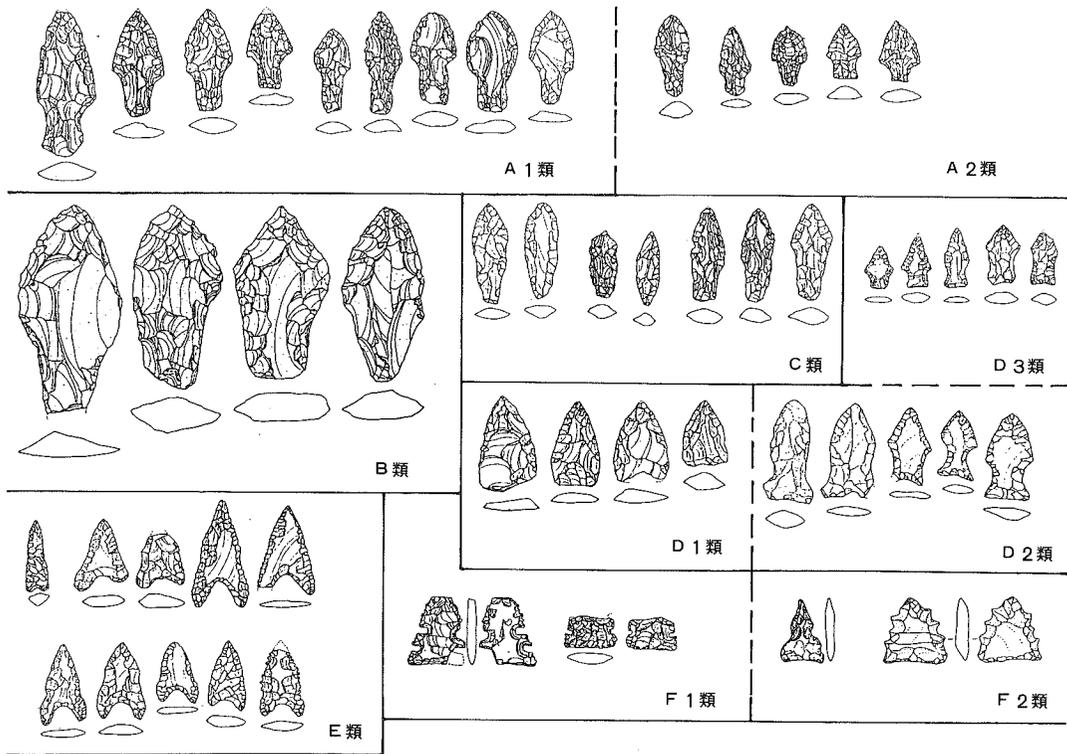
礫器 (第24図 232)

円礫正面右側からと裏面左側から中央部を打撃した石器である。石材は、安山岩。

以上である。この他、紙面のつごうで図示しえない遺物が多数あり、別の機会があれば報告を行いたい。(町田)

註1 橘 昌信「石鋸」史学論叢第10号 別府大学史学研究会1979年

この中で石鋸をA1類～F2類に分類してあり、これに相等する資料を文中で、記し、分類例を図にした。

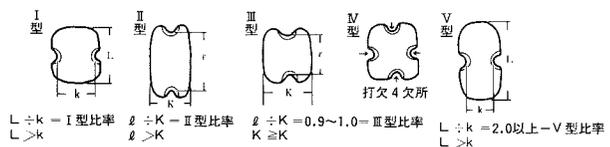


第25図 橘 昌信分類「石鋸」より

註2 註1のP89に記載のある箆状を呈した石器

註3 佐原 真「石斧論」『考古論集慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集別冊』1977年

註4 長崎県教育委員会「礫石錘」『堂崎遺跡』長崎県文化財調査報告書第58集



第26図 礫石錘比率計測法模式図

石器重量表 ①

図番	出土区	器種	重量(g)	図番	出土区	器種	重量(g)	図番	出土区	器種	重量(g)
(6) 1-1	A 8-6	台形様石器	3.9	18	A14-5	石 鏃	1.6	38	B11-6	彫 器	2.7
1-2	B11-6	ナイフ形石器	3.1	19	B10-5~6	〃	0.7	39	AB10-3	〃	2.2
1-3	A 5-2	〃	0.7	20	A11-6	〃	1.4	40	B11-3	〃	2.8
(7) 1	A 7-2	石 鏃	0.3	21	B17-8	〃	3.5	41	B 7-2	石 核	8.9
2	A12-5	〃	0.5	22	B11-5	〃	1.1	42	A 7-2	〃	17.3
3	A11-6	〃	0.4	23	A14-5	〃	2.0	(9) 43	B12-5	大型石銛	72.7
4	B11-6	〃	0.7	24	B14-2	〃	3.8	44	A 3-3	〃	58.2
5	A13-5	〃	0.9	25	A15-8	〃	2.6	45	A 2-3	〃	33.4
6	A10-7	〃	1.1	26	B15-2	〃	2.4	46	A11-5	〃	50.8
7	B10-5~6	〃	0.5	(8) 27	A1-3~4	〃	2.5	47	B18-5	〃	54.6
8	A11-6	〃	0.8	28	A13-8	〃	2.1	48	A11-6	〃	45.4
9	A15-8	〃	1.0	29	AB10-5	〃	5.4	49	A18-2	〃	92.75
10	A10-5	〃	1.3	30	B11-6	〃	4.2	50	B11-5	〃	43.5
11	A11-7	〃	1.3	31	B11-6	錐状石器	1.8	(10) 51	B11-6	中型石銛	25.6
12	B16-5~8	〃	1.0	32	A14-5	〃	2.7	52	B11-6	〃	24
13	A10-5	〃	2.8	33	A13-5	〃	3.3	53	B11-6	〃	40.2
14	A11-5	〃	0.7	34		異形石器	0.5	54	A 5-2	〃	35.4
15	A16-5	〃	0.7	35	BA10-4	〃	1.6	55	B18-5	〃	28.9
16	B15-5~8	〃	1.4	36	B11-6	〃	2.6	56	A18-5	〃	40.0
17	B12-5	〃	2.0	37	B11-6	彫 器	2.6	57	B18-1・2	〃	27.6

石器重量表 ②

図番	出土区	器種	重量(g)	図番	出土区	器種	重量(g)	図番	出土区	器種	重量(g)
58	A19-2~5	籠状石器	38.5	(12) 78	B11-5	小型石鋸	8.6	98	A16-5	スクレイパー Ⅱ類 a	37.1
59	B3-1	〃	30.4	79	B13-1	〃	5.2	99	B11-6	〃	16.1
60	A15-2	〃	13.0	80	A11-5	〃	3.3	100	A17-5	〃	31.1
61	A16-5	〃	11.2	81	B18-2	〃	3.6	101	B11-6	〃	26.5
(11) 62	B-3・4	中型石鋸	24.4	82	A13-2	〃	13.0	102	A18-5	〃	31.5
63	B16-1~5	〃	23.0	83	B17-5	〃	5.4	103	A17-2	〃	22.3
64	B14-2	〃	20.9	84	B19-1	〃	7.8	104	B11・12~5	〃	28.0
65	A16-5	〃	10.5	85	A18-2	〃	8.3	105	B19-5	〃	23.0
66	A17-5	〃	14.7	86	B11-6	〃	2.3	106	B10-5~6	〃	7.6
67	B19-2	〃	18.1	87	B11-5	中型石鋸	19.3	107	A19-5	〃	20.8
68	A16-2	〃	8.9	88	B12-4	スクレイパー Ⅰ類	8.5	(14) 108	AB10-5	スクレイパー Ⅱ類 b	120
69	B19-8	小型石鋸	8.1	89	A17-2	〃	6.4	109	A11-石垣	〃	54.9
70	B11-6	中型石鋸	21.2	90	B11-6	〃	26.5	110	A2-1~3	〃	50.25
71	A18-5	〃	17.0	91	B11-4	〃	6.8	111	B12-石垣	〃	130
72	A17-8	〃	4.4	92	B12石垣	〃	18.8	112	A11-5	〃	35.6
73	A16-8	〃	15.3	93	B8-4~6	〃	15.4	113	B11-6	〃	86.5
74	A19-2	〃	23.3	94	A10-6	〃	45.3	114	A2-4	〃	130
75	B15-8	〃	12.0	(13) 95	A10-5	スクレイパー Ⅱ類 a	17.7	115	B11-5	〃	63.65
76	A15-5	〃	10.3	96	B11-6	〃	16.6	116	B10-6	〃	83.6
77	A15-2	小型石鋸	7.4	97	B11・12-5	〃	17.0	117	A11-5	〃	100

石器重量表 ③

図番	出土区	器種	重量(g)	図番	出土区	器種	重量(g)	図番	出土区	器種	重量(g)
118	A 2 - 4	スクレイパー Ⅱ類 b	400	138	A11-6	スクレイパー Ⅱ類 e	7.0	158	A11-石垣	〃	195
⁽¹⁵⁾ 119	B11-6	錐状石器	25.2	139	B17-8	〃	4.5	159	B11-7	〃	245
120	B11-6	〃	23.7	140	A10-4	〃	11.8	160	B11-	〃	125
121	B11-6	〃	17.3	141	A・B11-6	〃	7.3	161	B11-5	〃	150
122	A11-6	スクレイパー Ⅱ類 C	9.8	142	B11-5	〃	16.9	⁽¹⁹⁾ 162	A10-2	〃	200
123	A18-8	〃	8.1	143	A5-2~3	〃	16.3	163	B12-石垣	〃	230
124	A11-7	〃	20.6	144	B11-6	〃	15.2	164	B12-石垣	挟入片刃石斧	250
125	A11-6	〃	15.1	⁽¹⁷⁾ 145	A11-5	石斧	37.0	165	B11-6	打製石斧	250
126	A10-6	スクレイパー Ⅱ類 d	95.8	146	B11-5	〃	40.0	166	B12-石垣	〃	380
127	A 2 - 4	〃	61.6	147	B11-5	〃	38.7	167	B11-5	〃	220
128	A13-5	〃	25.6	148	B11-6	〃	51.3	168	B 5 - 3	〃	200
129	B19-8	〃	35.5	149	B11-6	〃	94.6	169	B11-6	〃	100
130	A13-1	〃	43.3	150	AB10-6	〃	40.15	170	A11-5	〃	160
131	A10-3	〃	73.1	151	A11-5	〃	25.1	171	B11-6	〃	120
⁽¹⁶⁾ 132	B11-6	スクレイパー Ⅱ類 e	6.3	⁽¹⁸⁾ 152	A11-5	〃	182	⁽²⁰⁾ 172	B12-石垣	石斧未製品	750
133	B11-6	〃	2.8	153	B10-1	〃	150	173	A12-石垣	〃	180
134	A10-6	〃	7.8	154	B11-7	〃	87	174	B11・12-5	〃	340
135	B11・12-5	〃	9.0	155	A11-6	〃	250	175	A11-6	〃	220
136	A11-4	〃	2.7	156	B11-6	〃	220	176	B11-5	石錘	645
137	B11-6	〃	5.5	157	B12-石垣	〃	245	177	B11-6	〃	260

石器重量表 ④

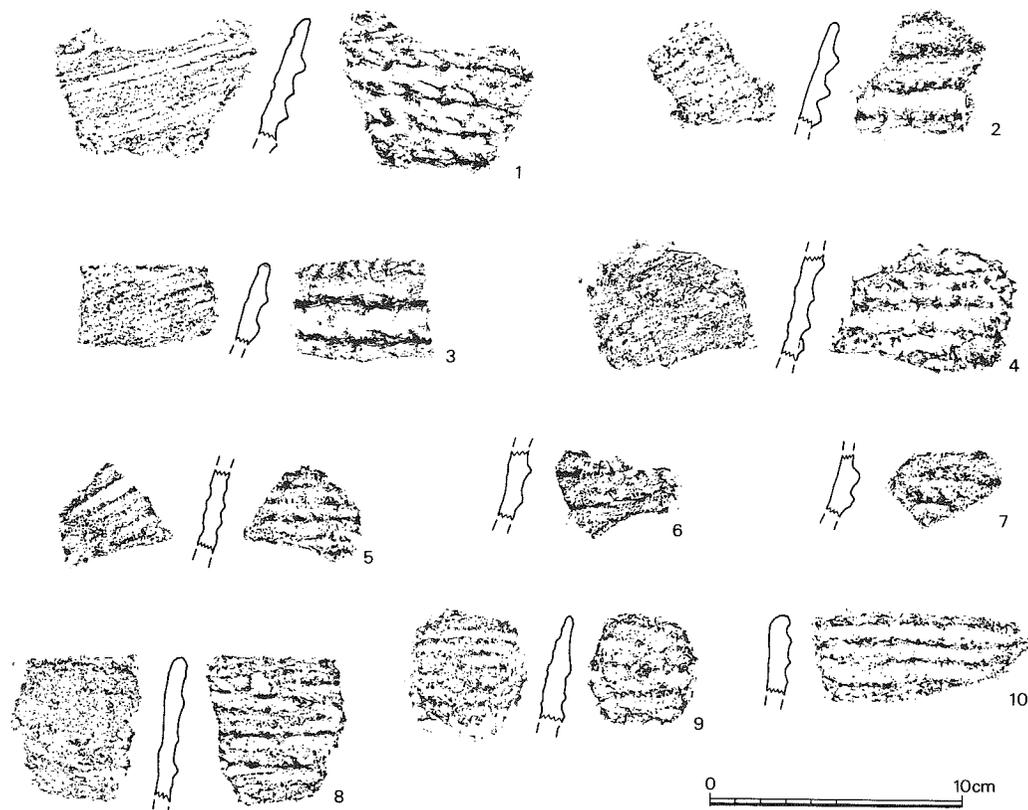
図番	出土区	器種	重量(g)	図番	出土区	器種	重量(g)	図番	出土区	器種	重量(g)
178	A10-5	石錘	630	198	A11-5	十字形石器	140	218	B16-2	凹石	160
179	A17-2	"	620	199	B11-6	異形十字形石器	50.35	219	B11-6	"	230
180	A11-6	"	155	200	B12-5	砥石	52.6	220	B12-4	"	300
181	A11-1	"	100	201	B11-6	"	37.6	221	B10-5~6	"	240
(21) 182	B11-6	"	61.55	202	B11.12-5	"	135	222	A11-7	"	200
183	B11-5	"	110	203	B11-5	"	110	223	B11-6	"	210
184	A17-5	"	46.75	204	AB10-5	不明石器	83.15	224	B5-3	"	120
185	A16-6	"	100	205	B11-5	"	43	225	B11-6	"	210
186	A11-6	"	84.1	(23) 206	B11-6	凹石	1.05kg	226	A-10P	"	360
187	AB11-6	"	51.85	207	B12-5	"	720	227	A11-7	"	140
188	B11-5	"	62.3	208	B11-6	"	540	228	A10-5	"	160
189	B12-4	"	62.15	209	A10-5	"	400	229	B12-5	"	240
190	A11-6	"	81	210	B11-5	"	840	230	B11-H	石錘	280
191	A11-6	"	50.15	211	B11-5	"	940	231	A5-2	"	270
192	A10-6	"	31.5	212	A11-5	"	1.06kg	232	B12-石垣	礫器	470
193	A11-4	"	17	213	A11-5	"	550				
(22) 194	B11-6	異形十字形石器	160	214	A11-5	"	620				
195	B11.12-5	"	67	215	B11-6	"	730				
196	B11-6	"	88.2	216	B12-石垣	"	610				
197	B11-6	"	91.55	(24) 217	B12-石垣	"	190				

3. 土 器

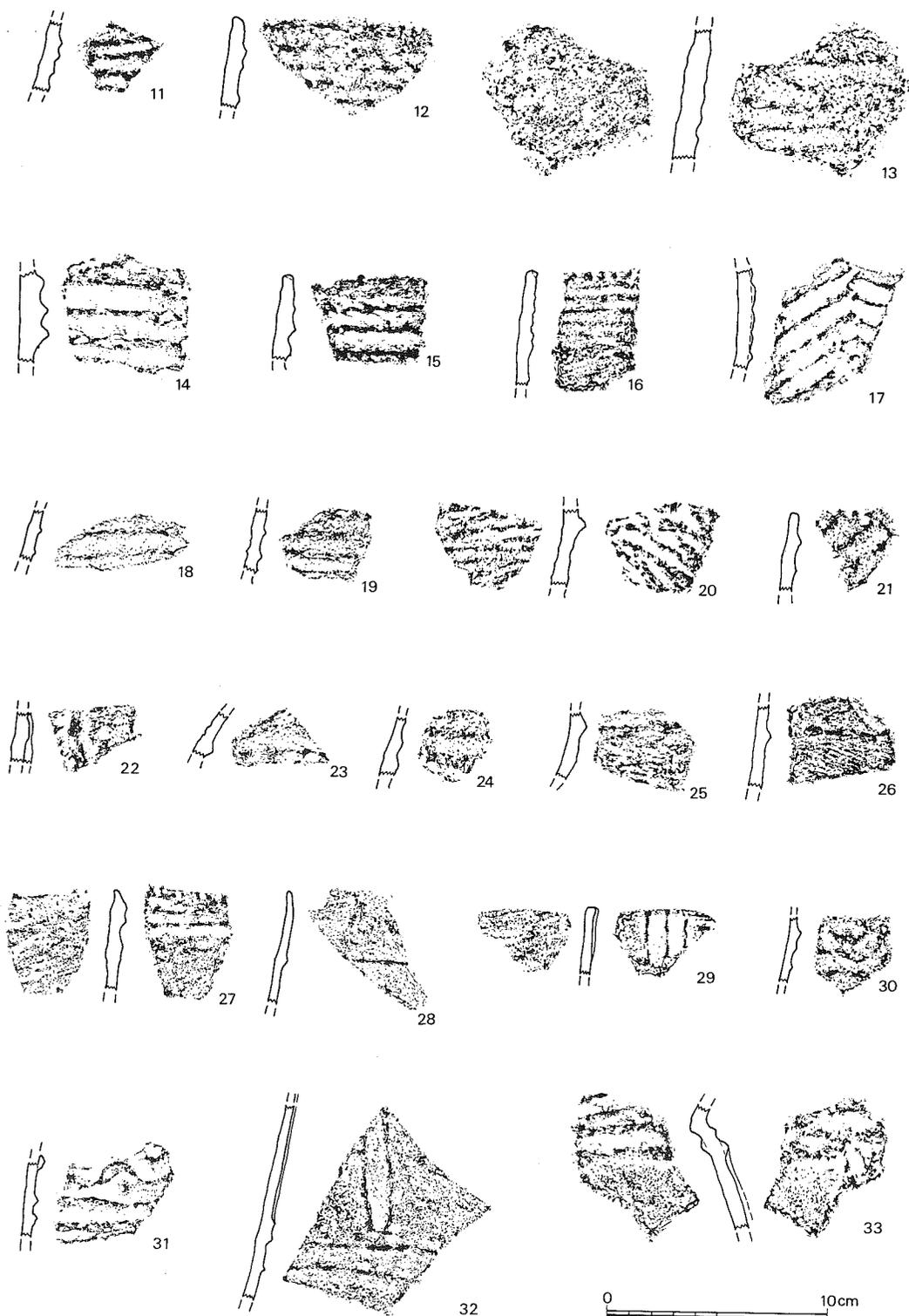
早前期の土器（第27～29図・図版24～26）

轟式土器と曾畑式土器が出土し、量的には後・晩期のものに次いで多い。轟式土器は隆起線を文様の主体とするものであるが、隆起線の太さがかなり大きいものもあり、いわゆる「ミミズばれ状」と表現される細い隆起線を持つものもあって、その種類も多い。色調としては暗褐色のものが多いが、濃い黄褐色や黒褐色のものも認められる。全てが破片で、形状は不明である。また法量についても厚さ以外は知り得ない。

第27図1～4は太くて粗い隆起線を貼り付けたものであるが、5～10のように隆起線が磨耗したものも認められる。1はわずかに口縁の先端部が残る。潮のせいで固くなり、茶褐色を呈している。2も先端を丸くおさめた口縁部がわずかに残る。3は口唇部に刻みを入れている。茶褐色を呈し、やや固くなっている。4は荒い隆起線を4本残しているが、貼り付けを思わせる痕跡がある。5は隆起の線の間が小さい。8は直立する口縁部で、先端に刻みの痕跡がわずかに認められる。1・5・8の内面には横、斜め方向に荒い条痕が付けられている。第28図の11～15も太目の隆起線文を持つが、風化しているものもある。16は薄手のもので、口縁部に刻



第27図 縄文式土器(1)



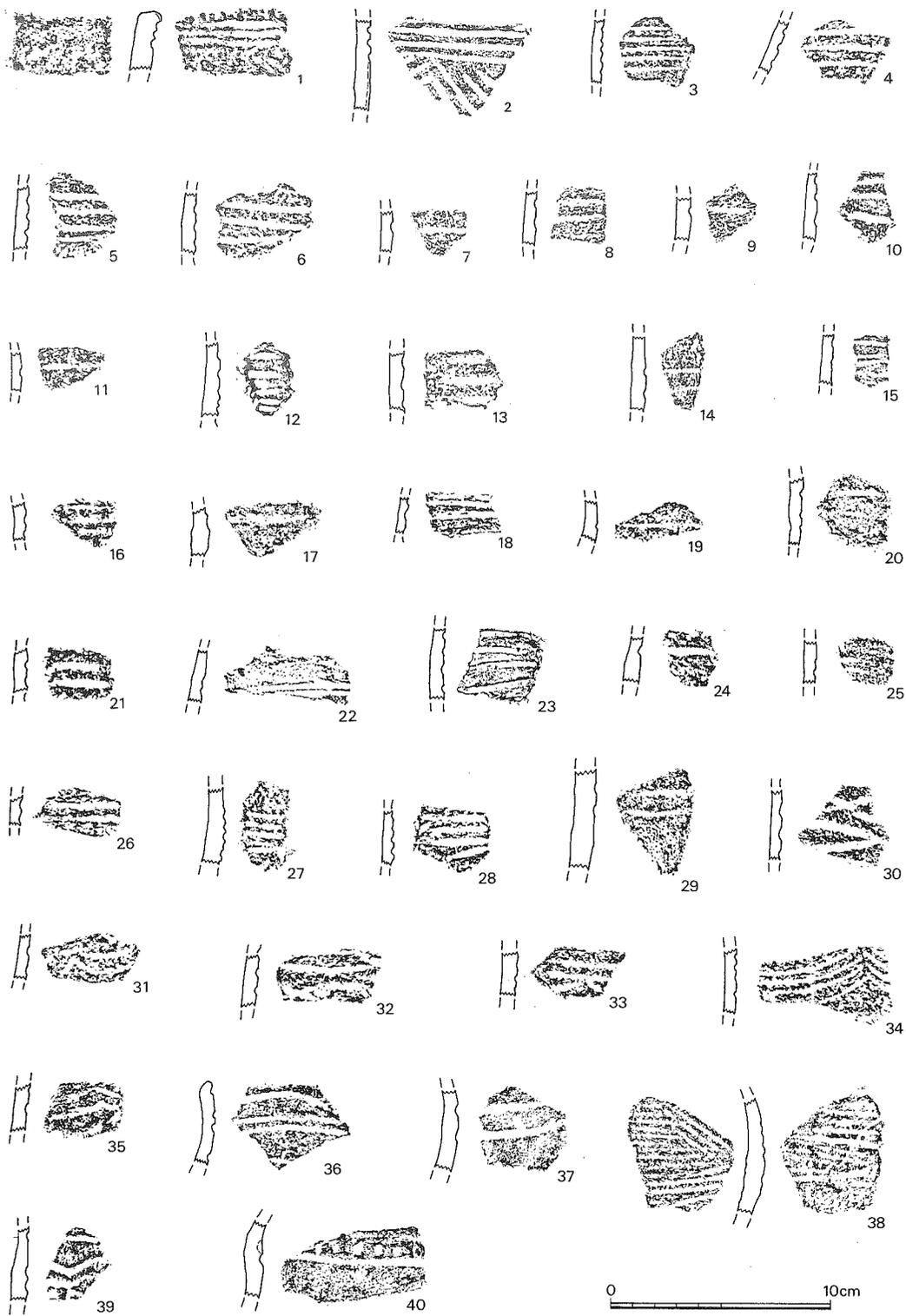
第28図 縄文式土器(2)

みがある。17はやや薄くなり、隆起線を山形に連ねていく形になるものと思われる。これにも貼り付けた部分が一部に残っている。18~21は風化のため器表がかなり荒れている。20は内外面に荒い条痕を残し、外面に突起状に貼り付け文がある。21~25も風化が進み正確な形を残していない。27は内面に条痕が付き、口縁部に刻み目を残している。28は薄い作りで、いわゆるミミズばれ状の細い隆起線が巡っている。29は上端部をやや平らにした口縁部で、外面に縦に細い隆起線を貼り付けている。31は横方向の隆起線文に曲線の突帯を貼り付けたものである。32 横方向への二条の細隆起線文と、先端部が「U」字になって結ばれる形の二本の縦方向の細隆起線文が貼り付けられている。以上の29~32の、細い隆起線文を持つものは総じて薄い作りである。33は鉢形の土器の胴部と頸部の付近であろう。外面には横方向に二本の隆起線文と、縦方向には最低二本の隆起線文が残る。内面にも二本の突帯を横方向に巡らしている。

曾畑式土器（第29図・図版26）

曾畑式土器は、細い沈線の幾何学的文様を持つことと、胎土に滑石粉や滑石の粒を混入すること、総じて作りが薄いことなどを特徴としているが、築崎遺跡出土のものでは典型的といわれるようなものは多くはない。曾畑式土器の第1の特徴としてあげられる幾何学的な模様を作る沈線にも大きさに差があり、深さもそれぞれ異なっている。それぞれの沈線の間隔についてもさまざまで、口縁部に細い刻みを施されたものもある。第2の特徴とされる滑石の混入については、感じとしては少ないようである。この点、滑石と原産地を同じくする結晶片岩・蛇紋岩で作られた製品が多いことと合わせて考えると意外な感を受ける。厚さについても驚くほど薄い、というものは、むしろ少数の部類に入る。色調は濃い茶褐色が多く、茶褐色、黄褐色を呈するものもある。滑石を混入したものは赤褐色を呈するものが多い。この点、同じく滑石を混入した中期の土器も似たような色調を呈し、製作・焼成上の問題として興味をひかれる。

1は口縁部で、先端は平らにおさめている。外面には刻みが入り、その直下に横方向に3条の沈線を巡らしている。その下に斜めに沈線の一部が認められる。厚さは1cm以上ある。2は横方向に4条の沈線が巡り、斜め方向への沈線が残る。3~9までは細くて比較的ていねいな感じの沈線が施されているが、10以降はやや雑然となるようである。12は沈線を引ききったままで、線の端部をそろえることはなされていない。23は内面をていねいにナデて仕上げている。沈線を入れた際に、その部分の胎土が器壁より外にはみ出している。潮のせいややや固い。27も同様に固くなっている。28は内面をていねいにナデた痕跡がある。29は厚手の作りで、1cmを超す厚さである。30は薄手で、交わる形に沈線を入れている。31・32・33はわずかに弧をなす沈線が巡る。34は4条の細い沈線が弧をなしており、次の弧に続く部分である。内面はナデて仕上げられたものようである。35・36は3条の沈線をわずかに湾曲しつつ、一箇所へ収束するかのように巡らしている。37は沈線がやや大きくなる。内外面ともナデて仕上げたものと思われる。38は内面に条痕が付き、外面には割合に雑な感じの沈線が施している。39にも変則



第29图 繩文式土器(3)

的な沈線が施され、内面にはナデて仕上げたような痕跡が残っている。40はわずかに胴の張る形のものと思われる。横方向への沈線の上に列点文を巡らしている。内面にはへら状のものでナデたような痕跡が認められる。

図化した40点のうち、滑石を混ぜた胎土を使用したものは、5・6・8・16・18・24・26・32・35・37の10点である。これは全体から見ても同じ傾向で、滑石の原産地の一つである三和町の寺岳南西麓まで、海岸を伝って行っても30kmに達しない位置にある遺跡出土の曾畑式土器としては奇異な感じを受ける。

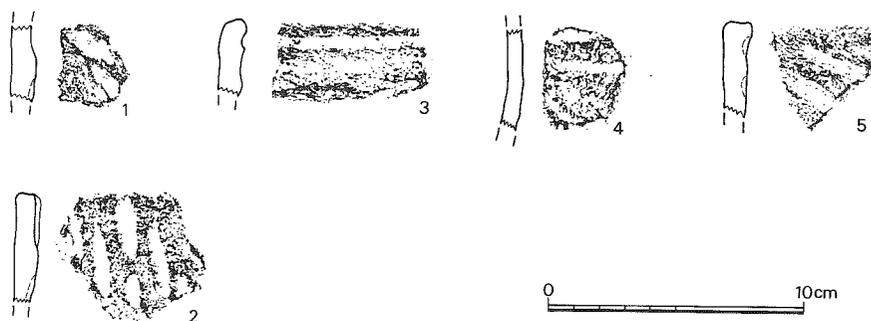
色調は全体的に茶褐色あるいは濃い茶褐色を呈しているが、灰白色のもの(4)、濃い灰色のもの(26・28)、やや赤みの混じるもの(8・9・15・32・37)などもある。

縄文時代中期の土器(第30図・図版27)

縄文時代の土器類のうちでは出土した量が最も少なかった。ここでは11点を図示した。

1・2は太形で短い凹文を縦あるいは斜め方向に施している。2は先端部を平らにおさめた口縁部である。1は赤褐色、2は茶褐色を呈しているが、ともに滑石を含んでいるため灰色を呈する部分もある。3は先端部を平らにおさめ、その直下に二条の凹文を横方向に巡らしている。内面は赤褐色、外面は濃い赤褐色を呈している。4も凹文を持つが、浅い。5は厚目の口縁部の先端を平らにおさめ、凹文を斜め方向に施している。4・5はともに内面が茶褐色、外面は赤褐色を呈している。3～5ともに滑石を含んでおり、厚手の作りである。

いずれも阿高式土器の系統のものと考えられるが、中期でも新しい時期のものと思われる。

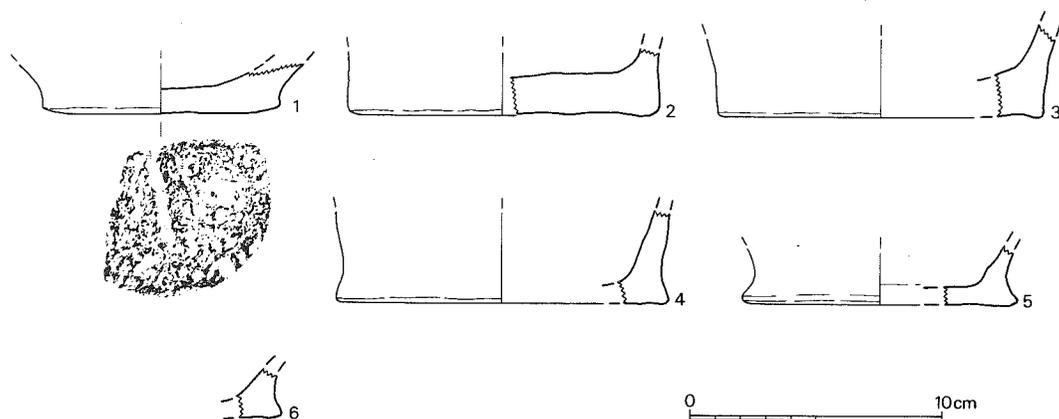


第30図 縄文式土器(4)

縄文中期土器の底部(第31図・図版30)

図示した6点の全てが平底である。1は底部から広がり、体部に続く形のもので、底にクジラの脊椎骨を作業台としていた痕跡が残っている。内外面ともに赤褐色を呈していて、滑石の小片を含む。復原した底部の直径は9.3cmある。2・3ともに厚い作りで凹凸のある底部となっ

ている。復原した底部の直径は、2が12.3cm、3が12.8cmである。4・5は小破片からの復原で、大きさについては断定しがたい。2・4は赤褐色、3は茶褐色、5は黒褐色を呈している。いずれも滑石の粉末や小片が混入されている。



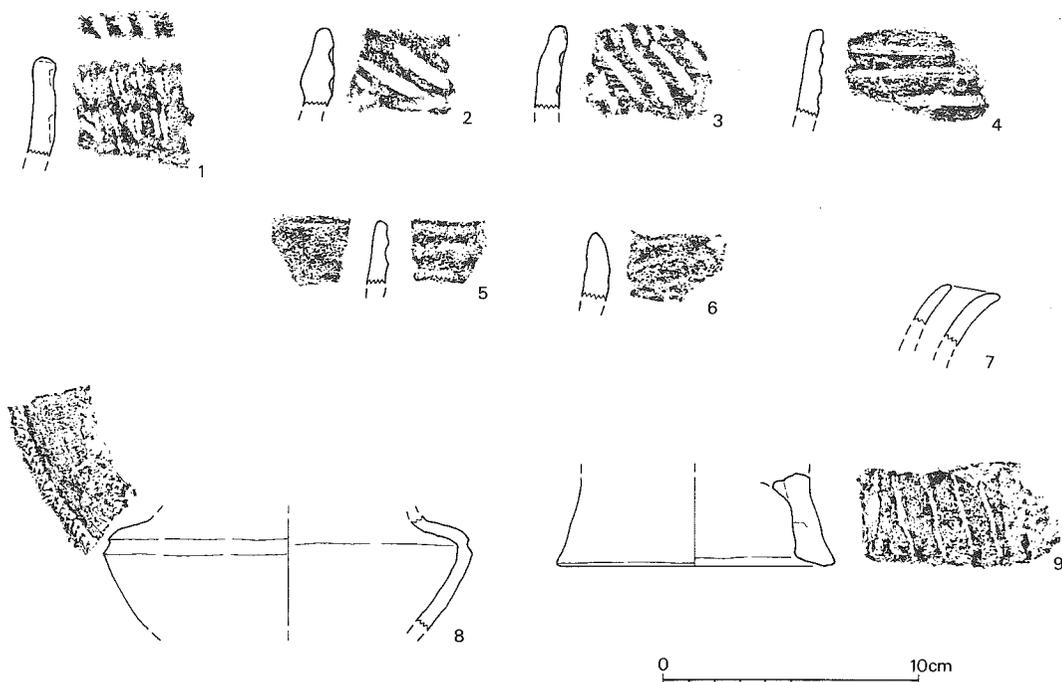
第31図 縄文式土器(5)

縄文時代後期の土器（第32～34図・図版27～29）

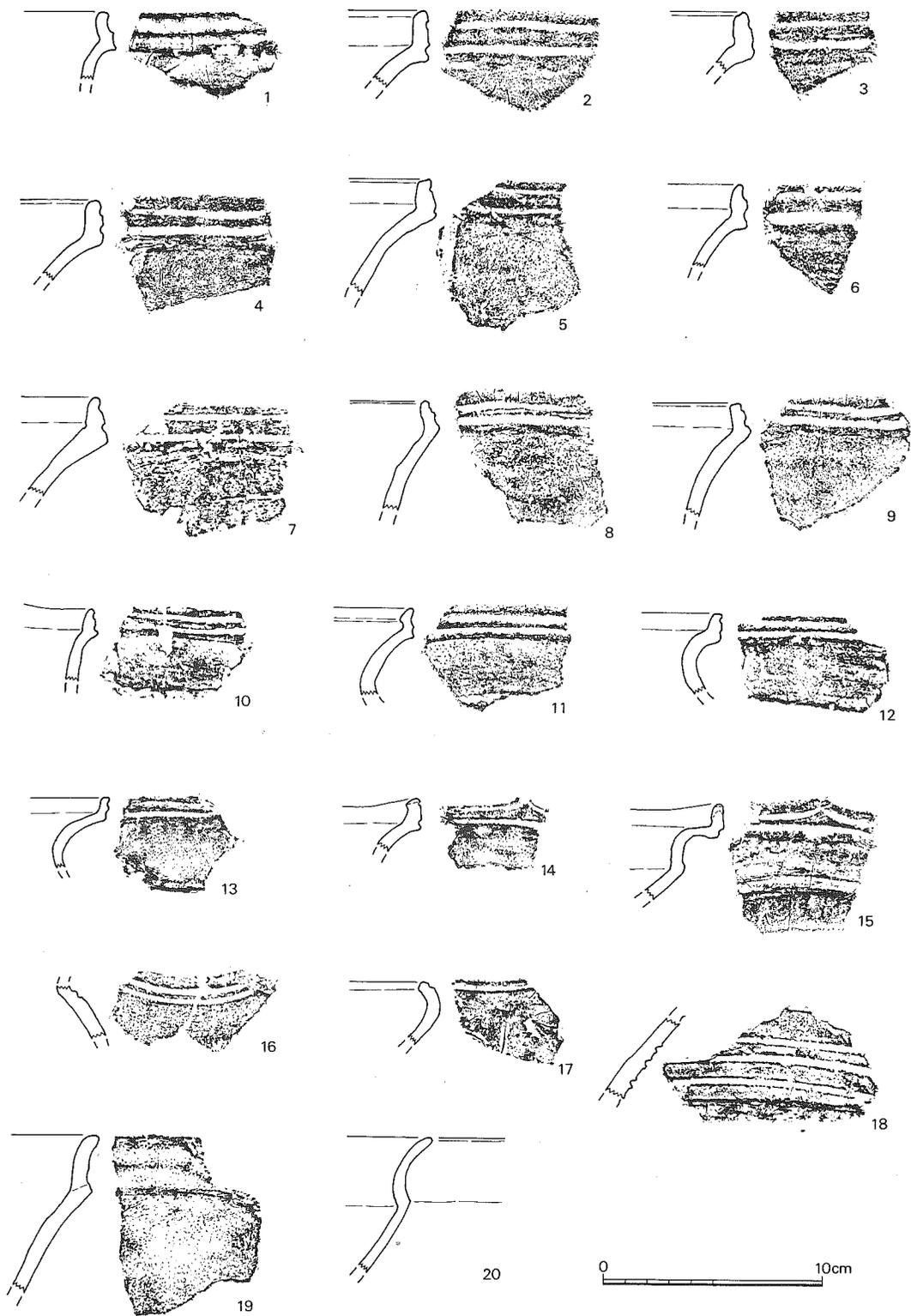
後期の終末期のものが多い。同形のものが多いので図化したもので掲載しなかったものもある。第32図1は口縁部で、上端部に太目の刻みを入れている。口縁直下から2本を一単位とした短い刻みを2列に巡らしているが、3列目があつた痕跡も認められる。やや厚目のもので、内面はナデて仕上げられている。胎土は良質で、赤褐色を呈している。2 先端部を丸くおさめた口縁部で、斜め方向に中太の沈線を施している。また、これに接するように左が下がる形での沈線の一部が残っている。滑石が少量混じり、茶褐色を呈している。3 斜め方向に沈線を入れた口縁部で、黒褐色を呈する。4 先端部を丸くおさめた口縁部で、浅い中太の沈線が横方向に施されている。小砂粒を含む胎土で茶褐色を呈している。5は内外面とも淡い灰褐色を呈しているが、断面部分は黒色に焼けている。先端部は丸くおさめた形である。6 厚目でわずかに内湾した形である。先端部を内側に尖らせ気味に丸くおさめている。外面に右上がりの沈線の痕跡がかすかに認められる。内面はナデて仕上げられたものと思われる。外面は茶褐色、内面は黒褐色を呈している。7 注口土器の口の部分である、湾曲した筒の先端部を斜めに切った形で、淡い茶褐色を呈している。胎土は小砂粒を含む。8 中鉢と思われるが、注口土器の可能性もある。復原胴径は14cmほどで、頸部と肩の部分に格子状の刻みを入れ、疑似縄文としている。内外面とも研磨を加え、黒褐色を呈している。胎土には小砂粒を含む。9は高環形の土器の脚部と考えられ、坏部と剥離した脚端部の直径は11cmほどと思われる。縦に近い斜め方向に、細くて浅い沈線を施している。赤褐色を呈している。

第33図1～10は深鉢形の土器の口縁部と考えられる。1は内外面とも研磨を加え、口縁外面

に太目の凹線を巡らしている。しかし6は下方の沈線が太いことや傾きを考えると、浅鉢である可能性も考えられる。6の内面、7の外表面、9の内外面には研磨の痕跡が明瞭に残っている。いずれも濃い茶褐色であるが、6・7・10は淡い茶褐色を呈している。11~15は浅鉢形の土器の口縁部である。11は凹線を2条巡らせ、一部は研磨の痕跡が残る。12~15は細い沈線を2条巡らせている。14は口縁端部を平らにおさめ、一部を山形に隆起させ、その先端中央部に1箇の刻みを入れている。研磨が内外面に加えられ、黒褐色を呈している。15も14に似た形のもので、これも内外面が研磨されている。赤味がかかった茶褐色を呈している。16は内湾した体部に、直角近くに外方に折れる短い口縁部の続く形の鉢と思われる。頸部に2条の沈線を巡らせている。淡い灰褐色を呈している。17も鉢形の土器の口縁部である。肩の部分が内湾し、先端を若干平らにした口縁で、その外面に1条の沈線を巡らせ、研磨を加えている。内面は淡い褐色、外面は茶褐色を呈している。18は大形の深鉢の口縁に近い部分と考えられる。横方向に3条の沈線があるが、沈線を施す際にその部分の胎土が外方にはみ出している。内面に研磨の痕跡が残っている。19・20も浅鉢形の土器と思われるが、19はやや深くなる可能性もある。19は外反しつつ伸びた体部に、さらに外反する口縁部を継いでいて、その先端部は丸くおさめている。淡い茶褐色を呈し、内外面に研磨の痕跡を残す部分もある。20も19に近い形で、全面に研磨の痕跡が認められる。第34図1~4も浅鉢形の土器である。1は、皿状の体部に直立する短い口縁部を持ち、その外面に2条の沈線状のものを巡らしている。内外面とも部分的に研磨の痕跡



第32図 縄文式土器(6)



第33図 繩文式土器(7)

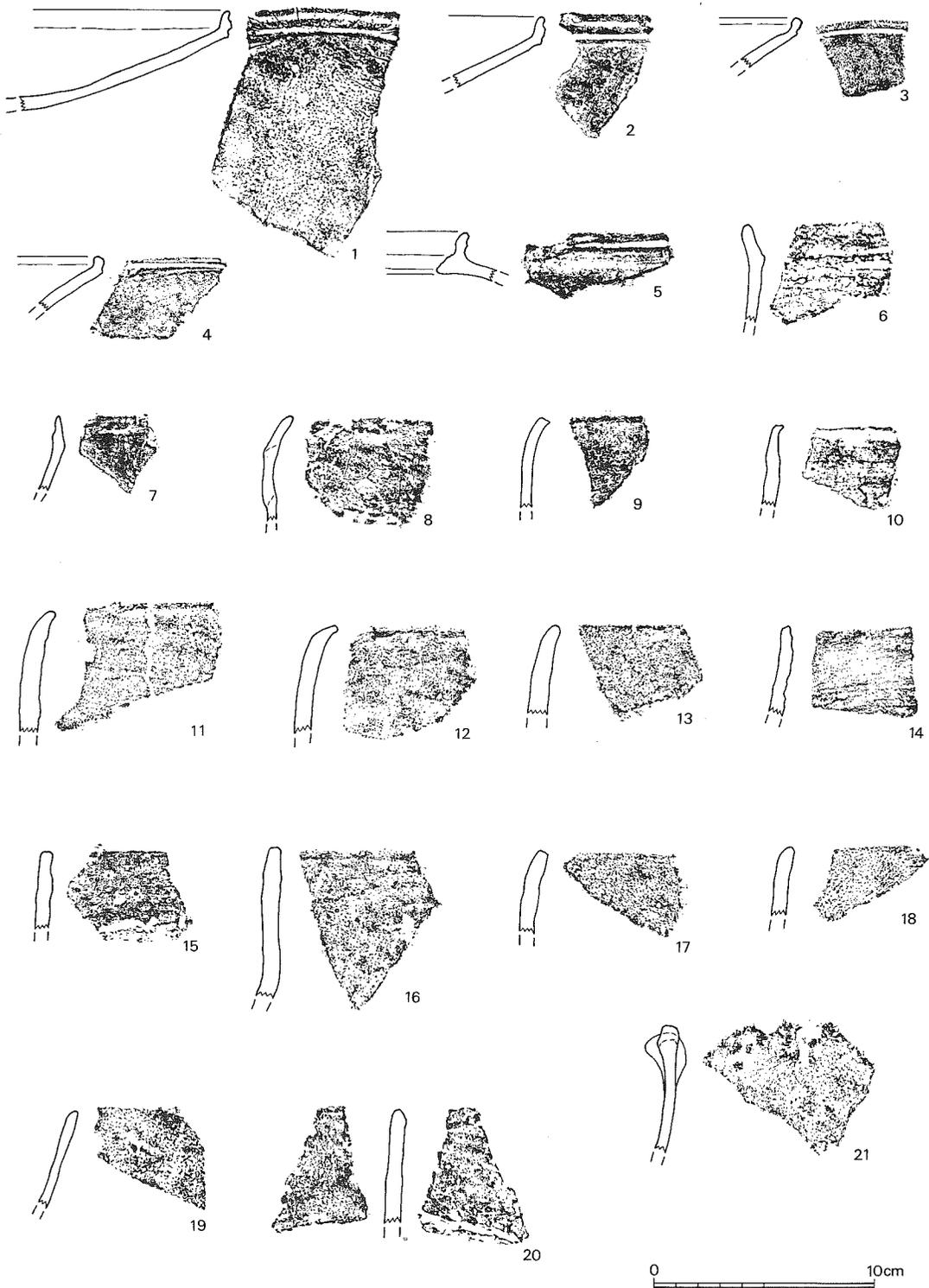
がある。2も1と同じ形のものであるが全面にいい研磨を加えている。茶褐色を呈し、胎土も良質である。3・4は外反しつつ伸びた体部の先端を上方に折り、短い口縁部を付けている。口縁直下には一条の沈線が巡る。3は内外面の一部に研磨の痕跡が残る。茶褐色を呈し胎土も良い。4は内面が赤褐色、外面は茶褐色を呈している。一部に研磨のあとが残っている。5は球形に近い鉢の口縁部である。内湾しつつ内側に伸びた体部を直角以上に外上方に折り、先端部を尖らせ気味におさめている。外面の口縁直下に1条の浅い沈線を巡らしている。内外面に研磨の施された部分が残っている。茶褐色を呈し、良質の胎土である。6以下20までは縄文晩期初頭の粗製の深鉢の口縁部と考えられる。

縄文時代晩期の土器（第34図6～20・図版29・30）

6は口縁下部に段を持ち、そこから内側に傾いている。7は口縁内側に沈線様のくぼみを持ち、外面にも段が付く。先端部は尖らせ気味におさめている。内外面に研磨の痕跡を残す。8は壺形の土器の口縁部と思われるが、作り方が粗い。粘土紐を積みあげた痕跡が内面に残っている。9・10は外反する口縁先端部を平らにし、外方にわずかにつまみ出した形をしている。8は外面に研磨が加えられ、9は内外面ともナデて仕上げた痕跡が認められる。14は外面に条痕が残っている。15は直立する口縁の先端を丸くおさめた形のもので、内面には条痕を残し、外面はナデて仕上げた痕跡がある。16には外面にススが付着した部分がある。17・18とも口縁先端を丸くおさめる形のものである。17は内面に条痕の一部が残り、外面には研磨したような痕跡が残る。18も研磨を受けたように見受けられるが、風化のため断言はできない。19は薄い作りで口縁先端を丸くおさめている。風化で器表が荒れ、調整についての痕跡は定かではない。20は直立した口縁部で、先端部を尖らせ気味に丸くおさめている。内面を粗く研磨したような痕跡が認められる。

7・11は赤味の混じった茶褐色、8は明るい茶褐色、19は淡灰褐色、16・20は黒褐色をしており、その他のものは濃い茶褐色を呈している。

21は波状をした深鉢の口縁部であろう。波の頂上部分は厚く作り、中央部をくぼめ、その部分に内外に張り出す形につまみ状のものを付けている。内外面の一部にナデて仕上げた痕跡が残っている。茶褐色を呈し胎土・焼成ともに良い。縄文時代後期でも新しい方ではなく中ごろのものと考えられる。



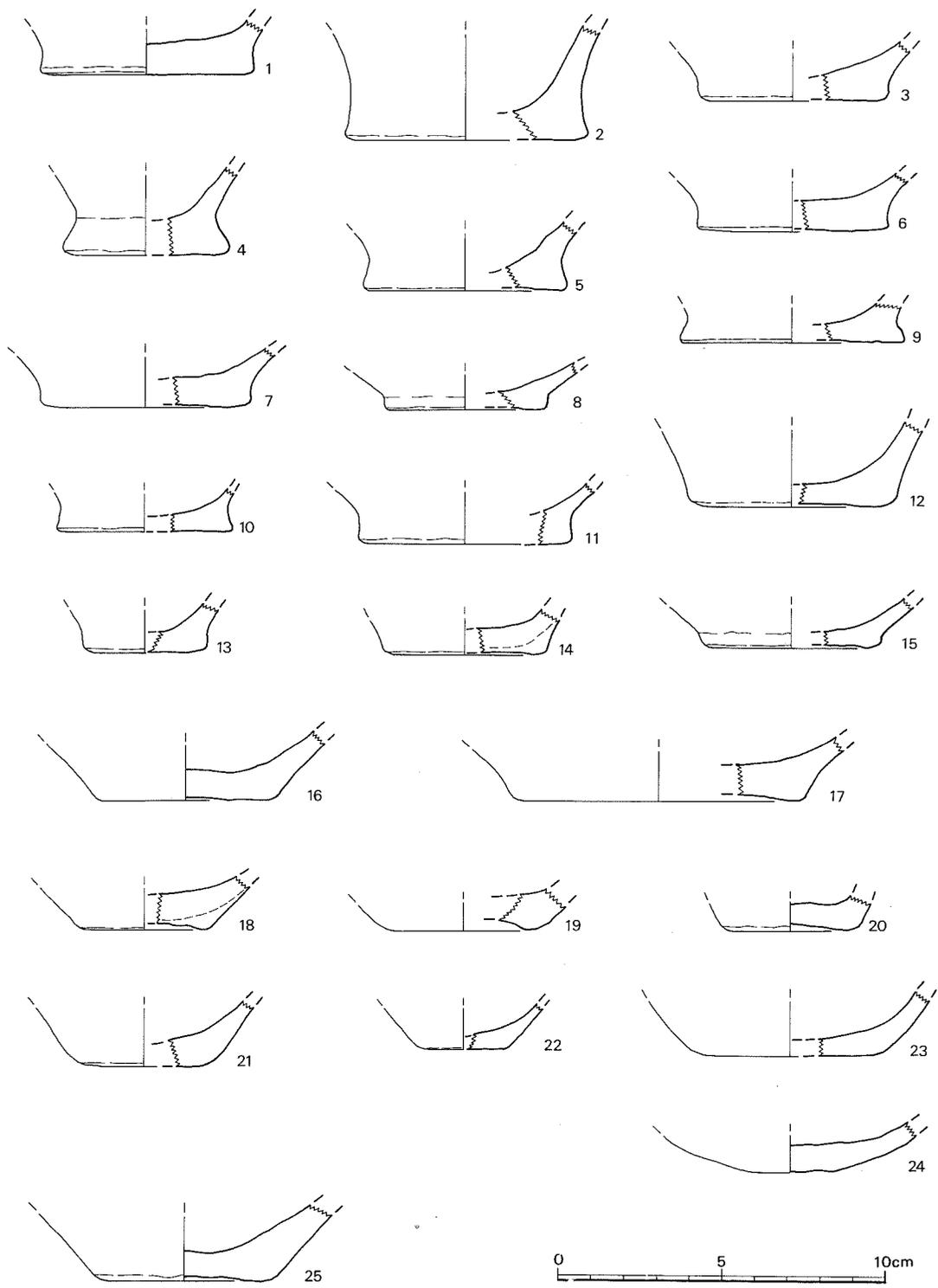
第34図 繩文式土器(8)

土器の底部（第35図1～25・図版31）

ほとんどが縄文時代のもので、25のみが弥生式土器の底部である。

第35図1は後期の土器の底部である可能性が強い。直径9.8cmの平底で、残りは良い。内外面とも磨いて調整した痕跡が残る。外面は茶褐色、内面は褐色を呈している。2～24は晩期の土器の底部で、平底のものと上がり底のものがある。また2と5はクジラの脊椎骨を作業台にして作られたような痕跡を残している。2は外方にわずかに張り出す底部で、内外面ともナデで仕上げたような痕跡を持つ。内面は淡い茶褐色、外面は赤味の強い茶褐色を呈している。3は外方に広がる形で体部に続いている。これも内面はナデで仕上げたものと思われる。内面は灰褐色、外面は明るい茶褐色を呈する。4は小形のもので薄い作りの体部の下端部に横方向の条痕が付く。外方に張り出した形の底部で、この部分は厚い。5、6はやや作りが荒いように観察される。6・7は器壁に気泡状の小さな孔が多く残る。8は横に広がる体部を持つ。器表が若干荒れていて調整については不明である。9は比較的残りが良い。精良な胎土で、研磨を受けたように観察される。内外面とも赤味の混じった茶褐色を呈している。10は底が薄く、器壁も薄い作りで、赤味の混じった茶褐色を呈している。残りは比較的良い。12は底部の端が角を持たない作りである。器表が荒れているが、ナデで仕上げたように観察される部分もある。13は底の直径が5.6cmと小形のもので、胎土・色調は弥生式土器に似る。内外面ともナデで仕上げたような痕跡が残る。14はわずかに底が上がる形のものである。胴体の最下部に条痕の一部と思われるものが認められる。内面には指先で調整したような痕跡が残る。また粘土の貼り合わせの痕跡も認められる。15は割に荒い作りで、体部に条痕が残っている。内面は黒褐色で、ナデか磨いて仕上げられている。内外面ともに小さな気泡状の孔が残っている。16は厚い作りのもので小砂粒を多く含んでいる。調整については明確ではない。内面は灰褐色、外面は茶褐色を呈している。17は底の直径が13cmほどと、大形のものである。器壁や器表面に小さな穴が多い。18～20は小形で、底の中央部が上がる形のものである。18は、粘土の貼り付け痕を明瞭に残している。内面は灰褐色、外面は明るい赤褐色を呈している。19は小破片であるが上げ底の状況が明瞭に観察できる。全体的に淡い茶褐色を呈している。20は全面をナデで仕上げたものと思われる。内面は灰褐色、外面は茶褐色を呈している。21～23も小形の底である。21は厚い底部で、内外面ともナデで仕上げられた痕跡がある。22は器壁の薄い作りで、全面研磨を加えられたような痕跡が残る。黒褐色を呈する。23は胎土・色調が13に似る。全面ナデで仕上げたように見受けられる。24は丸底に近い形で、直径3.5cmほどを平らにしている。外面は赤褐色を呈し、内面は灰褐色である。小砂粒を多く含んでいる。

25は弥生式土器の壺の底部と思われるが、器表が荒れて調整や正確な大きさなどについては不明である。図上でこの大きさに復原した。胎土に5mmほどまでの石英粒などの砂粒をかなり含んでいる。内外面ともに明るい茶褐色を呈している。



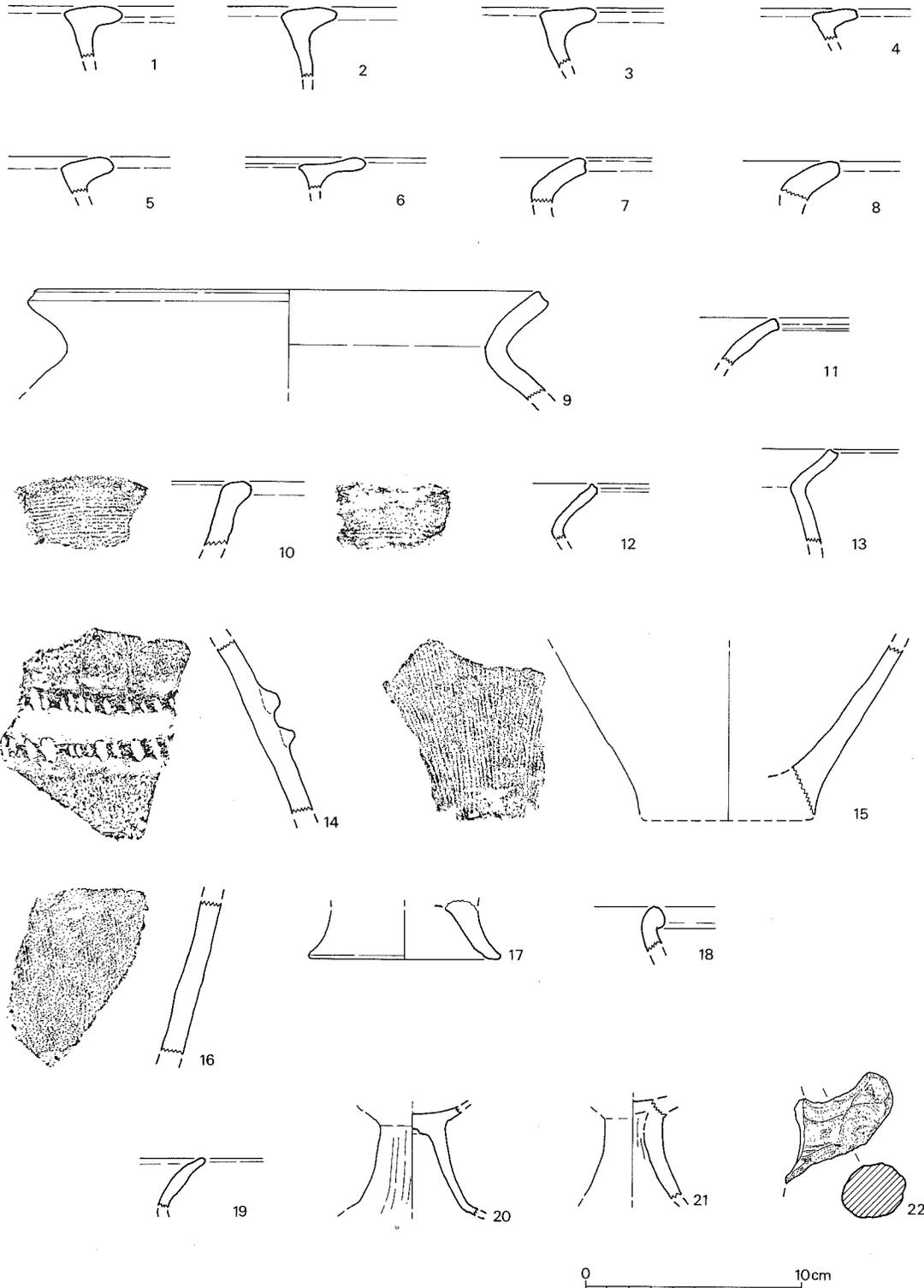
第35図 土器の底部

弥生式土器 (第36図1~18・図版32)

1~13は弥生式土器の口縁部分である。1~6はわずかに内傾させつつ伸ばした胴体上部を直角に近く折り曲げ、水平に近くした形の口縁部である。外方に伸ばした先端部は丸くおさめている。折り返された内側はかなり鋭い稜となっている。1・4は赤味がかかった茶褐色、2は暗茶褐色を呈している。7~9は、内傾して伸びた壺の頸部から口縁部である。7、8は短い口縁部を外反させ、先端は丸くおさめている。9はやや大形のものと考えられるが、形状は7、8と同じであろう。口縁先端は平らにおさめている。口縁部の直径は24cmほどに復原できた。10は壺の口縁部であろう。外傾しつつ伸びた口縁部の先端を外に折り、先端部を丸くおさめている。内面に横方向へのハケ目が、外面にはやや大き目のハケか楕状のもので調整痕が残る。内面は茶褐色、外面は暗茶褐色を呈する。11は高坏の可能性が強い。薄い作りで、口縁先端を平らにおさめている。内外面に丹を塗ったものらしく赤褐色の部分がある。小砂粒を含んだ胎土である。12、13は小形の壺の口縁部と考えられる。薄手の作りで、内湾しつつ伸びた胴体を外上方に折り、やや内湾気味に伸ばした先端部を平らにおさめている。この先端の内側は、小さく上側につまみ出したようにも認められる。14は大形の甕か壺の胴部であろう。二条の突帯を巡らし、刻みを入れているが、刻み方の間隔が不規則で、切り込みにも浅いものや深いものがあり、雑な作りのように感じられる。15・16は甕の底部に近い部分である。15は外面にハケ目が縦方向に残っている。内面は指先で調整したような痕跡が認められる。16も外面には縦方向に、内面では斜め方向に残っている。部位は明確ではない。14~16ともに明るい茶褐色を呈している。17は肥後系の土器の脚部と思われる。赤褐色を呈し小砂粒を含む。外方に広がりながら伸び、先端を丸くおさめている。18は、胎土に小砂粒を含み、色が淡い茶褐色を呈して口縁部に特徴がある。上方に伸ばした先端部を外下方に巻き込んでおさめたように仕上げている。調整についての詳細な点は不明である。形と作り方のみを見ると朝鮮の無文土器に似ているが、小破片で原形や大きさを知り得ず、いずれとも断定しがたい。

土師器 (第36図19~22・図版33)

19は小形の短頸壺の口縁部である。やや薄手の作りで、頸部より上方で肥厚させ、先端部を薄く丸くおさめている。淡い茶褐色を呈しており、焼成がややあまい感じを受ける。胎土は小砂粒を含むが良好である。20・21は小形の高坏の脚であるがいずれも破片で、坏の部分や脚の先端部の形態・大きさについては明確でない。20の脚の部分には、面取りをしたと思われる痕跡が残っている。21の脚の内側にはしぼりの痕跡が認められる。水簸したかと思われる精良な粘土を使用している。いずれも茶褐色を呈している。22は甕の把手であるが形がやや小さい。灰褐色を呈し、固い感じを受ける。胎土には石英などの小砂粒が目立つ。



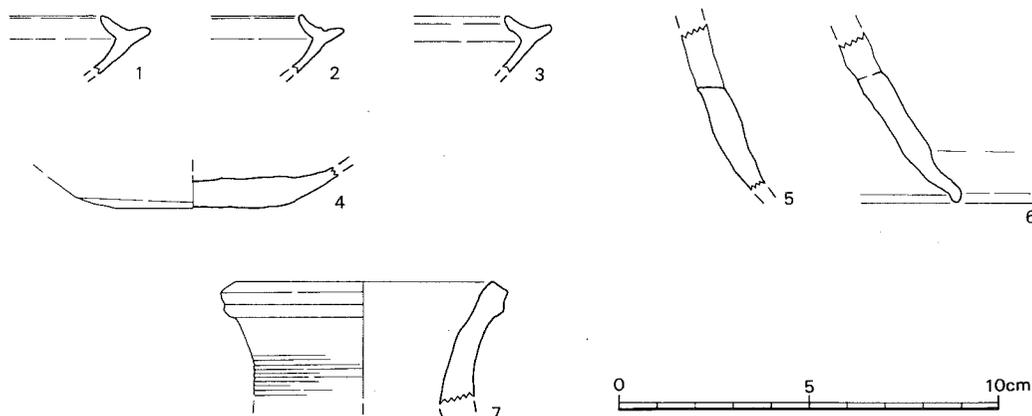
第36图 弥生式土器・土師器

須恵器・須恵質土器 (第37、38図・図版33・34)

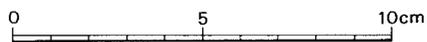
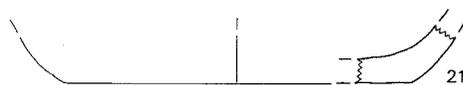
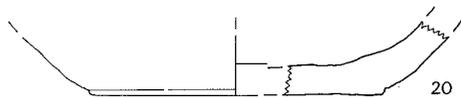
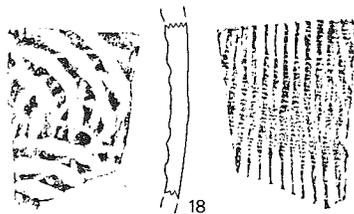
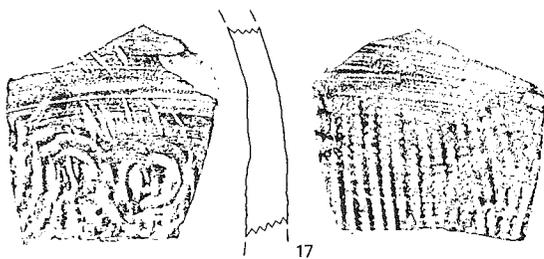
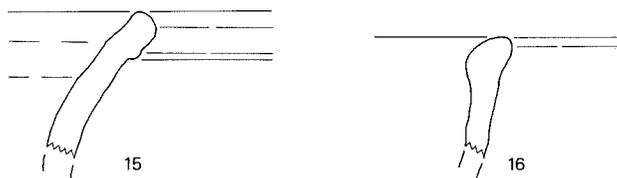
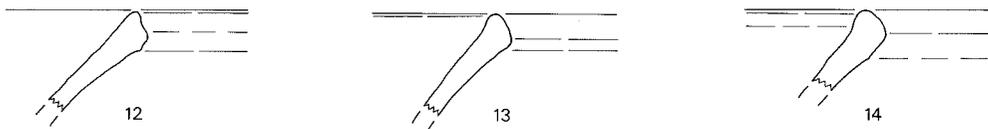
全体の数量としてはまだ多いが、いずれも小破片となっていて、原形や大きさを知り得るものは一点もなく、図上で復原できたものを図示した。

1～4は坏の身として図化した。蓋である可能性もある。1～3ともに短くて内側に傾く形のもので、直径は10cmをわずかに出るようである。いずれもかなり薄い作りで、2は体部の厚さが2mmに満たない。4は水引きのあとを、内外面ともナデて調整している。大きさは不明。1～3のいずれかに接合する可能性もある。1～4ともに胎土に小砂粒を含む。灰色を呈している。5、6は高坏の脚の部分である。長方形の透かしの一部を残した破片から、高坏であることがわかる。6、斜めに伸びた脚を、一度外方に張り出させ、その先端部を下方に折ってやや尖らせ気味におさめている。これにも長方形の切り込みの一部が残っている。いずれも表面に自然釉がかかり、黒灰色を呈する。7は短頸壺の口縁部と思われ、濃い黄灰色を呈している。口縁部での直径は8cm内外と推測される。口縁直下に突帯様のふくらみを持たせている。8～16は甕か、あるいは壺の口縁の部分と思われる。8がやや鋭い作りであるが、他はいずれもややわらかい感じの作りで、時期的にも新しくなると考えられる。9～13は口縁直下を外方に出す形で、14はやや平らに作っている。15は口縁端部を丸く、巻き込んだように付けている。16は胴体の先端を外側に少し折り、口縁端部を厚く丸くおさめた形である。17は壺か甕の胴体上部で、上側には水引きの痕跡が残っている。18も明瞭なタタキ痕を残している。17、18ともに内側に当て具の痕跡が明瞭に残る。いずれも灰色で良質の胎土を使用している。

以上のほかに須恵質のものとして19～21がある。19は大形の甕の頸部付近と考えられるが、形状・法量ともに定かではない。二段かそれ以上に連弧文を施している。20、21は底部で、胴体より上の姿を知り得ない。いずれも糸切りで、その痕跡は残されたままとなっている。19、20は灰色、21は黒灰色を呈している。



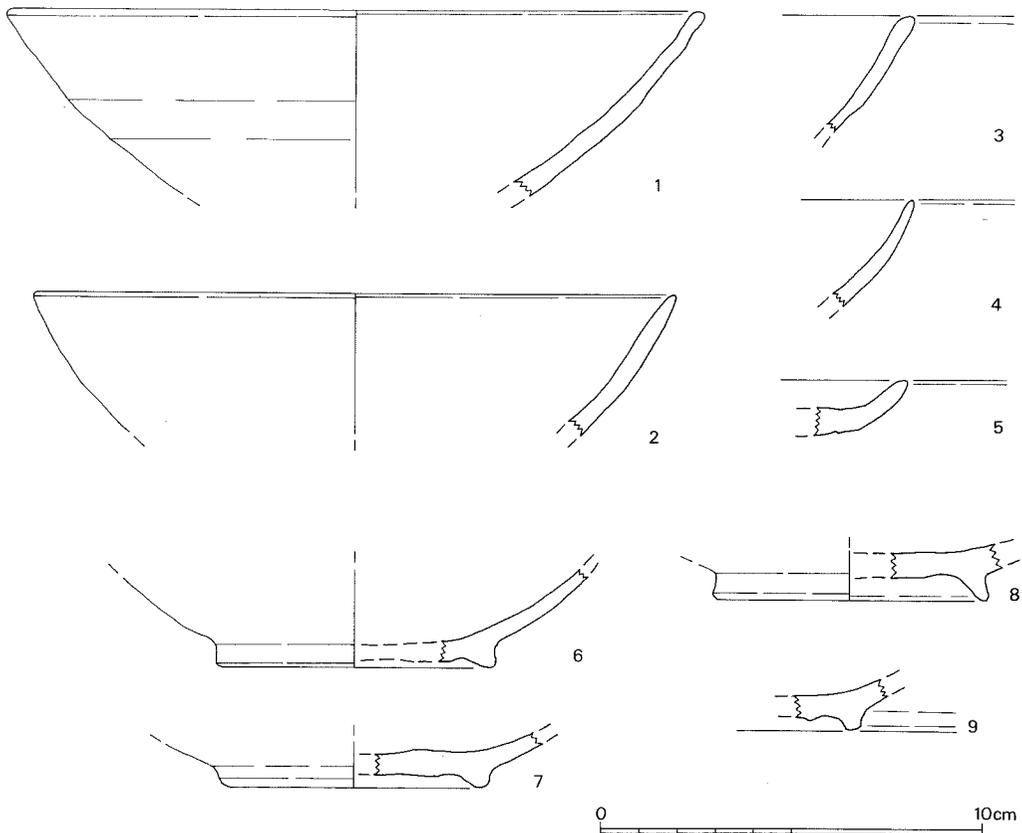
第37図 須 恵 器



第38図 須恵器・須恵質土器

瓦器 (第39図・図版34)

9点を図化することができた。1はB-8区の柱穴様の掘り込みの中から、他はB-10・11区からの出土である。いずれも破片からの復原である。1は復原口縁径18cmと大きな形になる。わずかに内湾しつつ伸びた口縁の先端部を丸くおさめている。外面は水引きの痕跡を残し、黄灰色を呈している。内面は灰色で、胎土に小砂粒を含む。2はわずかに内湾しつつ伸びた口縁先端部を薄くし、尖らせ気味に丸くおさめている。内外面とも黒灰色を呈している。3・4ともに小片で、3は全面黒灰色、4は淡い黄灰色を呈している。5も小片で大きさを知り得ない。口縁先端部は尖らせ気味に作られ、厚目の底部となっている。内面は黒灰色、外面は灰色を呈している。6は薄手の作りで、高台の復原径は7cmほどになる。内外面ともに黒灰色を呈している。7低い高台を持ち、体部は薄い作りである。内面は黒灰色、外面は灰色を呈している。8はやや外方に張る形の高台を持ち、その先端部を尖らせ気味に作っている。内外面、淡い灰褐色を呈している。9正確な大きさは不明である。二重高台状になっているが、全体がそうなのかは断言できない。ていねいな作り方のように思われる。8にはわずかに小砂粒が含まれるが、6・7・9はいずれも良質の胎土を使用している。 (藤田)



第39図 瓦器

4. 中・近世の陶磁器

中・近世の陶磁器 (第40~41図・図版36)

中・近世の陶磁器としては、中国製の輸入陶磁器として、白磁、青磁、明代染付碗、国内製の近世陶磁器等が出土している。

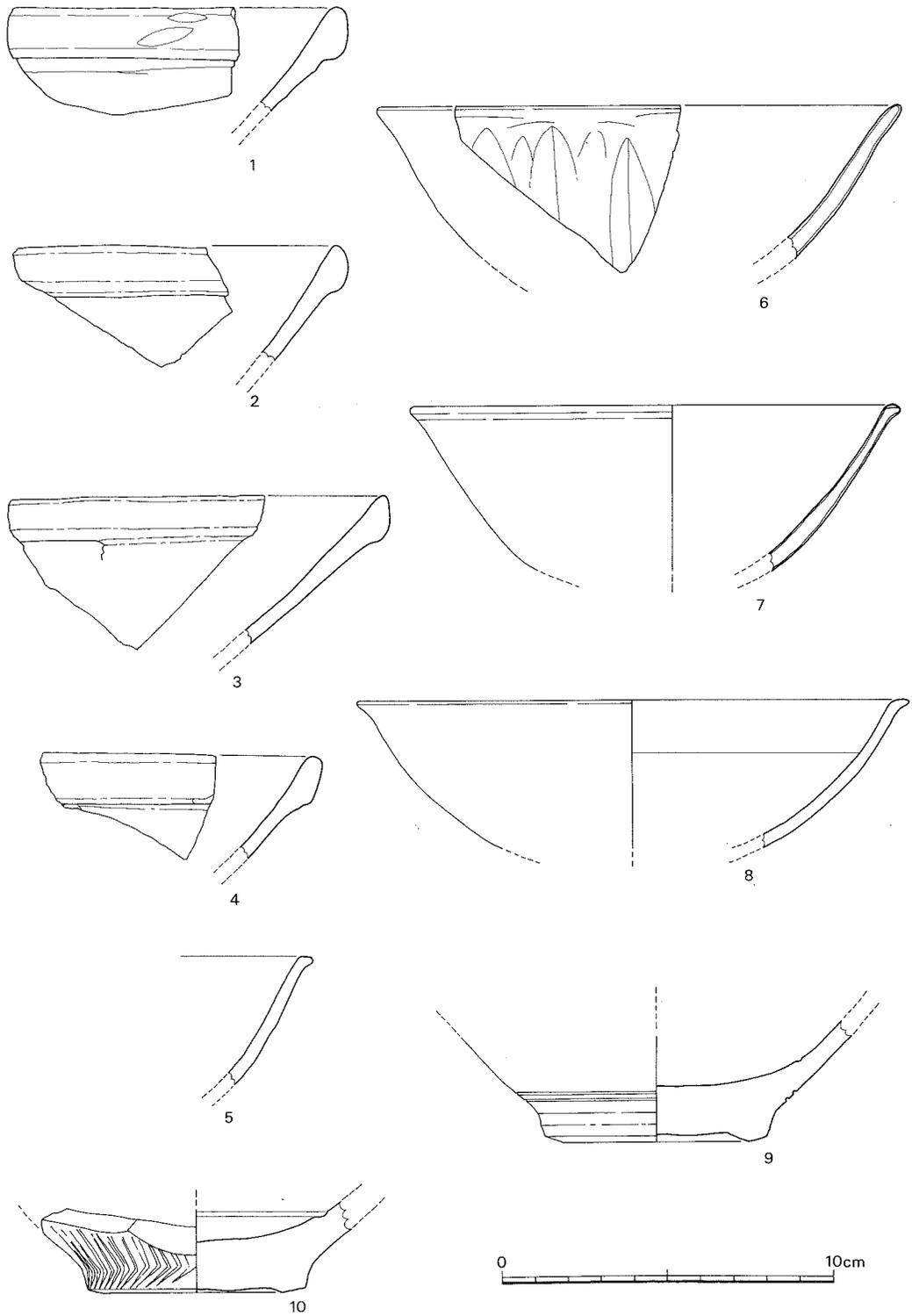
1~5、7~12は中国製の白磁である。口縁部と底部の形態の違いによって分類してみると、口縁では、玉縁口縁のもの、玉縁口縁でないものに。底部では、高台が低いものと、高いものに大きく分けられる。1~4は玉縁口縁の資料である。1は胎土は灰白色を呈し、釉はうすく灰色を呈す。口縁部の外面にたまたまヘラがあたって削れたのであろうか？ヘラの跡が2ヶ所についている。B-11区5層出土。2、3、4も、1と胎土・釉調等が同じである玉縁口縁の碗の口縁部である。2はB-11、12区5層出土。3、4はB-11区5層出土。5、7、8はいずれも口縁部を外反させ、端部を平らにしている中国製の白磁碗の口縁部である。5は体土は灰白色、釉はうすく灰白色を呈す。A-11区5層出土。7も同じく中国製の白磁碗の口縁部。胎土は灰白色、釉は灰色。口縁部上端部に釉がこんもりとかかっているために見た目は丸くみえる。5の資料の体部が直線的に外上方に延びるのに対し、7はやや内湾しながら外上方へ延びる。A-11区石垣内からの採集品である。8は胎土は乳白色、釉はうすく乳白色。体部はやや内湾しながら外上方へ延びる。内面に微小な沈線が入る。第40図の9、10、第41図の11、12は中国製の白磁の底部である。高台が低いもの9、10、11と、やや高いもの12がある。9は胎土は灰白色、釉はうすく灰白色を呈す。見込みに段を有する。底部だけの残存部で見れば、内面には釉をかけ外面には釉をかけない。A-11区5層出土。10は胎土は白灰色、釉はうすく灰白色を呈す。高台外面に連続的な削り痕がついている。残存部外面には釉をかけない。見込みに段を有する。A-11区5層出土。11は胎土は白灰色、釉はうすく灰白色を呈す。見込みに段があり釉をかけるが、残存部の外面には釉をかけず。B-11区5層出土。12は胎土は白灰色、釉はうすく灰白色。見込みに段を有するもので、その段の内側の釉を輪状にカキ取っている。外面は体部中央から上方のみに釉をかけている。B-11区5層出土。

第40図の6は龍泉窯系の青磁碗である。胎土は灰白色。釉は淡青緑色。鎬蓮弁をもつ青磁碗。B-12区石垣内(攪乱層)からの出土である。Bは明染付碗。A-8区石垣(攪乱層)からの出土。

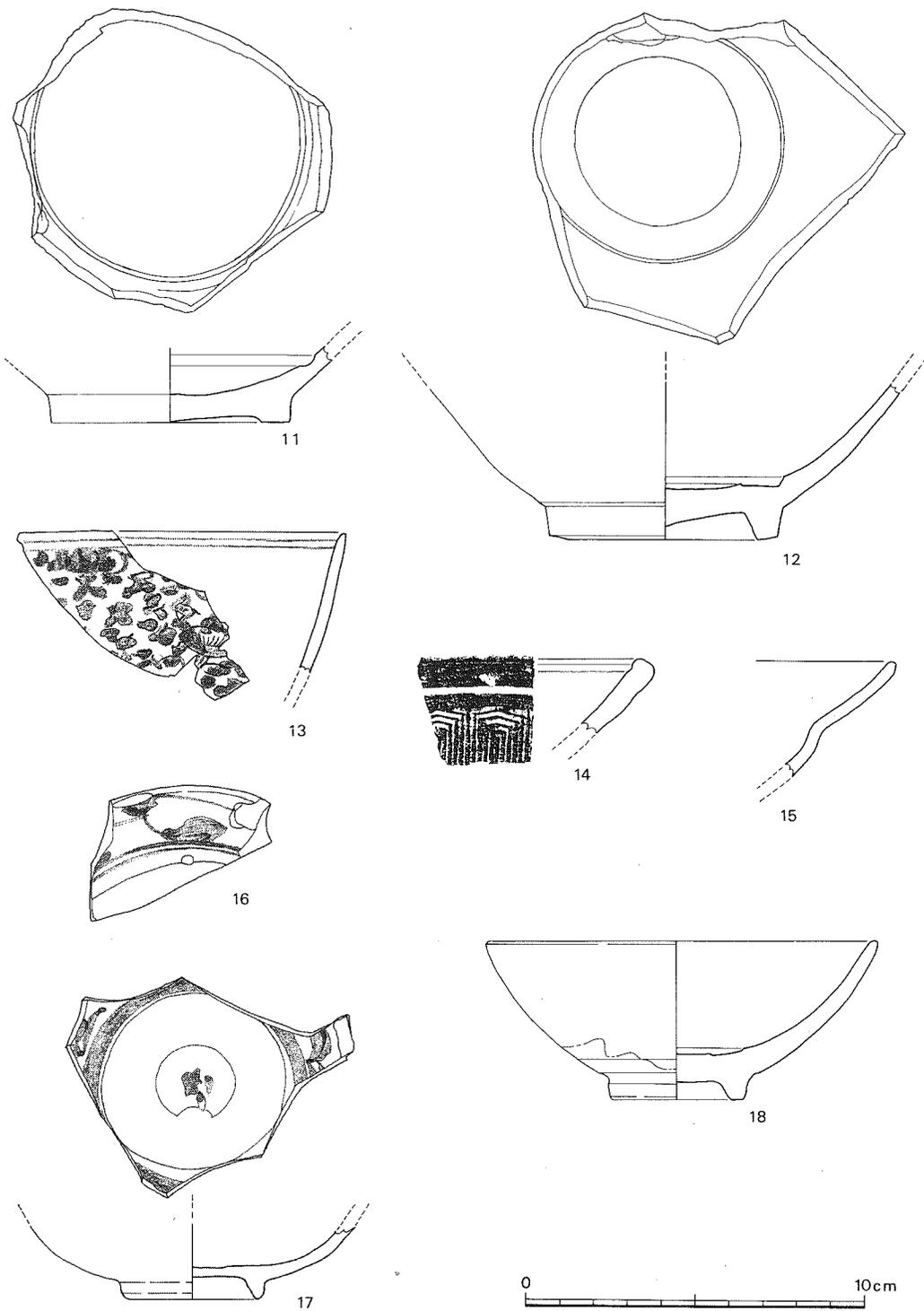
14~18は国内製の近世陶磁器である。14は陶磁器の皿の破片である。A-8区3~4層出土。15は恐らく唐津系統の皿の破片と思われる。A-11区石垣内(攪乱層)の出土。16、17はいずれも内面に草花文を描き、見込み内の釉を輪状にカキ取っている。16はA-5区2層出土。17はB-12区石垣内(攪乱層)出土。18は陶器製の碗。胎土は灰黄色、釉うすく灰青色。高台は露胎。見込み内の釉は輪状にカキ取っている。B-12区石垣内(攪乱層)出土。

以上見てきた資料のおおまかな所属時期は、中国製白磁が11~12世紀。同じく青磁碗が13世紀。同じく明染付碗が15~16世紀。そして、近世陶磁器の18世紀頃がそれぞれ比定されよう。

註1、横田賢次郎・森田勉、太宰府出土の輸入中国陶磁器について、九州歴史資料館、研究論集4、1978



第40図 中・近世の陶磁器 (中国製輸入陶磁器)



第41図 中・近世の陶磁器（中国製輸入陶磁器、国内製近世陶磁器）

5. その他の遺物

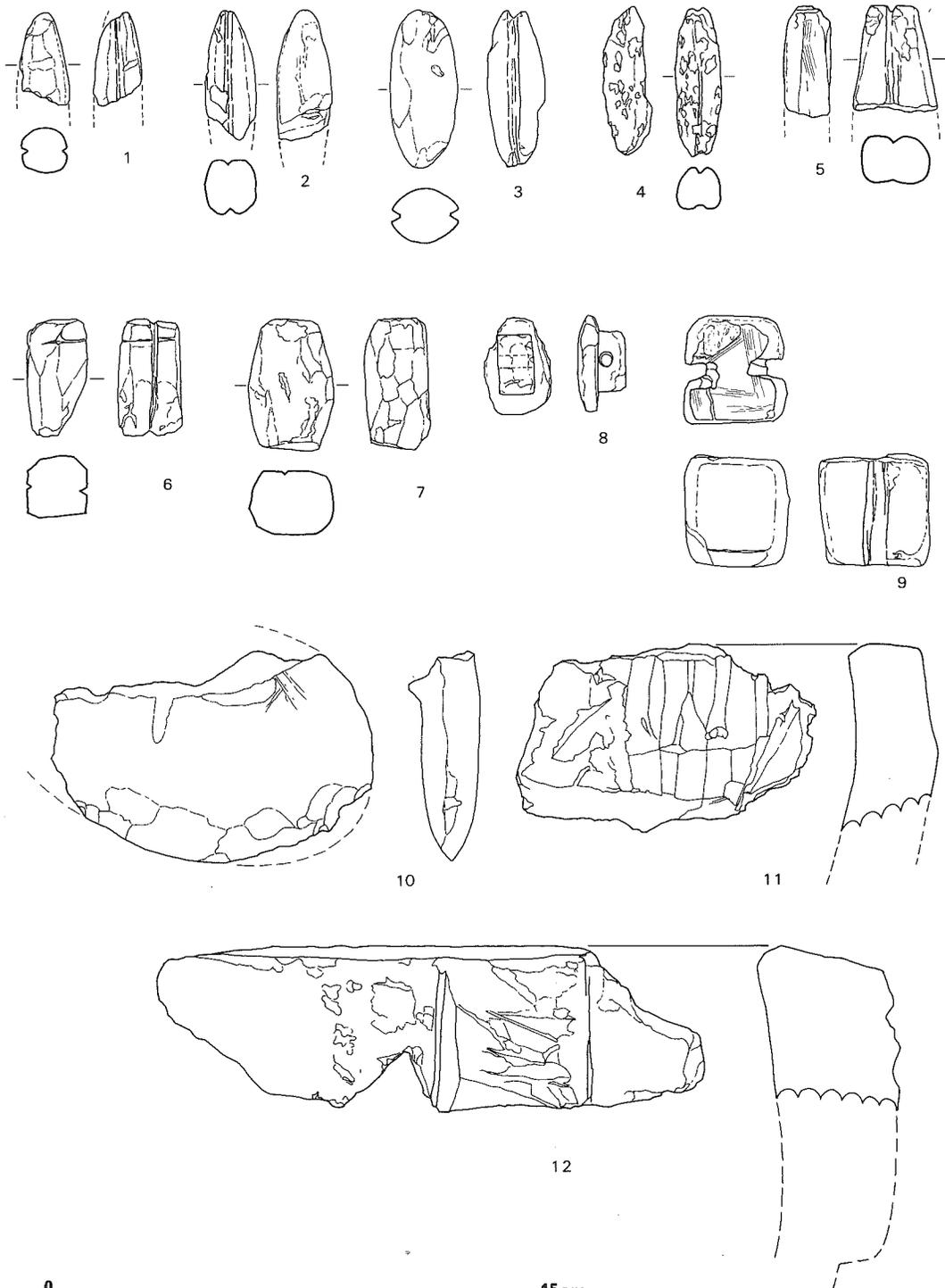
滑石製品、鉄滓他（第42、43図・図版37）

滑石製品として、石錘、バレン状製品、石鍋、その他には、土錘や鞆の羽口、鉄滓等が出土している。

1) 滑石製品（第42、43図1～16、25）

1～6は滑石製の石錘である。1～4はほぼ同じ形をし、長軸に溝を一周めぐらしている。1は灰色の滑石製石錘。半欠品。残存長28mm、残存幅15mm、残存厚14mm、重さ7.4g。B-11区、5層出土。2も1と同質・同形の滑石製石錘。残存長39mm、残存幅16mm、残存厚15mm。重さ13.4g。B-12区、5層出土。3は完形の白灰色の滑石製石錘。断面は扁平な円形をしていて長軸に溝をV字状に切り込んでいる。長さ42mm、幅20mm、厚さ17mm。A-10区、5層出土。4は灰白色の多孔質の滑石製石錘。ほぼ完形。長さ40mm、幅14mm、厚さ14mm。A-11区、3層出土。5は白灰色の滑石製石錘。半欠品。形としては横広で四角ばっている。残存長32mm、残存幅25mm、残存厚14mm。B-11区、5層出土。6は灰色の滑石製石錘。長軸に溝をめぐらし、これに直交する形で上端近くに横に微細な溝をめぐらす。まわりをきれいに面取りしている。完形。長さ35mm、幅19mm、厚さ18mm。重さ18.9g。B-11区、5層出土。7は灰色の滑石製品。まわりを面取りしている。形としては中央部がふくらむ分銅形をしている。上下両端をカットしている。溝状の加工はないが、石錘の未製品か？長さ40mm、幅25mm、厚さ19mm、重さ32.8g。B-11区、5層出土。8は滑石製のバレン状製品。本来の色調は灰色であるが、ほぼ全面にうすい黒味を帯びた煤の付着がある。凸起伏つまみを削り出し、そのつまみには穿孔している。周縁を丸く整形し、断面は半球状を呈する。完形。長さ29mm、幅21mm、厚さ15mm、重さ9g。9は青温石製不明製品。四角い立方体の左右両面に幅6mmの溝を作り出している。上面は擦り切って平らな面になっている。長さ34mm、幅33mm、厚さ31mm、重さ63.2g。A-17区2層出土。10は緑灰色滑石製の不明製品。辺縁に刃部を作出している。また、突起部が一部残存。残存長63mm、残存幅95mm、残存厚22mm。A-10区出土。

第42図の11、12、第43図の13～16、25は石鍋である。口縁部に耳を縦に付すもの、または断面台形状の鏝を有するもの等が出土している。11は灰色の滑石製石鍋。恐らく口縁部と思われる。表面には規則的な加工痕が残っている。破損品であろうが、まわりの破損部に鋭い切載具の刃跡がついている。重さ187g。A-11区、5層出土。12は灰色の、口縁部に耳が縦につくタイプの石鍋。表面に加工を施した切載具の刃跡が荒々しく残っている。重さ440g。A-11区、5層出土。13も、灰色の滑石製の、口縁部に耳が縦につくタイプの石鍋。丁寧な表面加工を施している。重さ130g。A-10区、5層出土。14は灰色の滑石製石鍋の恐らく胴部片であろう。表面に規則的な加工痕がある。内面は、平滑に磨いている。（11～16、25も内面を平滑に磨く）。また、表面にうすく黒味を帯びた煤の付着がある。重さ60g。第5試掘墳6層出土。15は緑灰色の横に断面台形状の鏝を有するタイプの石鍋である。重さ295g。第8試掘墳、3層の出土。16は赤味を帯びた灰色の滑石製石鍋の底部片。多孔質である。重さ100g。B-11、



第42図 その他の遺物（滑石製品、石鍋）

12区、5層出土。25は灰色滑石製石鍋の底部片。器壁が薄い。重さ100g。B-11区、5層出土。

2) 土 錘

17~24は土錘である。24が上端を欠損する他は、あとの7点はほぼ完形。色調も24が黒褐色で、他の7点は淡赤褐色を呈する。法量は17が長さ29mm、幅13mm、穴の径5mm、重さ4.2g。A-13区、2層出土。18は、長さ29mm、幅13mm、穴の径5mm。重さ4.6g。A-13区1層出土。19は長さ38mm、幅15mm、穴の径6mm、重さ6.8g。B-18区、1~2層出土。20は長さ42mm、幅11mm、穴の径4mm。重さ5.4g。A-13区、2層出土。21は長さ42mm、幅14mm、穴の径5mm、重さ8.7g。A-16区、1層出土。22は長さ44mm、幅14mm、穴の径5mm、重さ8g。A-16区、1層出土。23は長さ46mm、幅13mm、穴の径5mm、重さ7.8g。B-17区、3層出土。24は長さ61mm、幅12mm、穴の径5mm、重さ9g、A-19区、2層出土。

以上述べた土錘は紡錘形の両端を切り穴の通った通有の形のものであるが、形に大小の差がある。ほとんどが第2層と3層からの出土で時期を特定することはできない。

3) 羽 口

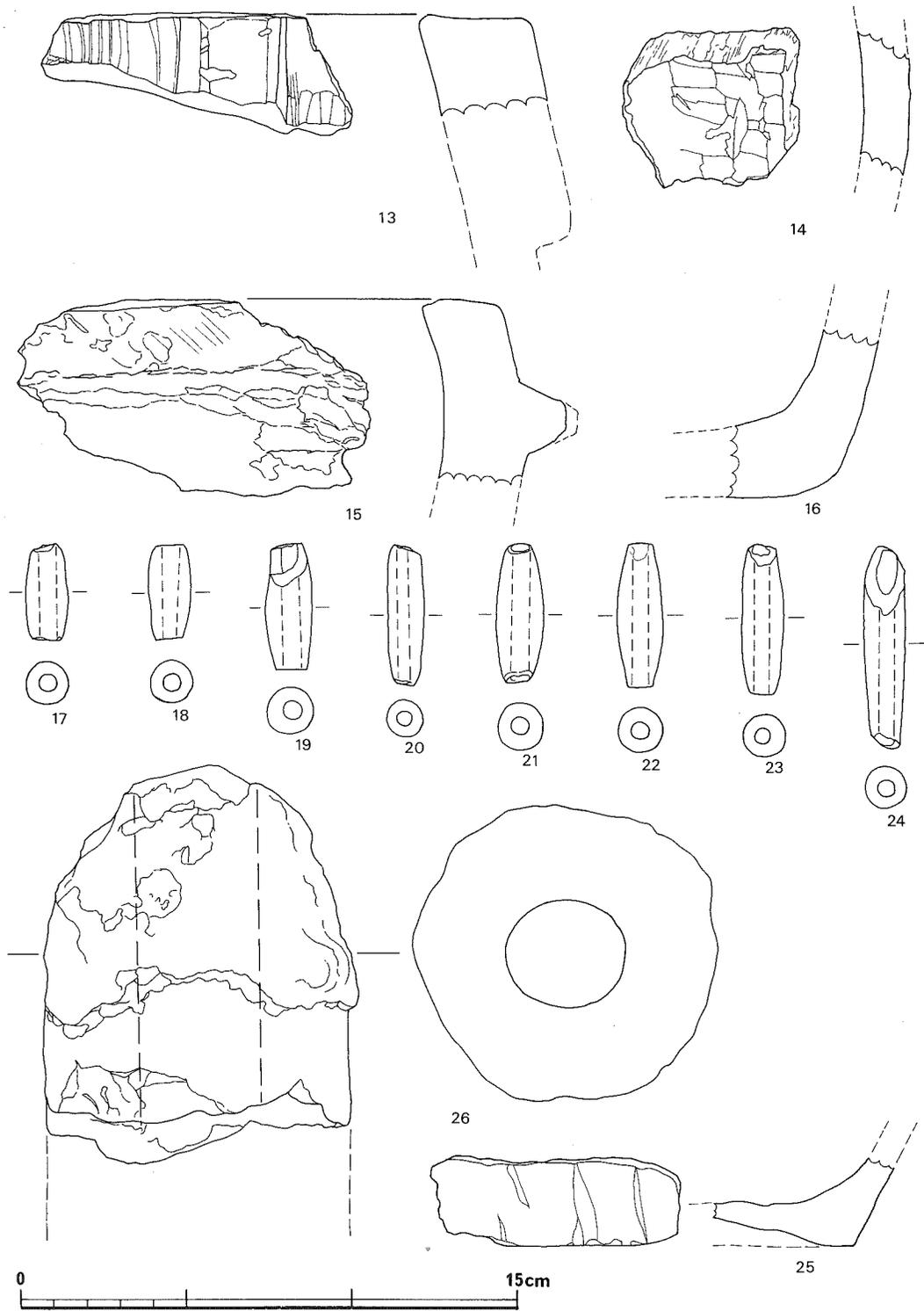
形の整っているのは1点のみで、破片になって出土したものもあるが、接合が不可能で原形・大きさについては不明である。図化したものはA-11区の5層から出土したもので、最大部の直径96mm、残存する長さ125mm、重さ770gで、先端が細く丸い砲弾形を呈している。通風孔の直径は37mmで、筒の肉の厚さは29mmとなっている。先端部分は高熱を受けて変形し、鉄滓が付着している。

4) 鉄 滓

出土総数1,379点の出土があった。その大部分が、A-10、11区、B-10、11、12区の5層から出土している。重量別にみると、0~10gの小さくて軽いものが715点(51.8%)。10.1~50gのものが467点(33.9%)で、50gまでのもので全体の85.7%を占める。また、500g以上の重いものも6点出土している。因みに1,379点の総重量は43.75kgを量る。

ところで、滑石製品もA-10、11区、B-10、11、12区の5層から出土するが、これはたまたまこの場所が中世の包含層が残存していたからであって、これが分布上の有意な状況を示すとは限らない。

(村川)



第43図 その他の遺物（滑石製石鍋、土錘、羽口）

Ⅲ ま と め

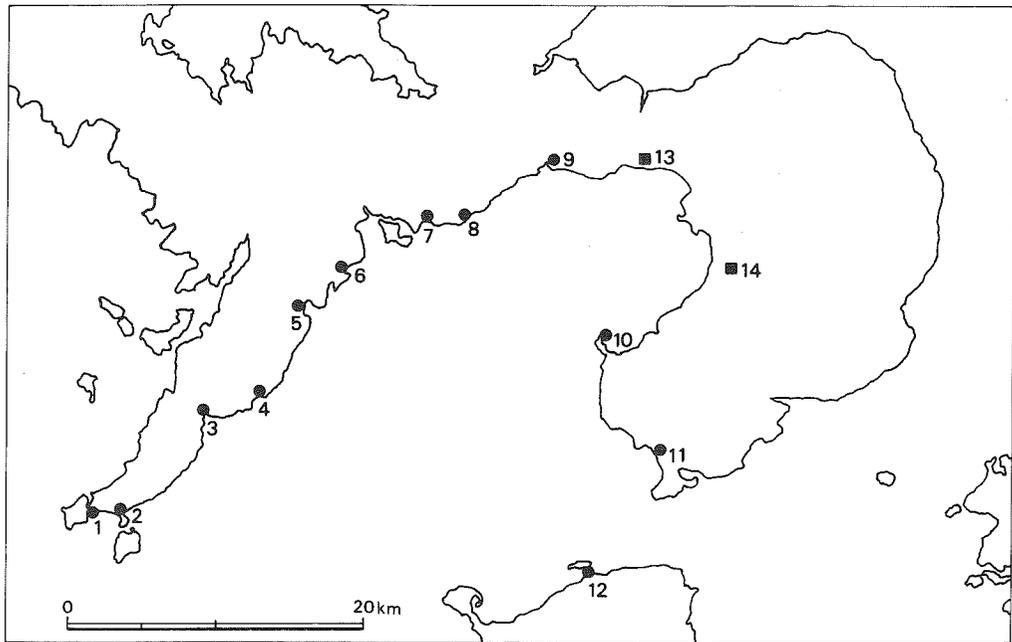
今回発掘調査した築崎遺跡は橘湾沿岸の遺跡である。

長崎県では、外洋に面した場所に立地する遺跡が現在までにかなり知られている。しかし北、あるいは西方からの風や波の影響さえ少なければ、ほんのわずかな空間でも生活の場として利用されていたという事実が、最近特に知られるようになった。しかしそれらはいずれもかなり狭い空間であり、今回の築崎遺跡のように前面の開けた場所との差異が考えられ、試掘調査の結果で中世の遺物が出土することからも、上記の縄文時代の短期間、あるいは小規模な遺跡とは性格を異にすることは予感されていた。それは、この橘湾沿岸の、現在までに知られている以下の遺跡などからも連想されていたからでもある。ごく簡単にそれらの遺跡についてまとめておきたい。

1. 菖蒲川遺跡 長崎半島（野母半島）先端部の砂丘上に位置し、現状は海岸である。昭和43年の調査で、縄文時代前期の曾畑式土器と剥片石器・礫器のほか人骨の出土もあっている。
2. 脇岬遺跡 長崎半島の先端部に近く、樺島に向けて伸びる脇岬の付け根に位置する。祇園山に続く砂嘴の後背湿地北側の、標高4 mから10 mほどにかけての微高地と砂丘上に形成された遺跡で、昭和41年から発掘調査が行われた。縄文時代前期、後・晩期の土器と各種の礫器、剥片石器、石斧などのほか多種の骨角器が出土している。また弥生式土器や龍泉窯・越州窯系の青磁も出土していて、かなりの時代幅が認められる。
3. 為石遺跡 長崎半島中央付近の為石の入江に面した遺跡で、標高5 mほどの砂丘上に立地する。昭和41年の調査で縄文中期から後期・晩期にかけての土器と、石錘・石斧・剥片石器のほか各種の礫器が出土した。
4. 千々遺跡 為石遺跡から東北東約4 kmほどの場所で、南側に向けて開けた平地の砂丘上に立地している。標高5 mから10 mである。昭和48年の調査で、縄文時代後・晩期の土器、石錘・尖頭状礫器・十字形石器などのほか、弥生時代中期の石棺・甕棺も出土している。また埋葬施設に葬られた人骨が6体分検出された。
5. 片町遺跡 茂木の入江に面した遺跡で、標高5 mほどの砂嘴上に位置している。人家が密集していて規模は不明であるが、縄文時代中期から後・晩期の土器と石鏃・スクレーパーなどが昭和48年の秋に確認されている。
6. 太田尾遺跡 標高5 mほどの砂丘上に位置し、縄文晩期や弥生の土器が確認されている。
7. 大門貝塚 海岸から標高5 mほどにかけての礫丘と、後背湿地に臨む微高地上に立地している。弥生土器や須恵器などが散布している。昭和37年には箱式石棺が出土し、貝輪2個を装着した人骨が埋葬されていた。このほかにも骨角器約30点があり、縄文時代からの遺跡であった可能性が強い。
8. 下の釜貝塚 築崎遺跡の南東1 kmに満たない場所で、北東に向けて伸びる礫丘上の遺跡である。古くから知られていて、縄文後期や弥生の土器のほか須恵器・貝輪・礫器・石斧など

が出土している。同一礫丘上に、現在2基の石棺が残っているが、これはやや新しいもののように見受けられる。

9. 有喜貝塚 橘湾の最も奥まった場所にある貝塚として、また古く調査がなされて豊富な遺物が出土したことで知られている。標高10mほどの丘陵先端部に立地していて、眼前に橘湾を一望のもとに見晴らし、遠くは天草の島を望みうる。縄文時代中期から後期にかけての貝塚で、阿高式・坂の下式・南福寺式・出水式・中津式・福田KⅡ式・鐘ヶ崎式・御手洗式・市来式・北久根山式などの土器が出土している。石器には石斧・石鏃・スクレーパー・石錐・石錘・礫器・石鋸・石銛など多くの種類があり、骨角器としては装飾品・釣針・刺突具・ヘラ状加工品などが出土している。
10. 国崎遺跡 島原半島の西岸で橘湾の南東部に位置している。砂嘴の内側の標高6mほどの場所に立地している。縄文時代では並木式・阿高式・坂の下式・南福寺式・出水式・鐘ヶ崎式・北久根山式・三万田式・船元式・市来式などの土器があり、弥生式土器・土師器・須恵器なども出土している。石器では、石鏃・石銛・石鋸・スクレーパー・石斧・磨石・石錘な



- | | | | |
|---------|----------|---------|----------|
| 1 菖蒲川遺跡 | 2 脇岬遺跡 | 3 為石遺跡 | 4 千々遺跡 |
| 5 片町遺跡 | 6 太田尾遺跡 | 7 大門貝塚 | 8 下の釜貝塚 |
| 9 有喜貝塚 | 10 国崎遺跡 | 11 永瀬貝塚 | 12 沖ノ原遺跡 |
| 13 愛津遺跡 | 14 朝日山遺跡 | | |

第44図 橘湾沿岸の遺跡分布図

どがあり、硬玉製の垂飾も出土している。

11. 永瀬貝塚 島原半島南端に近く、有明海の入口の早崎瀬戸に面する遺跡で、標高10mほどの海岸段丘上に立地している。昭和4年に発見されたもので、阿高式・市来式の土器や弥生式土器の出土が知られ、磨製石斧の他各種の石器、貝輪、獣骨などが発見されている。

以上、橘湾岸の海岸部の遺跡を概略した。橘湾の遺跡はこれらだけに限らないが、ここでは特に海岸に近く、立地状況の似たものを挙げた。縄文時代中期を主体とする愛野町の愛津遺跡、縄文晩期を主体とする小浜町の朝日山遺跡など、標高100m前後の遺跡は、どちらかと言えば「山の遺跡」であり、先述したいわゆる「海の遺跡」とは性格を明らかに異にしていると考えられるからである。そして、現在までに知られている海の遺跡は、砂嘴の内側、あるいはその後背湿地に面した微高地上に立地している。さらに述べるなら、このような条件を具備している場所には、まだ知られていない遺跡の存在も充分考えられる。

築崎遺跡の場合も干拓の行われる以前の地形を推測してみると、入江に臨んだ微高地にあたり、他の遺跡と立地状況が共通する。そしてここが「海の遺跡」であったことは、大形魚や海獣類の捕獲に効果を発揮したと考えられる石銛や、捕獲した動物の解体、切断などに使用されたと思われるスクレーパーの量の多さなどから窺うことができる。ただこれらの道具の材料となった多量のサヌカイトの原産地の同定、運搬の手段が問題として残る。

今回の発掘調査地点の南側で、民家を作るため、斜面を切った際、多くの貝殻が出土し、貝塚であったと思われる。築崎遺跡と直接結び付く確証はないが、可能性は大きい。遺跡の規模、性格を知るための範囲確認調査を含め、今後の保存へ向けての資料収集活動の必要性が考えられる。

弥生時代の遺物は多くはない。この時代の人々の生活の様式と、それに伴う生活の場の変化についても考える必要がある。しかし一斉に生活の様式の変化があったとは考えられず、縄文早・前期から弥生時代に至るまでの時間の長さや弥生時代の長さを比較すれば、極端に遺物が少ないとも言いがたい。

江ノ浦の入江は、先土器時代・縄文時代以来、海の生活の基盤の多くを持つ人々によって利用され続けた。中世以降も港として利用されたであろうこの入江に面した本遺跡に、中世から近世の遺物の出土するのは当然と考えられる。輸入陶磁器は後田の小高い丘を砦として使用する人物の存在したと結び付けることも可能であろう。鉄を加工する道具や鉄滓の出土は、近くに農耕具を作る場所の存在を窺わせる。

いずれにしても先土器時代の昔から現在に至るまでの、連綿として続いてきた遺跡であることは疑う余地はない。

(藤田)

- 註1・上県町 夫婦石遺跡（昭和60年、その存在が知られ、昭和63年、文化課の試掘調査によって朝鮮半島南部方面の土器が出土した。）
- ・郷ノ浦町 名切遺跡（昭和57年の調査で、縄文中期から晩期にかけての海岸の遺跡で、ドングリ貯蔵穴30基が発見されている。）
 - ・鷹島町 三代遺跡（後背湿地上に立地する遺跡で、昭和58年の調査では、縄文時代、後・晩期の土器と石鋸等の石器が出土した。）
 - ・田平町 久吹浜遺跡（昭和59年に発見された海岸遺跡で、轟式・曾畑式・阿高式などの土器や晩期の土器が出土した。須恵器のほか石鏃などの石器も出土している。）
 - ・新魚の目町 西の股遺跡（昭和60年に調査が行われた海底遺跡で、轟式・曾畑式・阿高式のほか後・晩期の土器が出土した。石器はサヌカイト製の石鋸やスクレーパーが多く、正業の主体が海へ向いていたことを示す遺跡である。）
 - ・上五島町 小浦遺跡（昭和60年に調査された遺跡で、五島中通島の西端に近い小さな入江の奥に位置している。縄文時代後期の土器と弥生式土器・須恵器などが出土した。石器も安山岩のスクレーパーが多いことで注目を引いた。）

石器について

飯盛町の旧石器時代については、今回の調査まで確認資料が認められなかった。しかし、台形様石器・ナイフ形石器の出土によって、町内の遺跡分布の再確認と高速道路建設に伴って発掘調査された諫早市貝津・若葉町^{註1}の旧石器時代の遺跡との関連性が生じてきた。また、以後の調査によっては、その文化層の包蔵地が発見される可能性が期待される。

縄文時代から弥生時代にかけての遺跡については、9遺跡があり、海岸、微高地、山麓部に遺跡があがっているが、築崎遺跡では岬の入江部南西斜面に立地している。

縄文時代の石器としては、前期から後期・晩期にかけての遺物の出土があった。早期末から前期にかけて気候の温暖化現象が始まるといわれており、遺跡立地から良好な生活環境であったことが想定される。こうした環境で生活圏が海洋にむけられるのは必然的であり、これらをつらぬくように、石鋸と称する魚撈具に関する資料の出土があった。前項で述べたとおりこの石器は西北九州の岩礁性の海岸部に立地する遺跡に顕著に現われるものである。これに一連する遺物が石鏃・石錘とあり、また間接的に関わっていた石器に、スクレイパー・磨製石斧・凹石・磨石等があげられよう。

石器製作面から資料を概括すると、石鋸では前期のものが形状がととのい交互剝離によって柳葉形を呈している。これに比較して、後期の土器に伴って出土した石鋸は、自然面を残した

スクレイパー状の整形に変わり、前期のような交互剝離を入念に行ない定形化したものとは、逸脱した状況を現わしている。

スクレイパー類では、石匙類の他、削器類が多数出土している。石匙については、時期的な変化は形態上からとらえられないが、大型の削器については、前期の土器を中心とした地区のA・B-13~19区にかけては出土がないことから、後期・晩期に伴う遺物と考えられる。小型の削器については、時期的変化はみられない。しかし、共通した特長として、いずれも自然面を残す形態をもつ。横長の刃部を有していることから機能的に、大型のものは、大型海獣の解体作業用具と思われる。

凹石・磨石については、A・B-11・12区を中心に出土し他の地区では少量の出土に留まる。この石器について、山麓部で量的に出土する遺跡^{註2}もあり、海岸部でのありかたと比較検討の必要がある。これと同様に石鏃についても形態上で変化を示しており、海岸部の資料では、鋸歯状に作出した鏃が出現することが指摘される。

次に異形十字型石器については、A・B-11・12区6層よりの出土で、後期・晩期の資料といえる。

以上総体的に遺物を概観して縄文時代後期後葉から晩期初頭頃の石器組成に石鈎・石錘・鋸歯鏃・凹石・磨製石斧等を使用していたといえる。これに比べ前期の石器組成は、石鈎の形態比較はできるものの、資料の不足により性格が判然としない。この他弥生時代の石器として、抉入片刃石斧が石垣からあがっているが、包含層の確認までにはいたっていない。 (町田)

註1：長崎県教育委員会「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」Ⅰ～Ⅲ長崎県文化財調査報告書第54・56・64集 1981~1983

註2：長崎県吾妻町教育委員会「弘法原遺跡」吾妻町の文化財7 1983

本遺跡での出土遺物は多く、正直に言ってこれほど多量のものが残っていたのは驚きでもあった。明確な「海の遺跡」の存在がまたひとつ増えたことになる。そしてこの遺跡はまだ南北に広がり、その中には豊富な遺物を多く残している可能性が多い。今後、この遺跡をどのような形で残していくか、どのように活用するか、問われているところでもある。

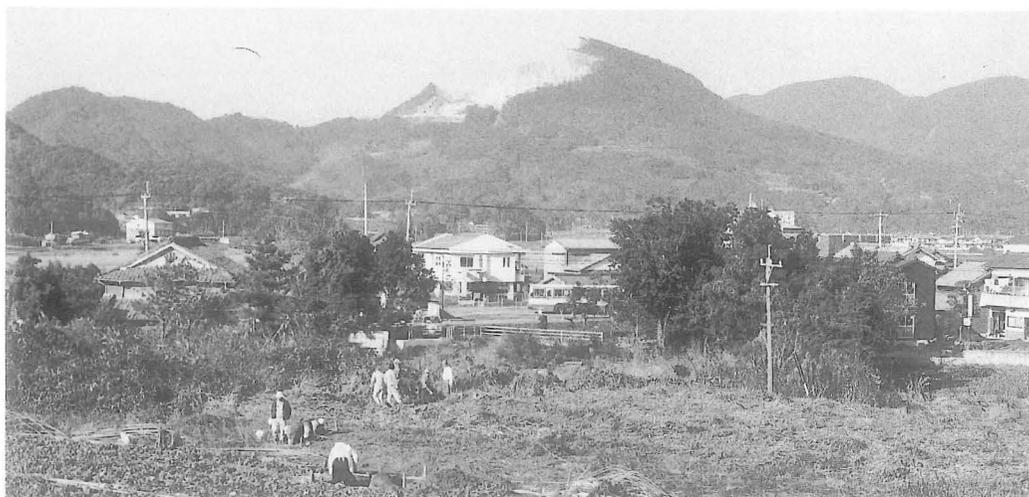
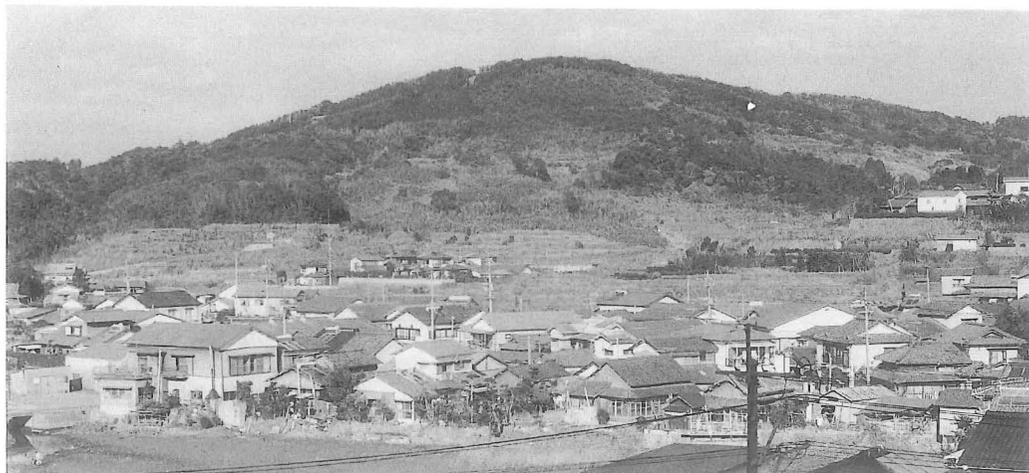
最後になったが、厳しい暑さの中で作業に従事された地元の方々や、この調査に関係された多くの方々に心から感謝の意を表しておきたい。 (藤田)

参考文献

- 『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書第87集 1987 長崎県教育委員会
『有喜貝塚』諫早市文化財調査報告書第5集 1984 諫早市教育委員会
『国崎遺跡』南串山町文化財調査報告書第2集 1989 長崎県南串山町教育委員会
『加津佐史話』加津佐郷土史 林田第壹號著
『朝日山遺跡』小浜町文化財調査報告書第1集 1981 長崎県小浜町教育委員会
『小浦遺跡』上五島町文化財調査報告書第1集 1987 長崎県上五島町教育委員会
『西ノ股遺跡』新魚目町文化財調査報告書第2集 1988 長崎県新魚目町教育委員会

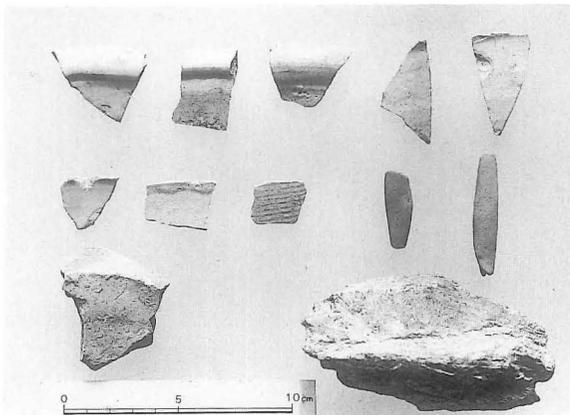
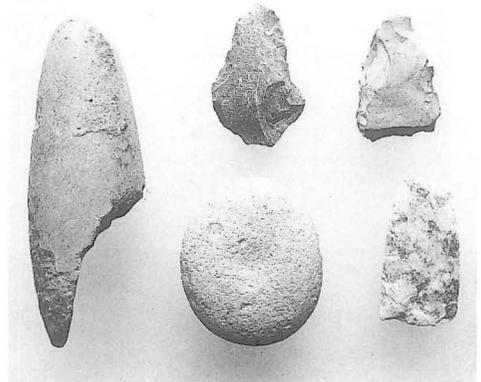
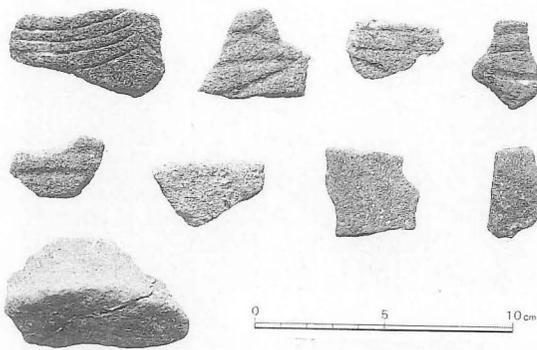
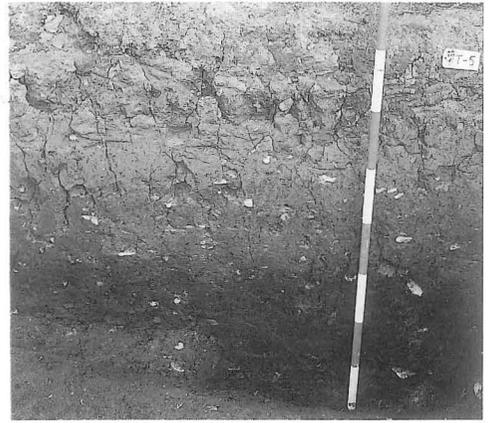
版 図





遺跡遠景・試掘調査風景

図版 2



試掘調査時の土層と出土遺物

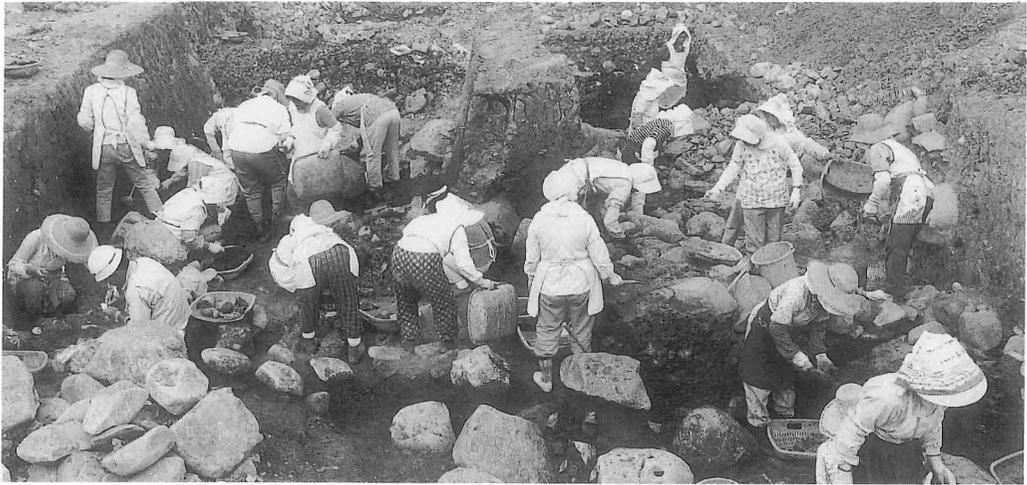


遺跡近景・調査風景

図版 4



遺跡近景・調査風景

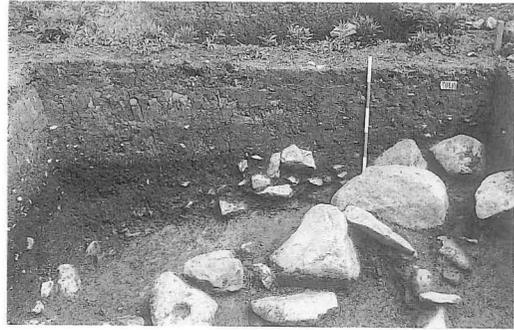


調査風景

図版 6



土層の状況 (B 列北壁)



土層の状況 (11列・16列東壁)



遺構・遺物出土状況



1



2



3



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

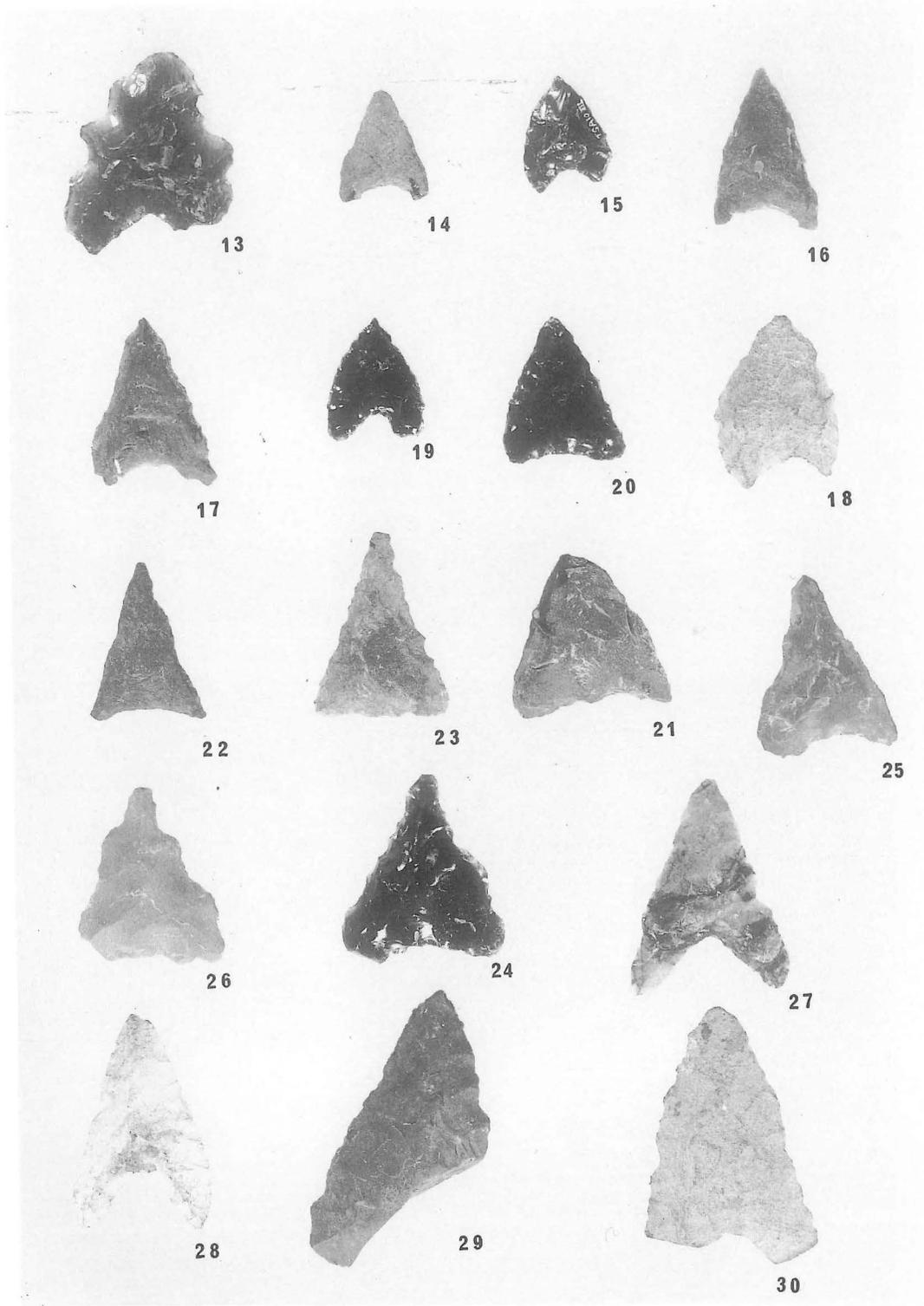


11

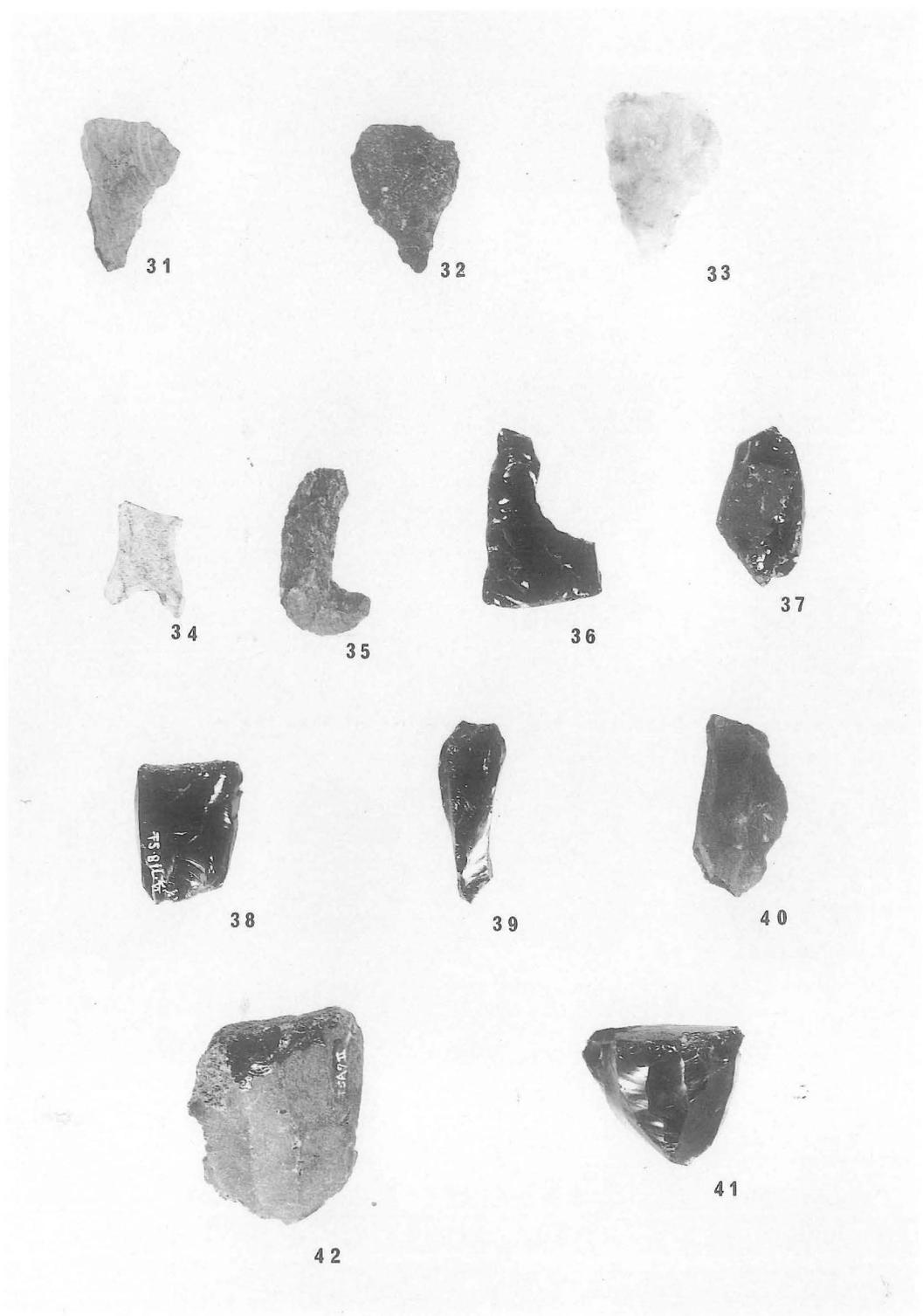


12

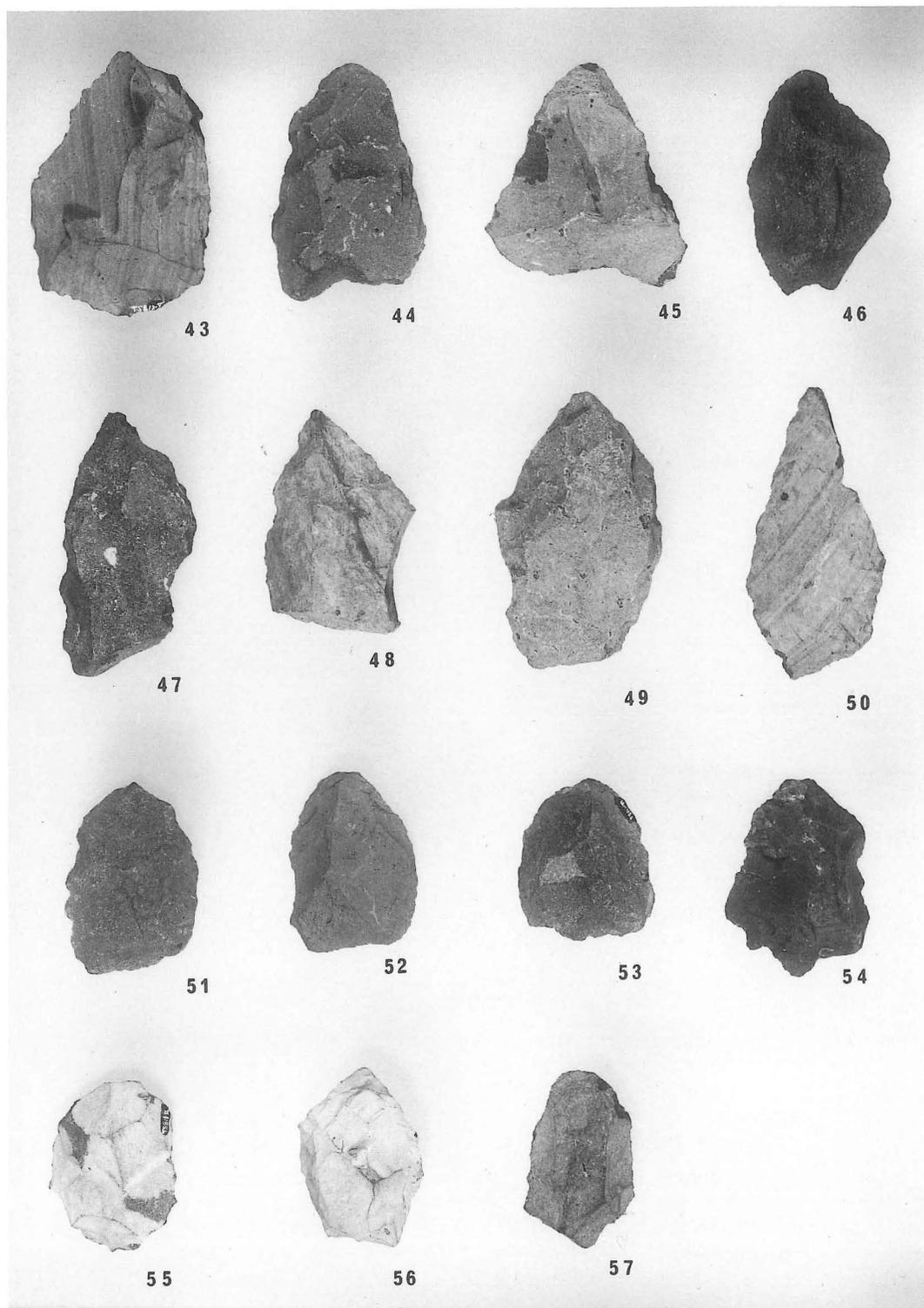
石器①·② (1/1)



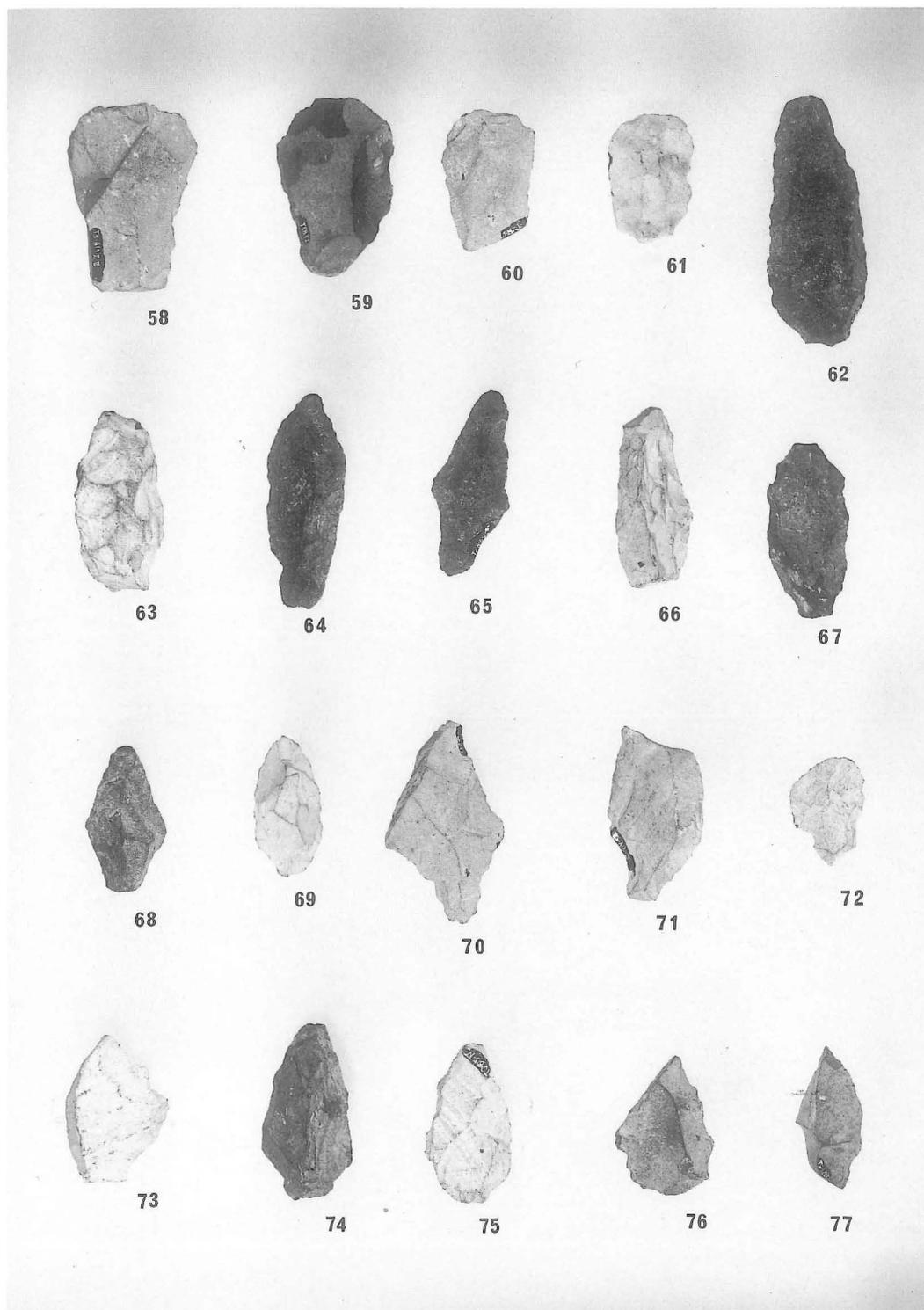
石器②·③ (1/1)



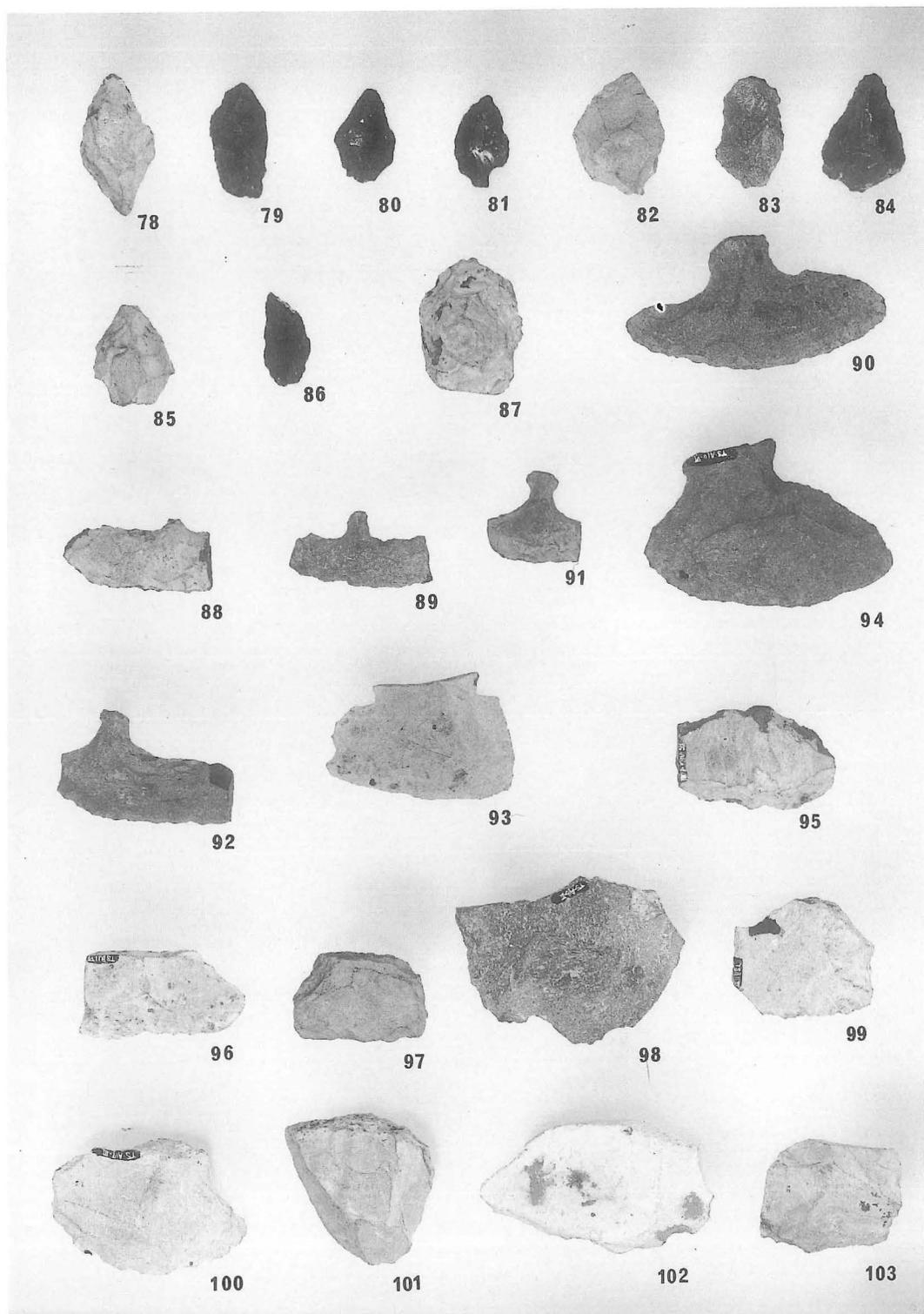
石器③ (1/1)



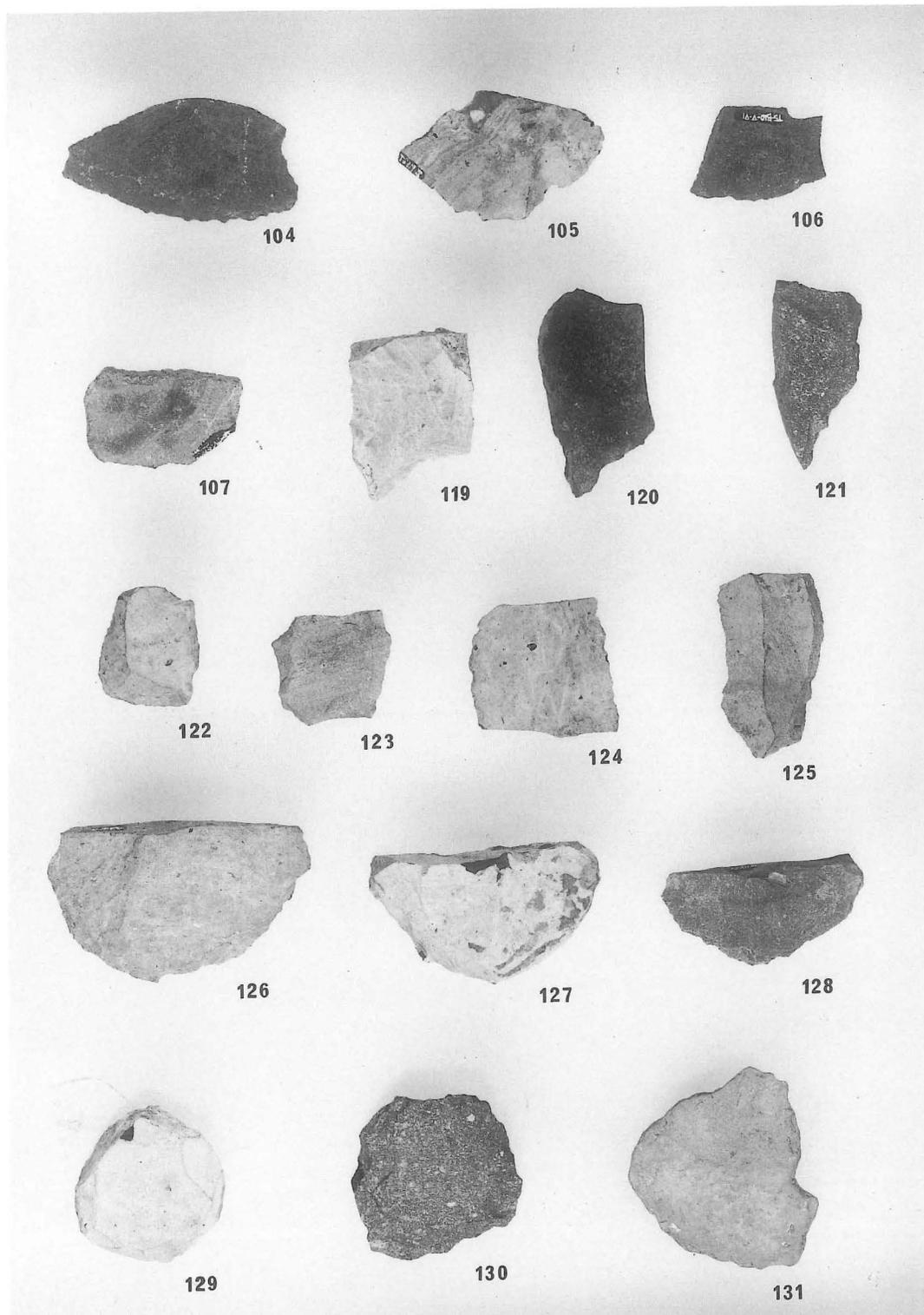
石器④・⑤ (1/2)



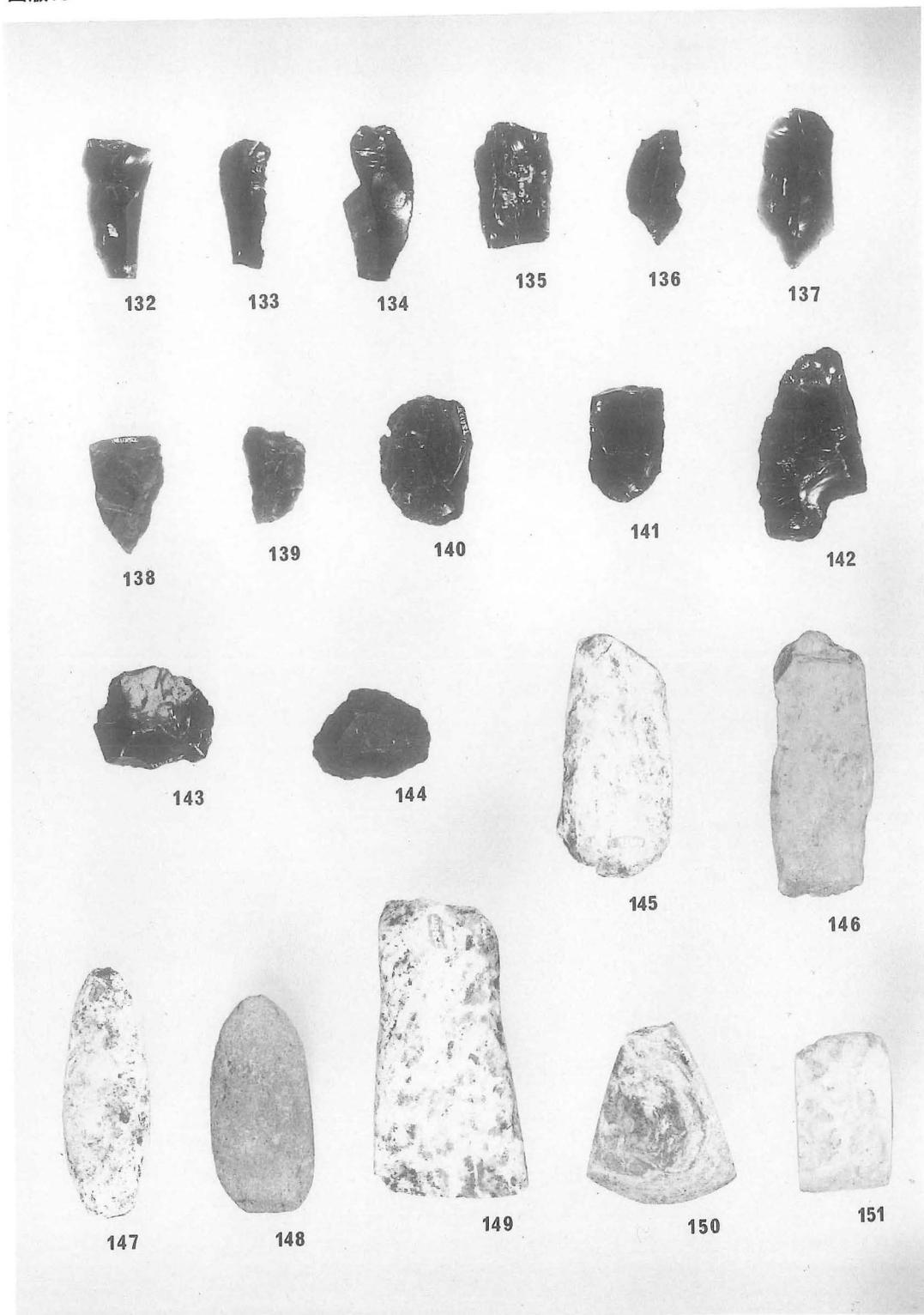
石器⑤・⑥ (1/2)



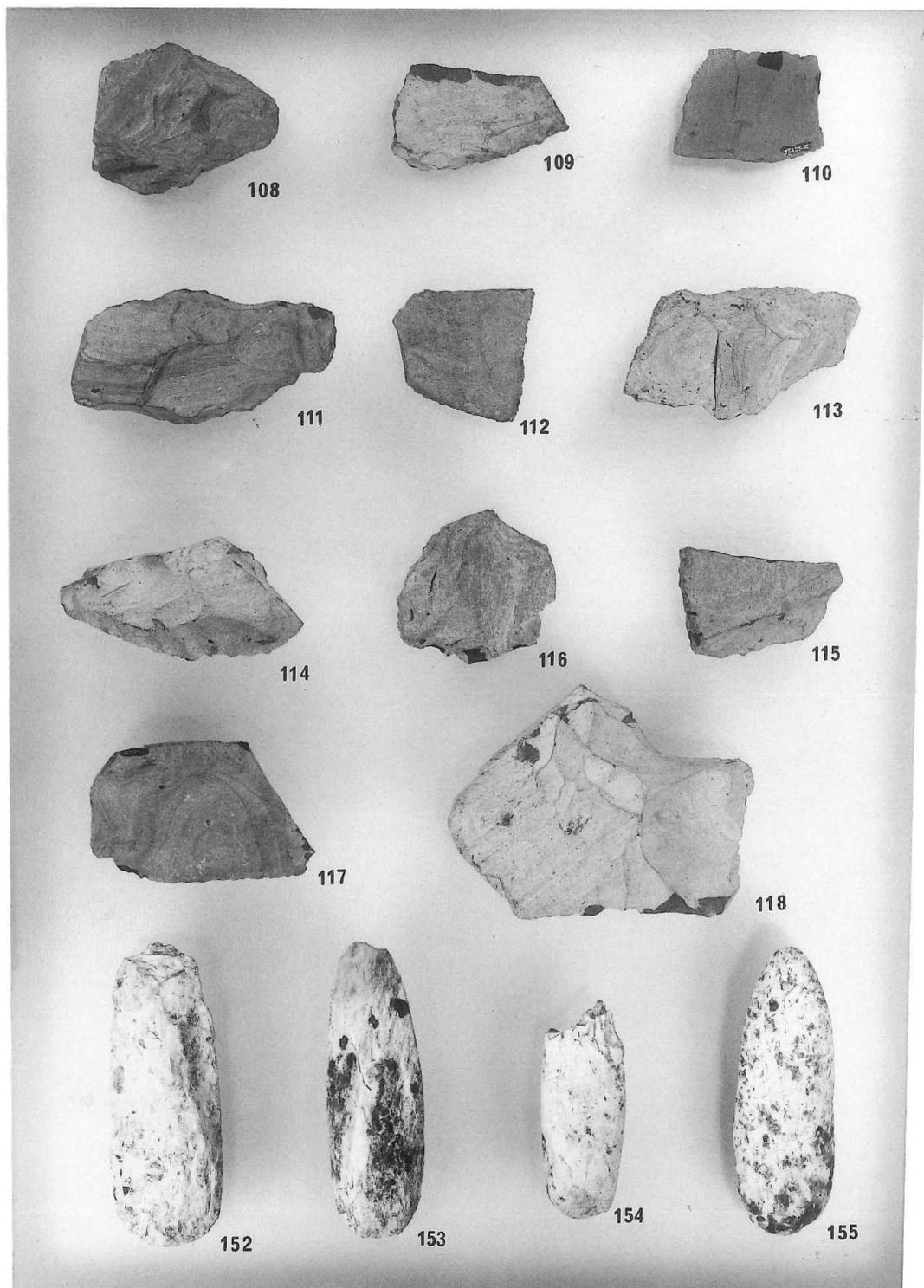
石器⑦·⑧ (1/2)



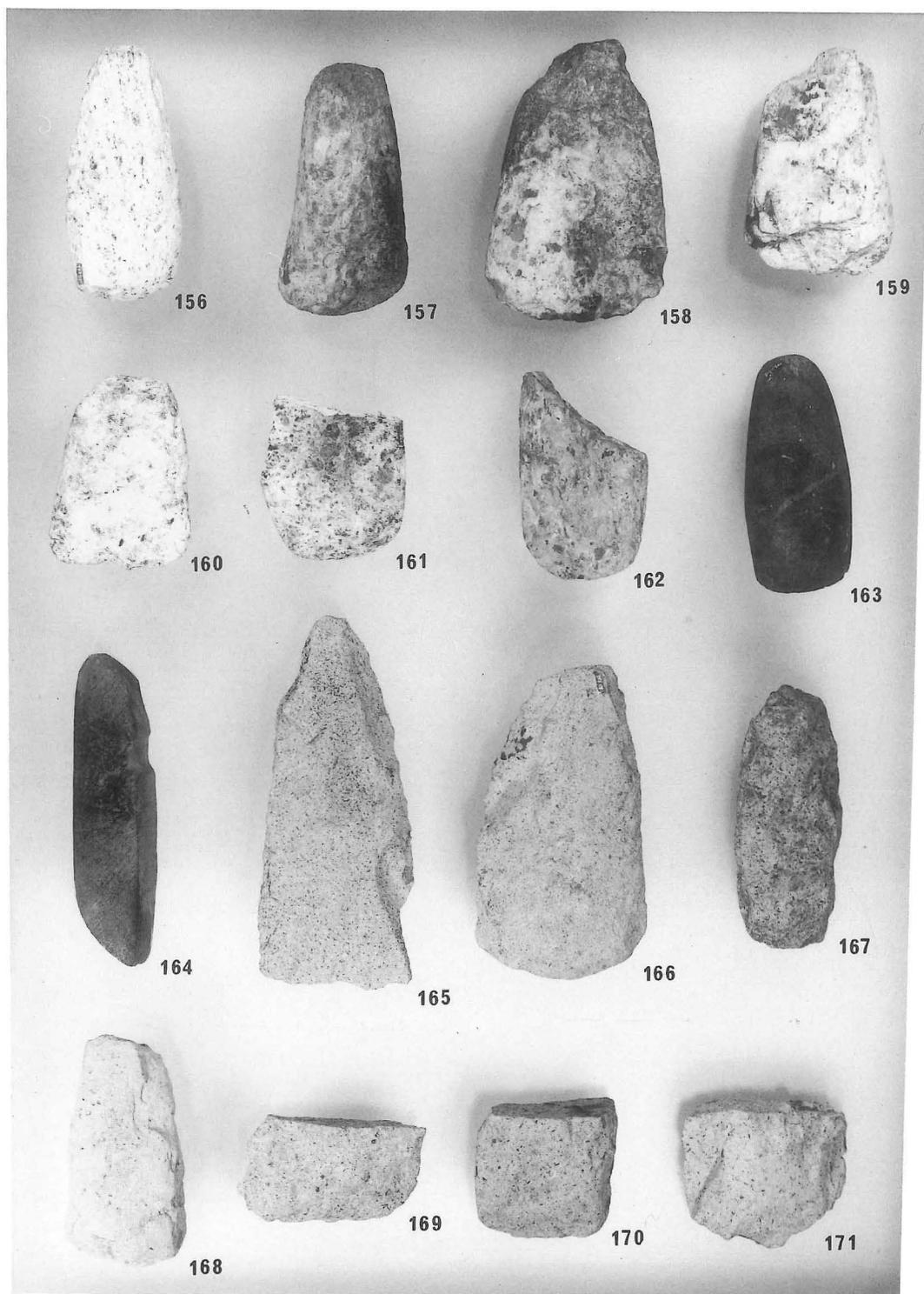
石器⑧・⑩ (1/2)



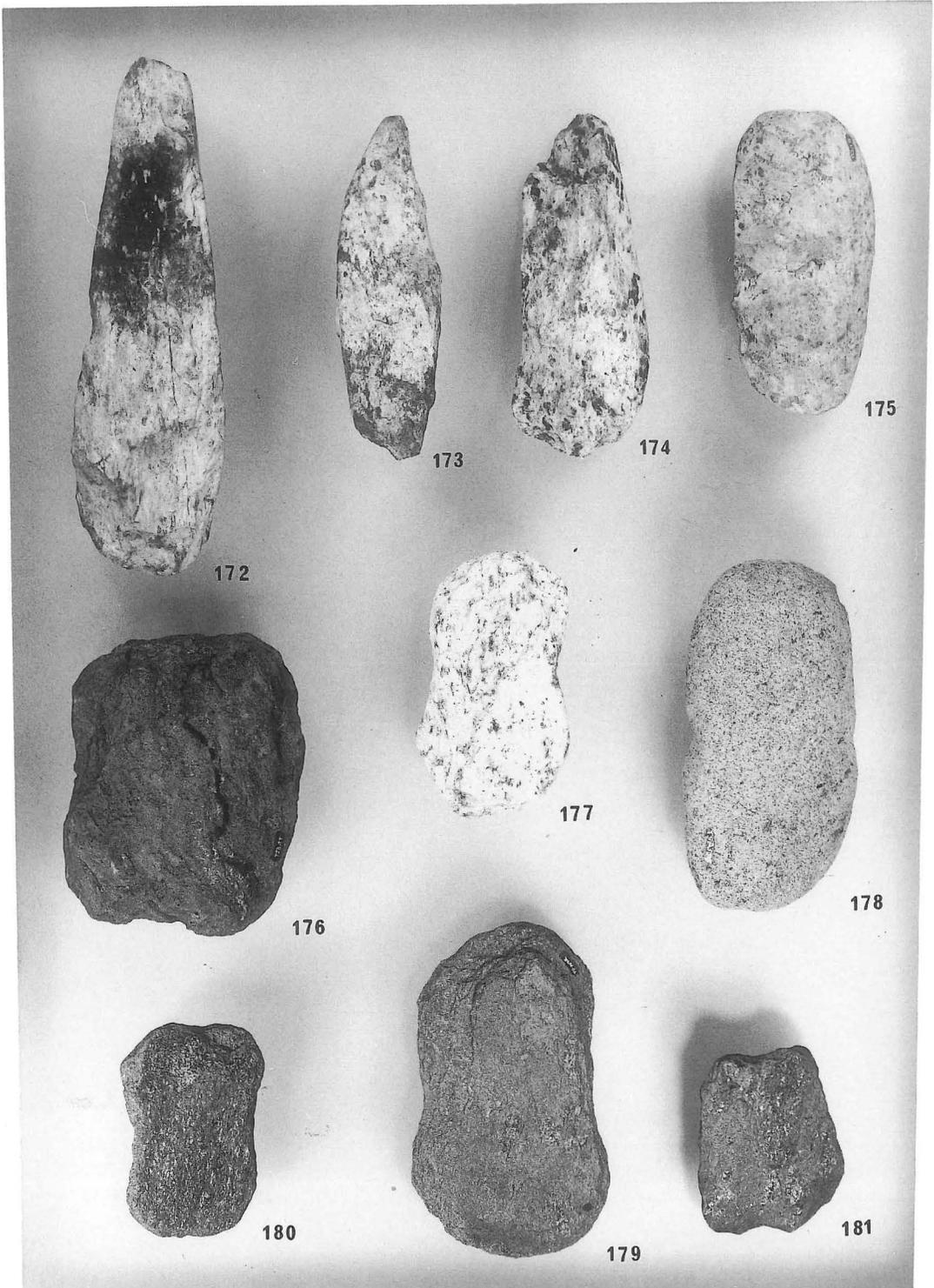
石器⑪・⑫ (1/2)



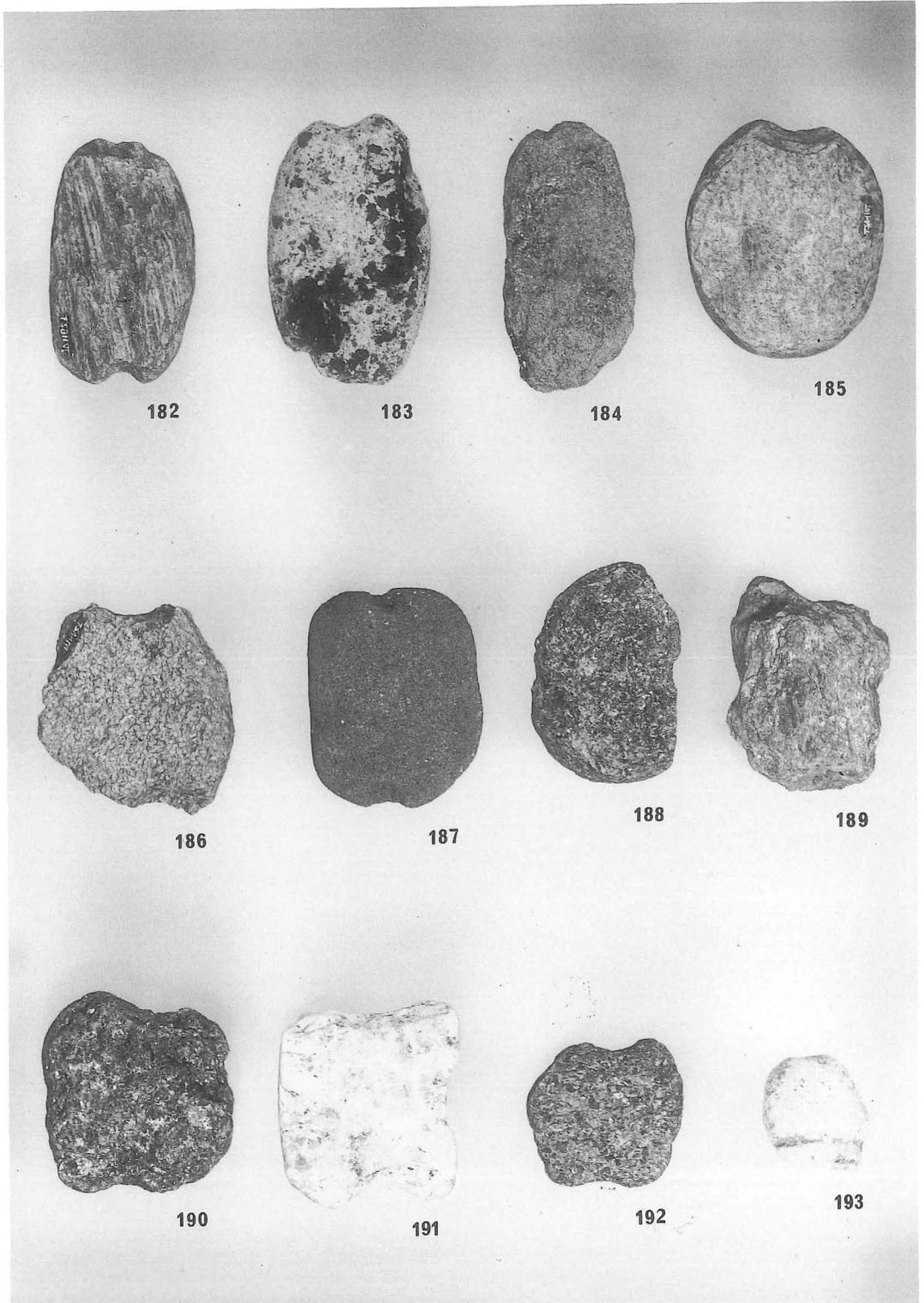
石器⑨・⑬ (1/3)



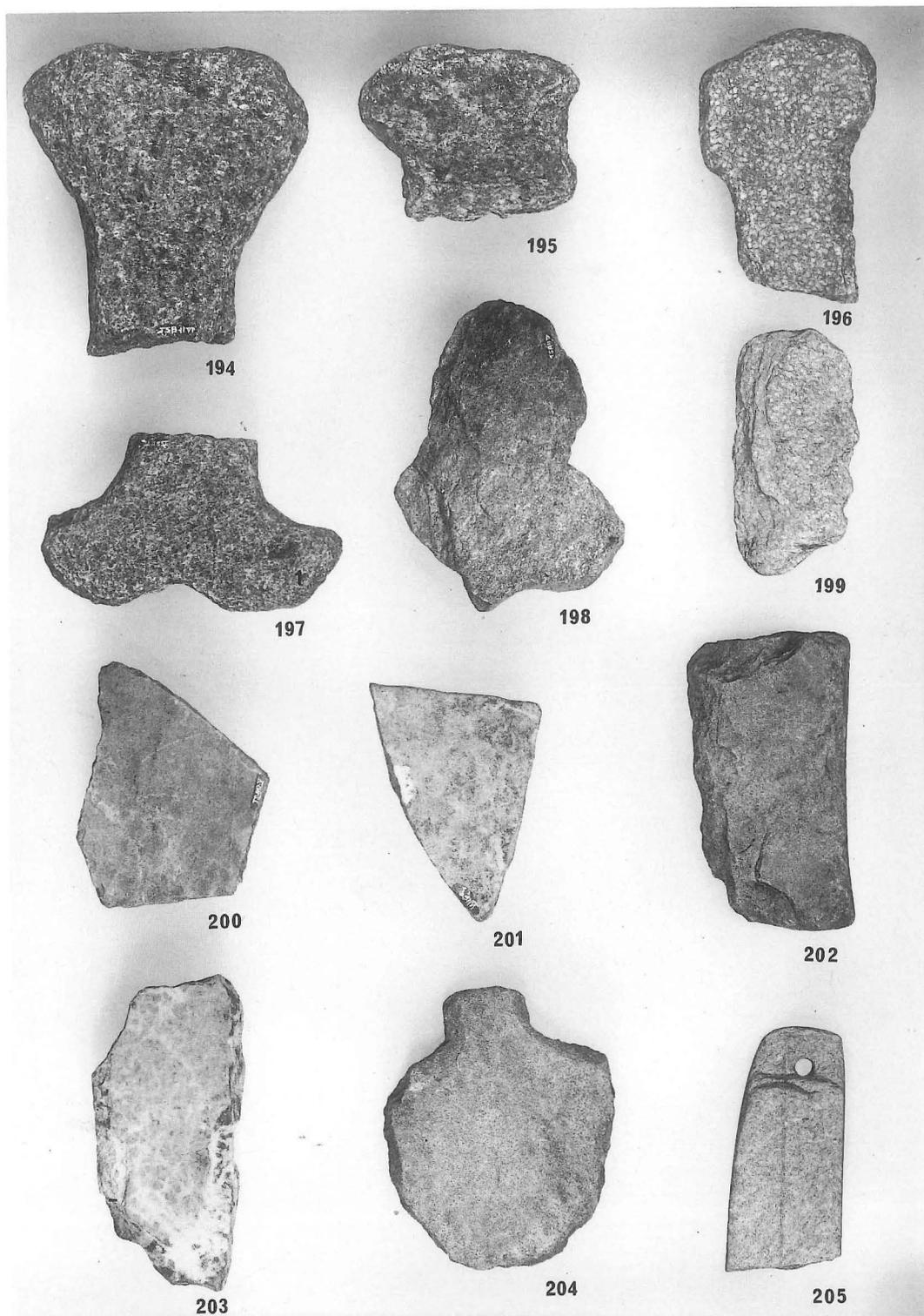
石器⑬・⑭ (1/3)



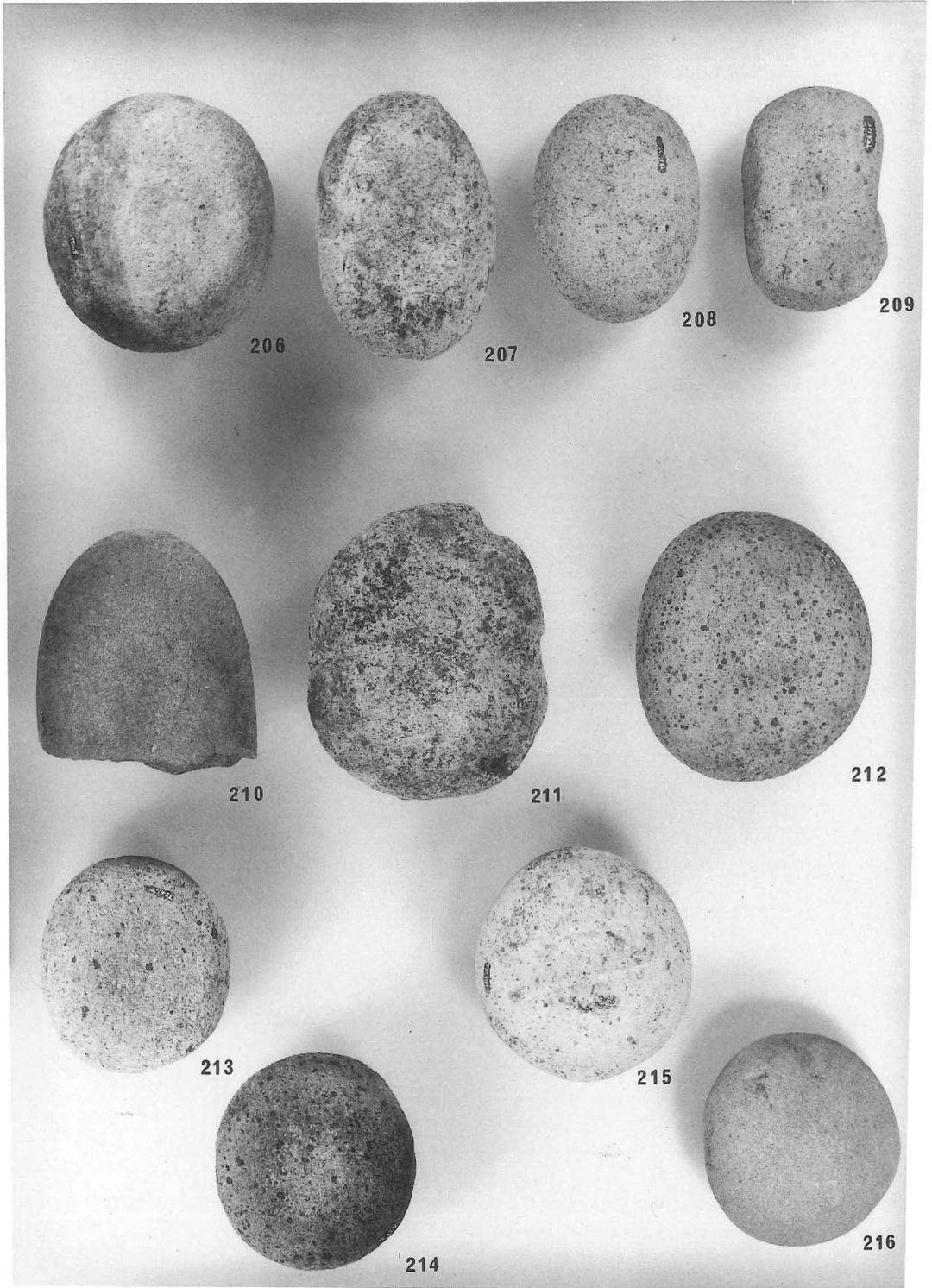
石器 ⑮ (1/3)



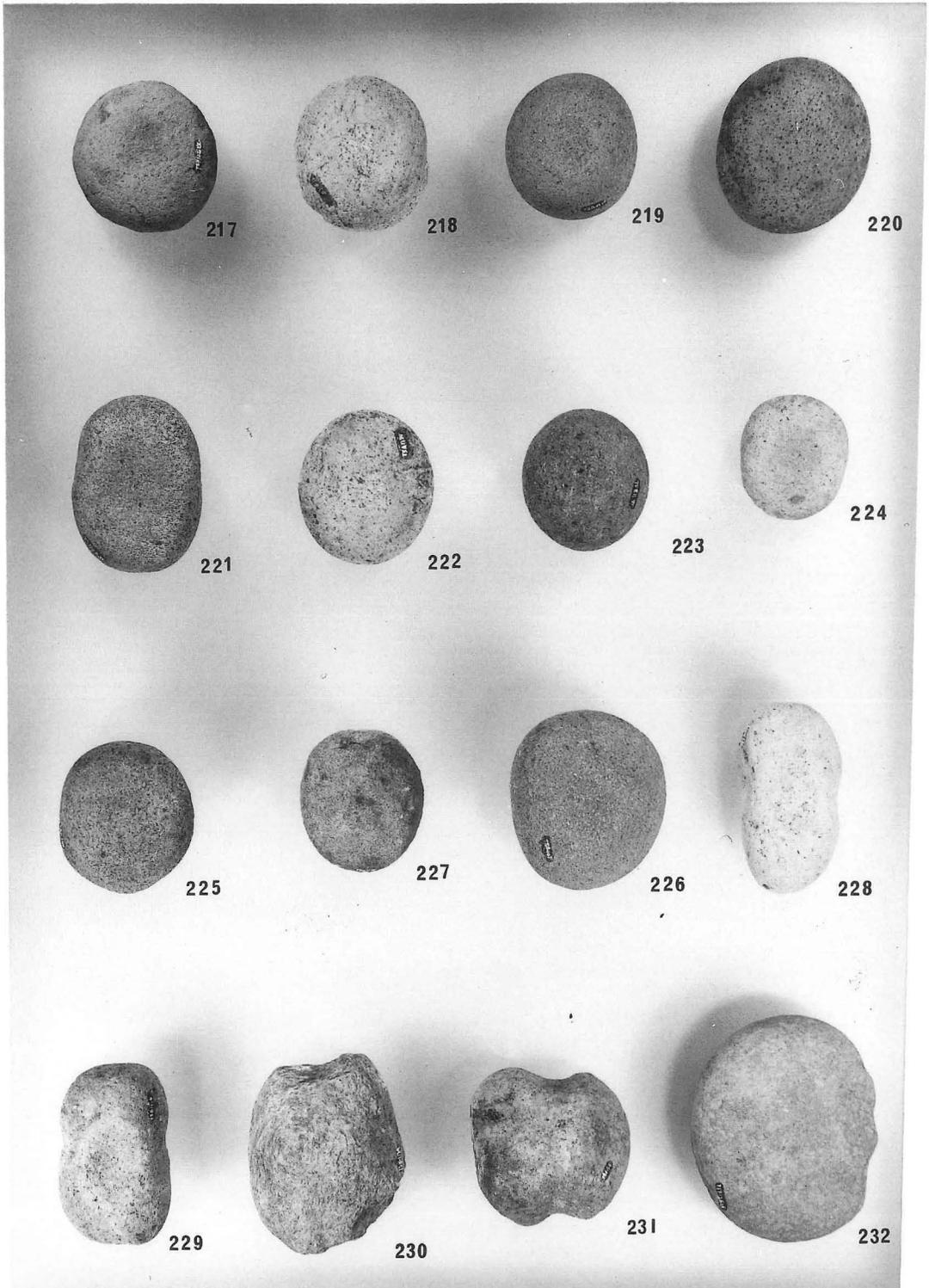
石器 ⑬ (1/2)



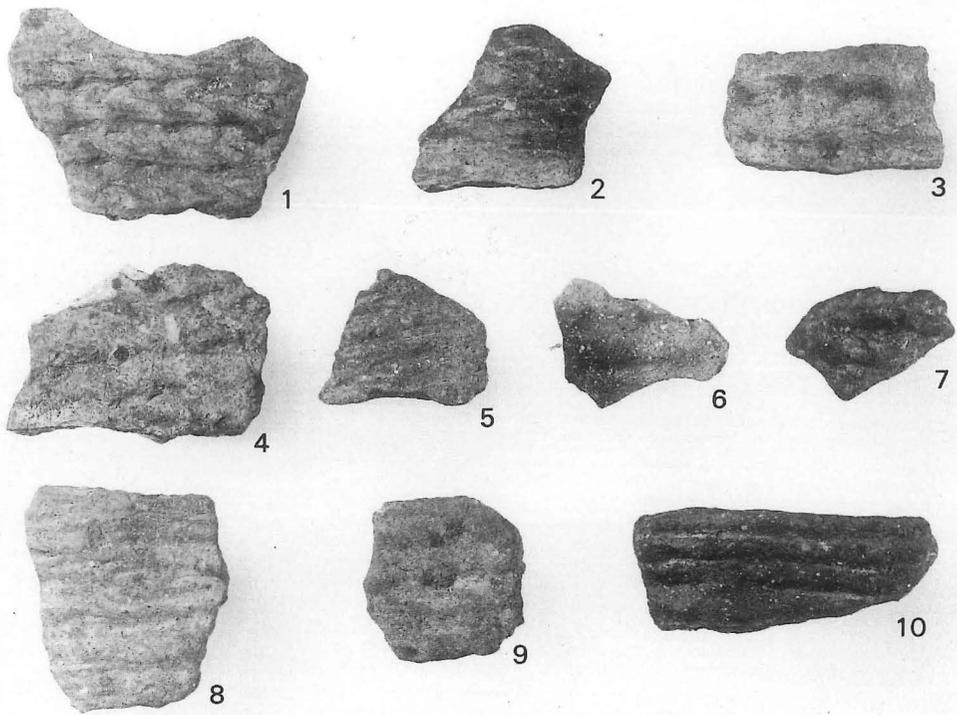
石器 ⑰ (1/2)



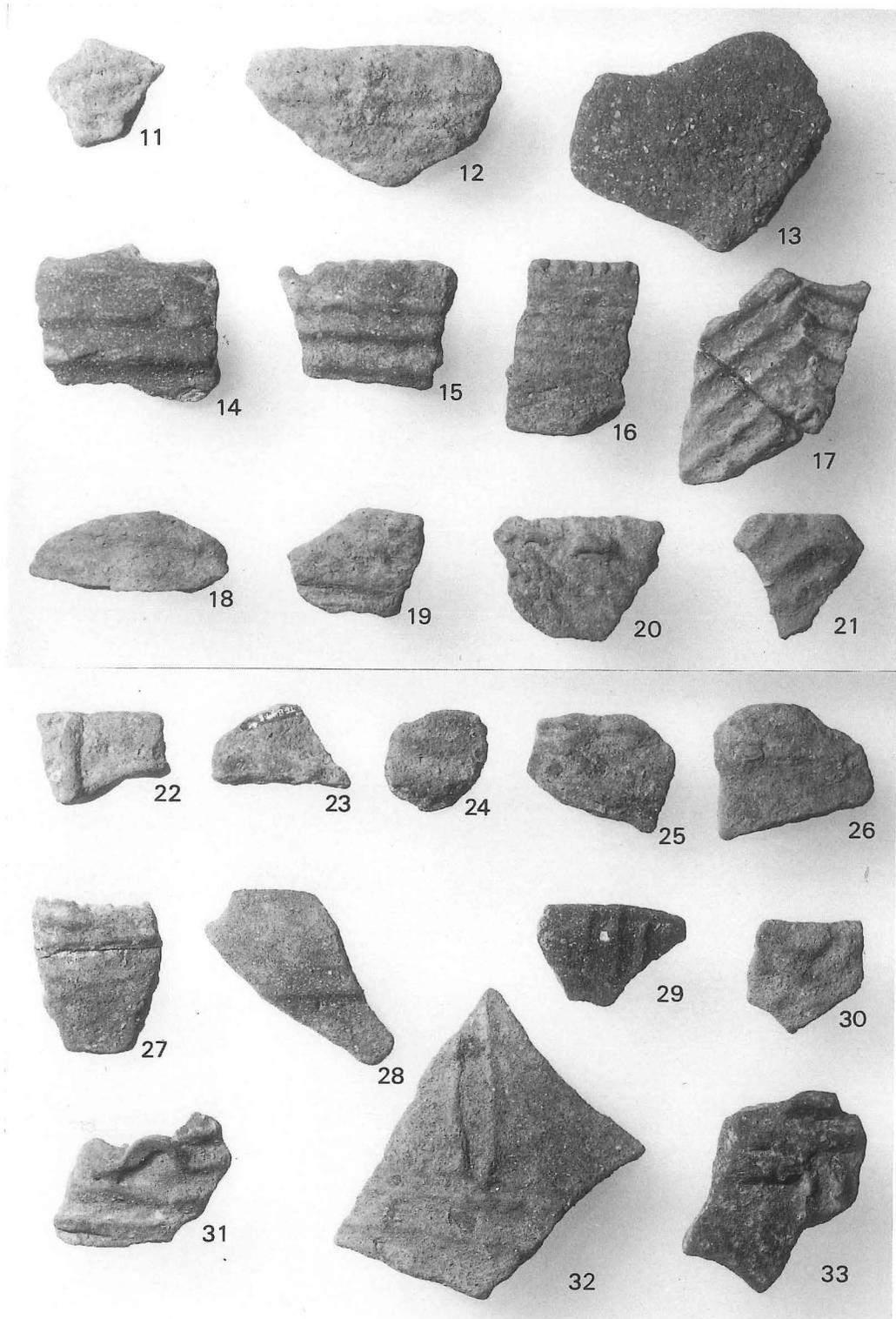
石器 ⑱ (1/3)



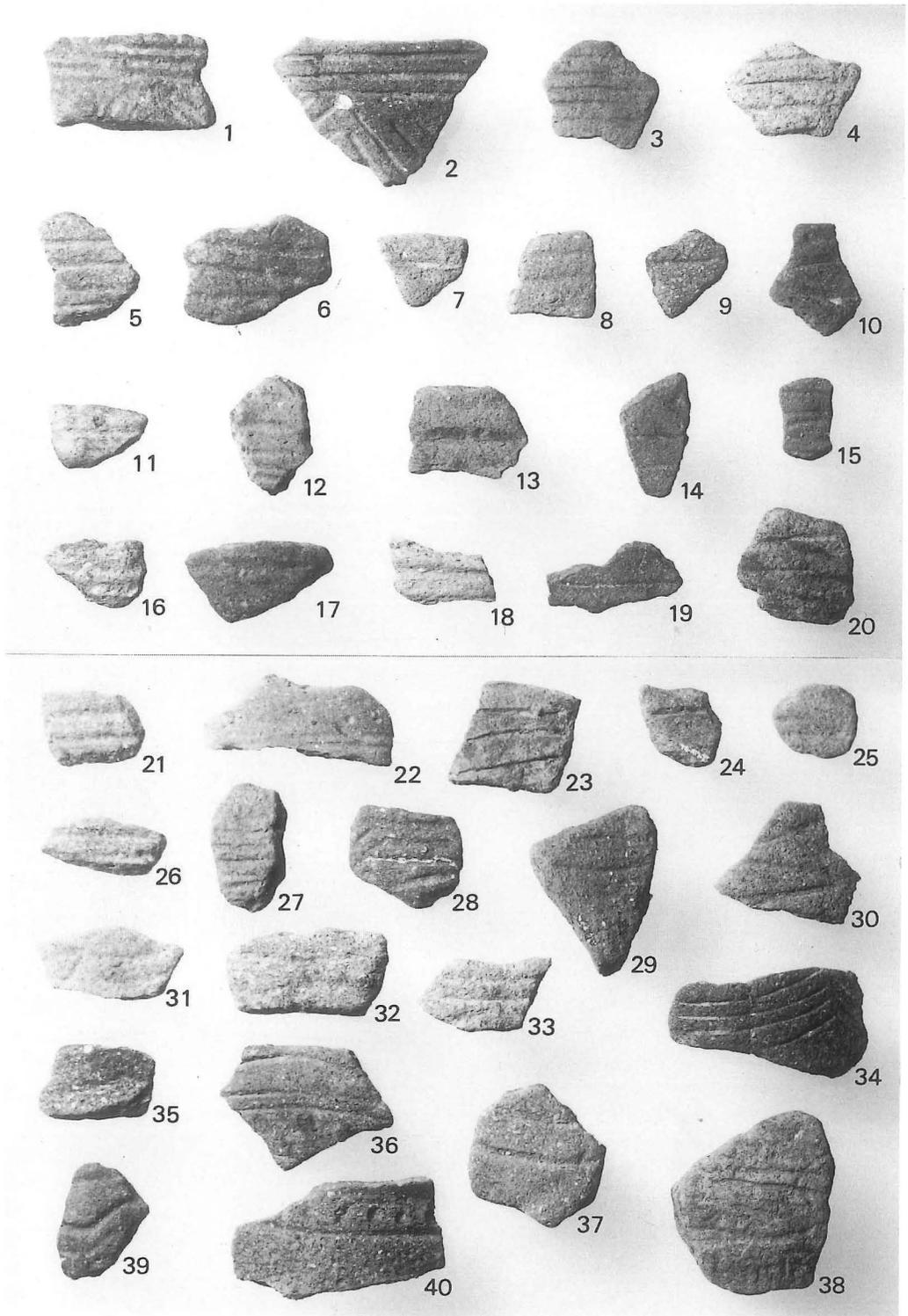
石器 ⑱ (1/3)



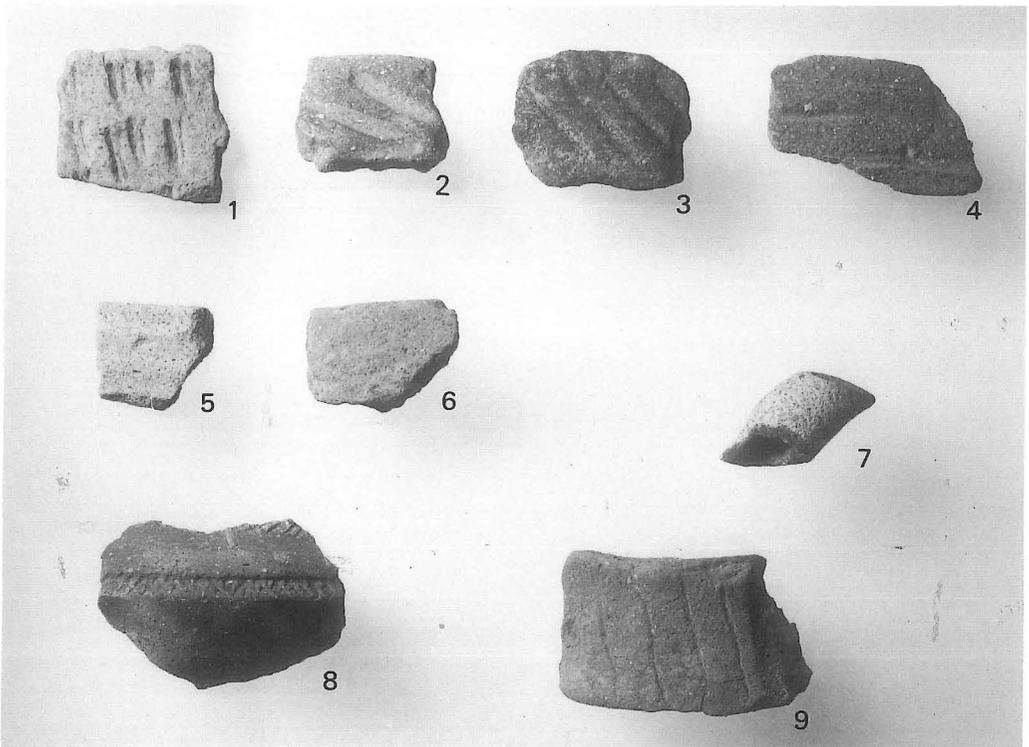
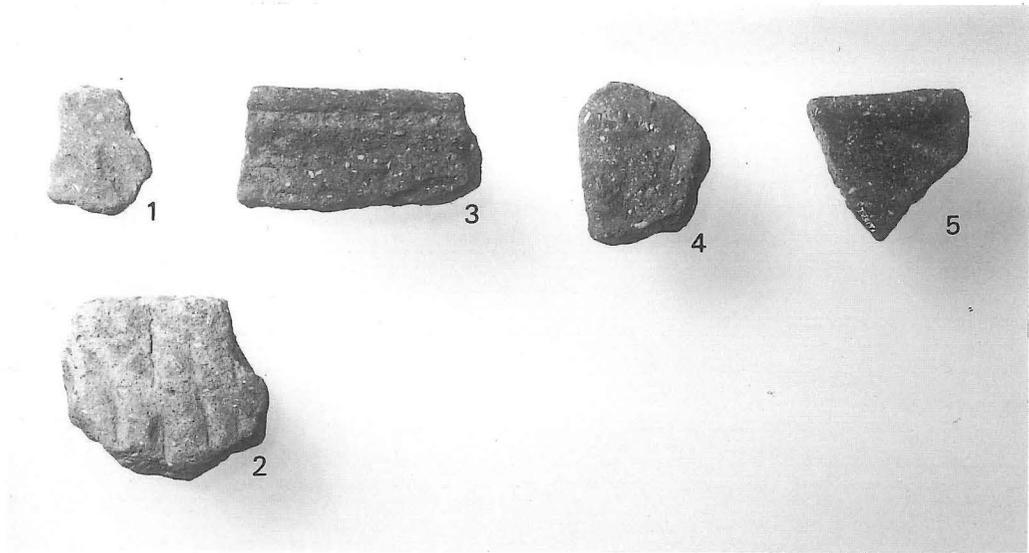
土 器 ①



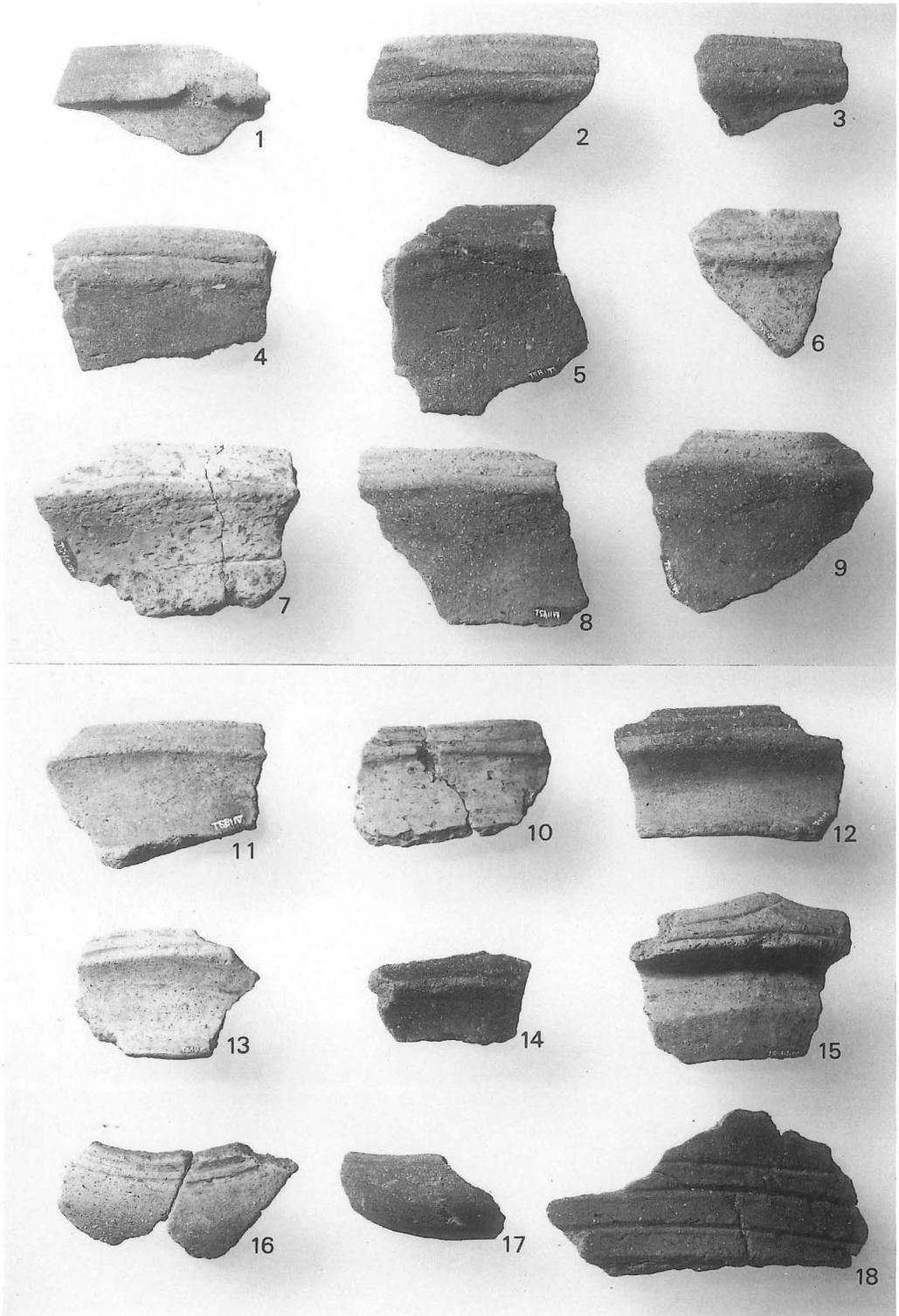
土 器 ②



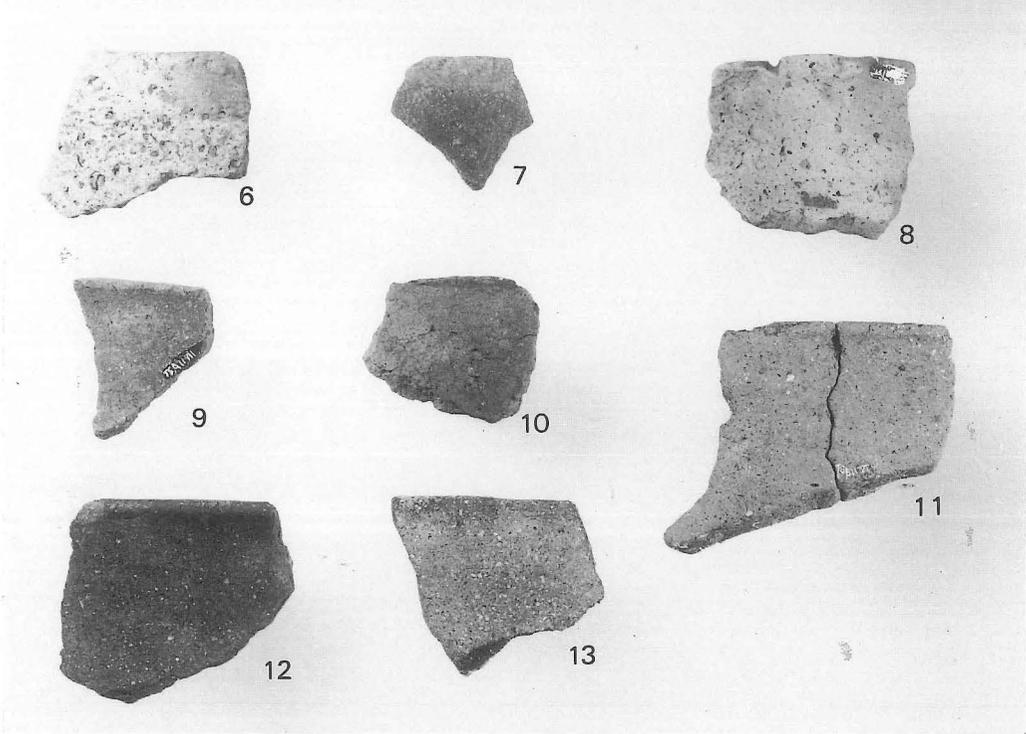
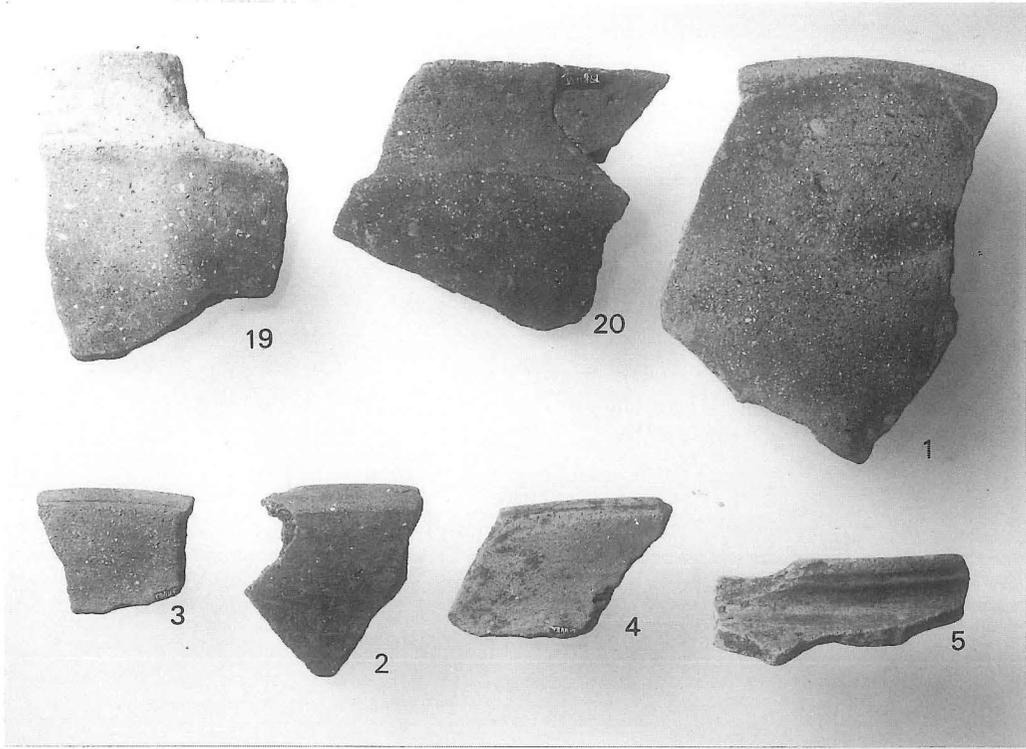
土 器 ③



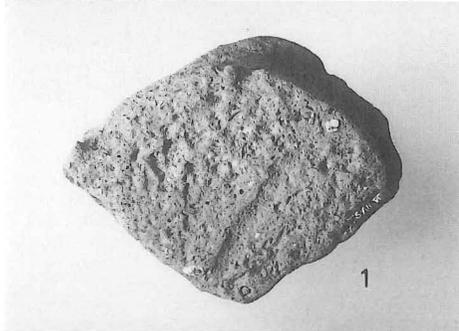
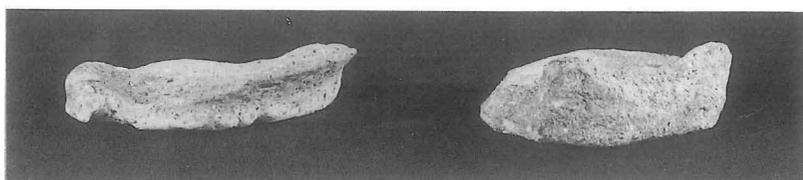
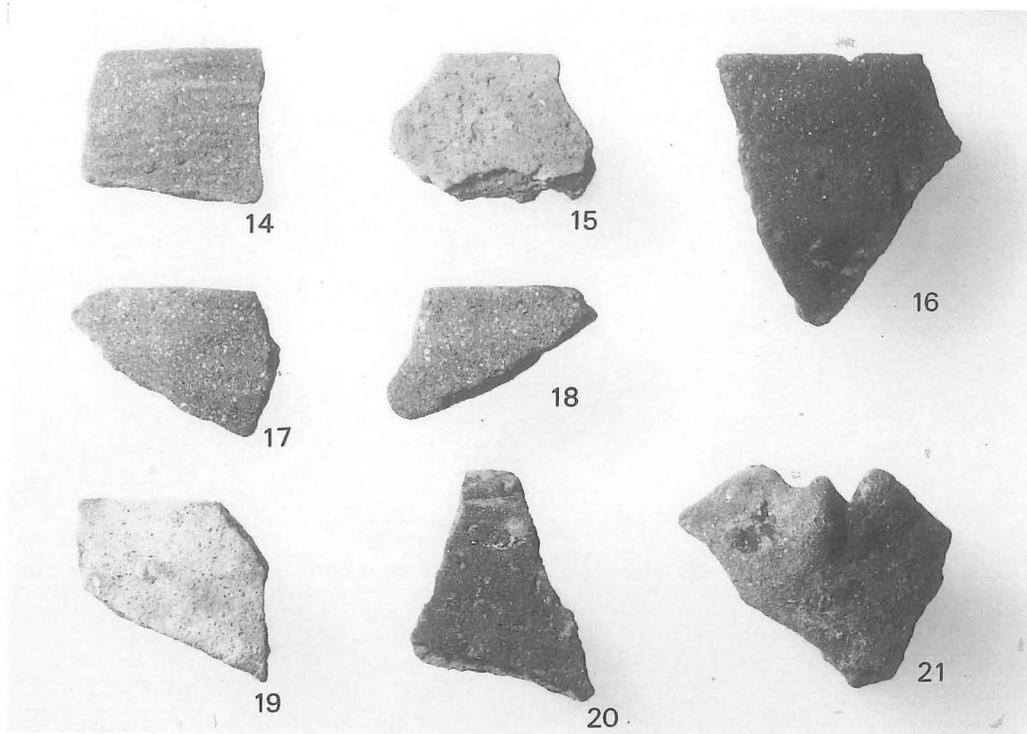
土 器 ④



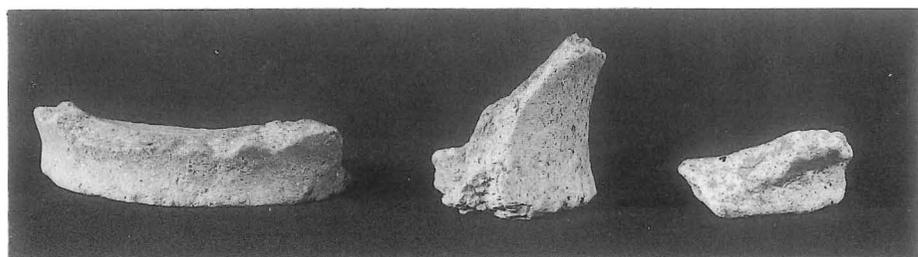
土 器 ⑤



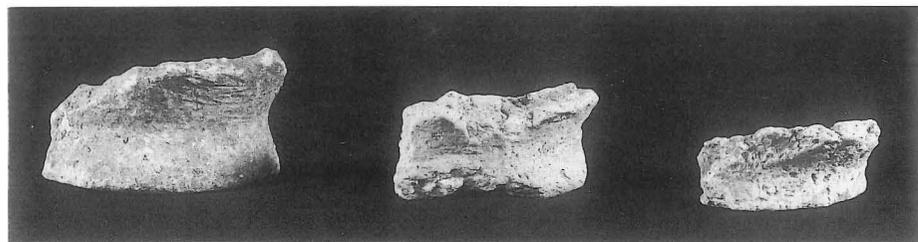
土 器 ⑥



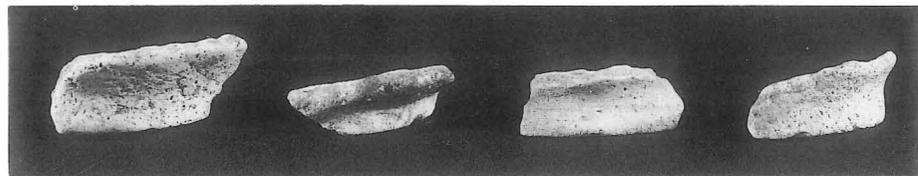
土器 ⑦



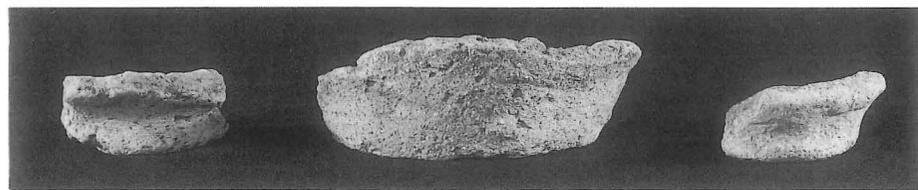
1 2 3



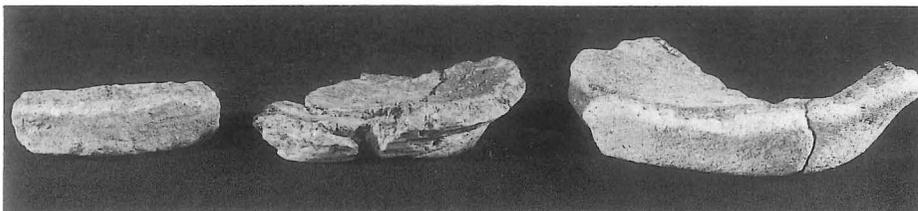
4 5 6



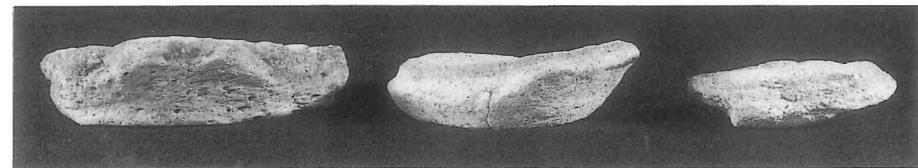
7 8 9



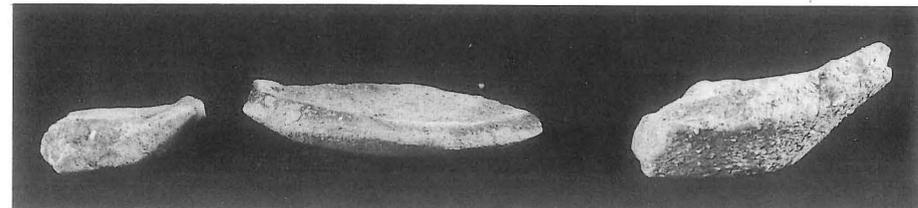
10 11 12



13 14 15

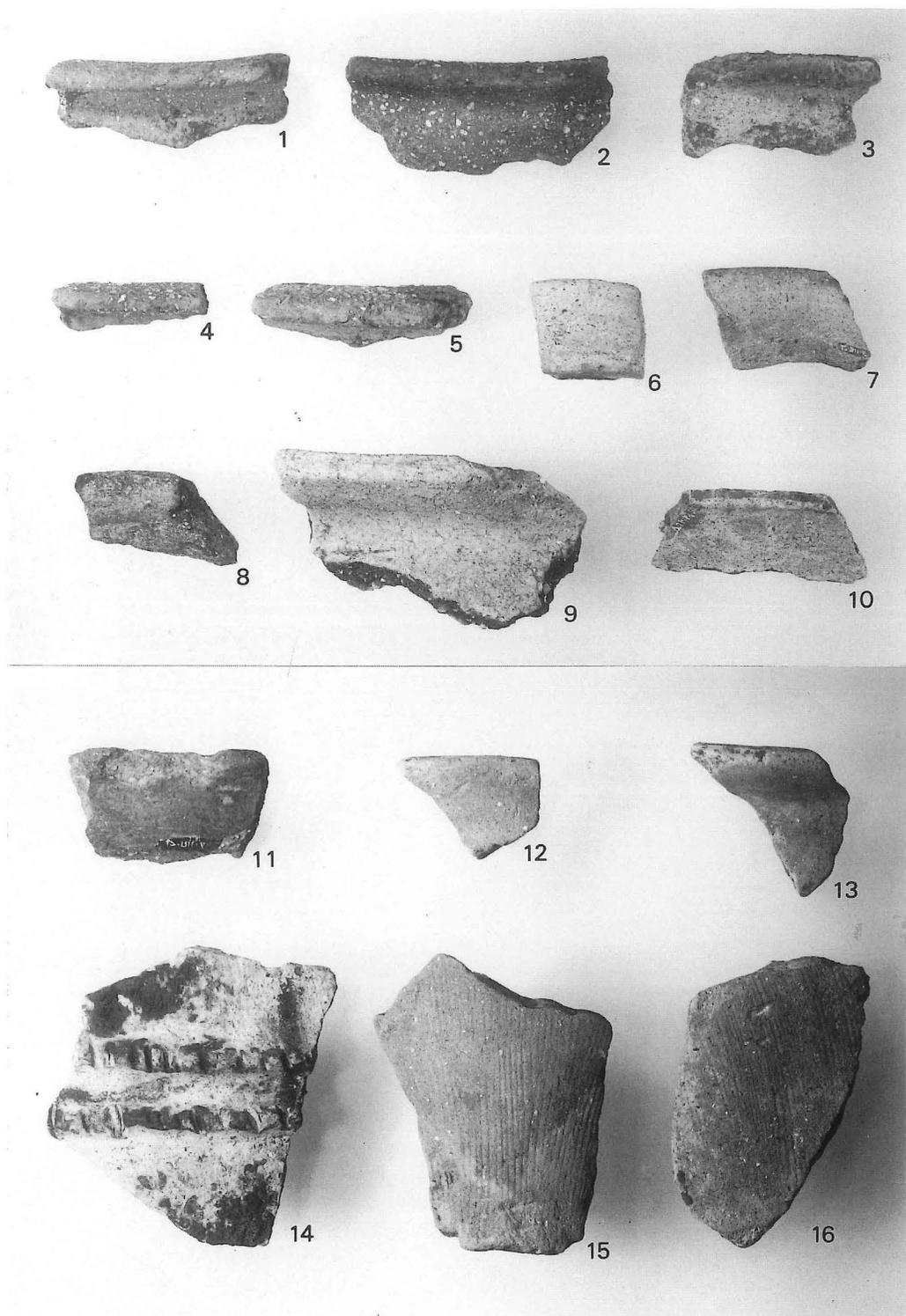


16 17 18

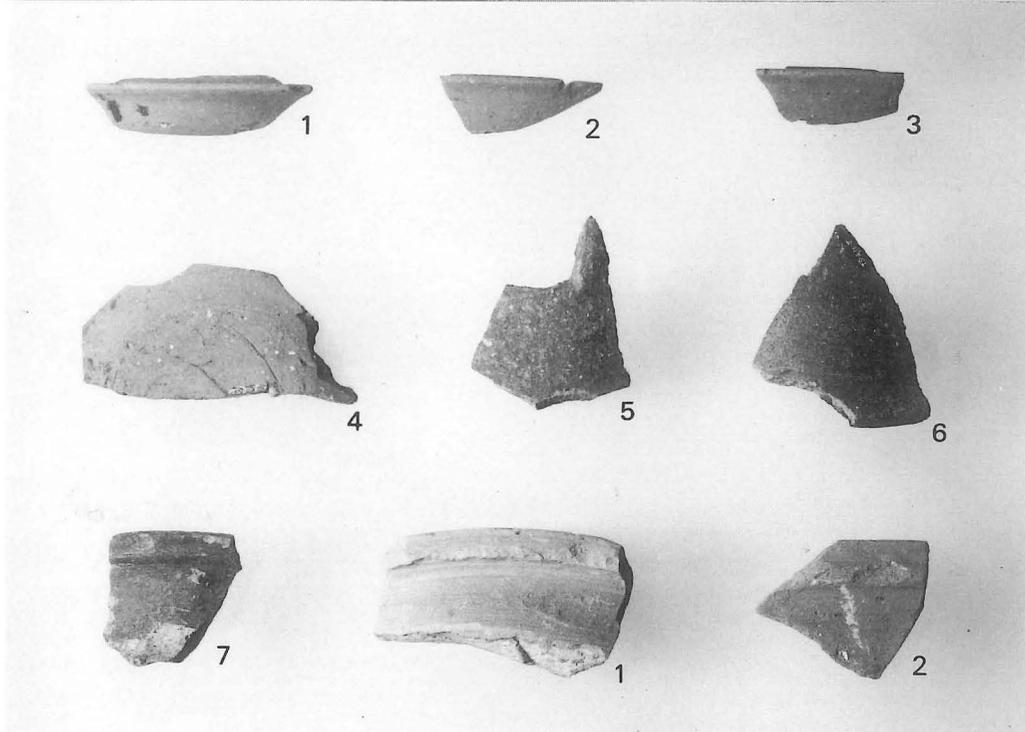
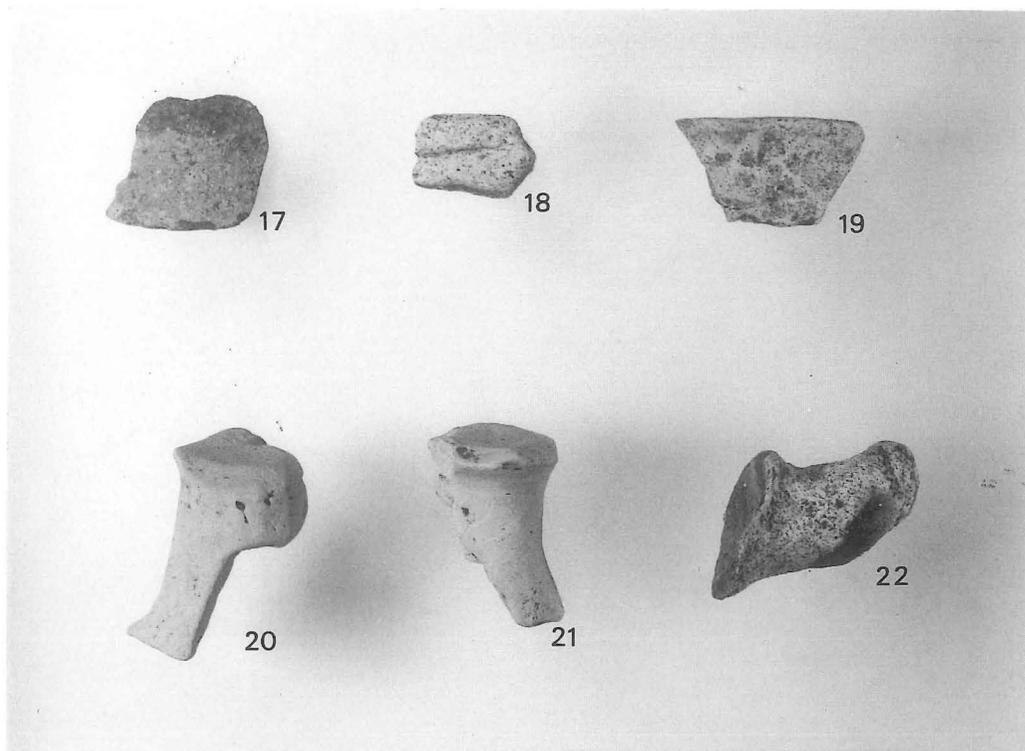


22 24 25

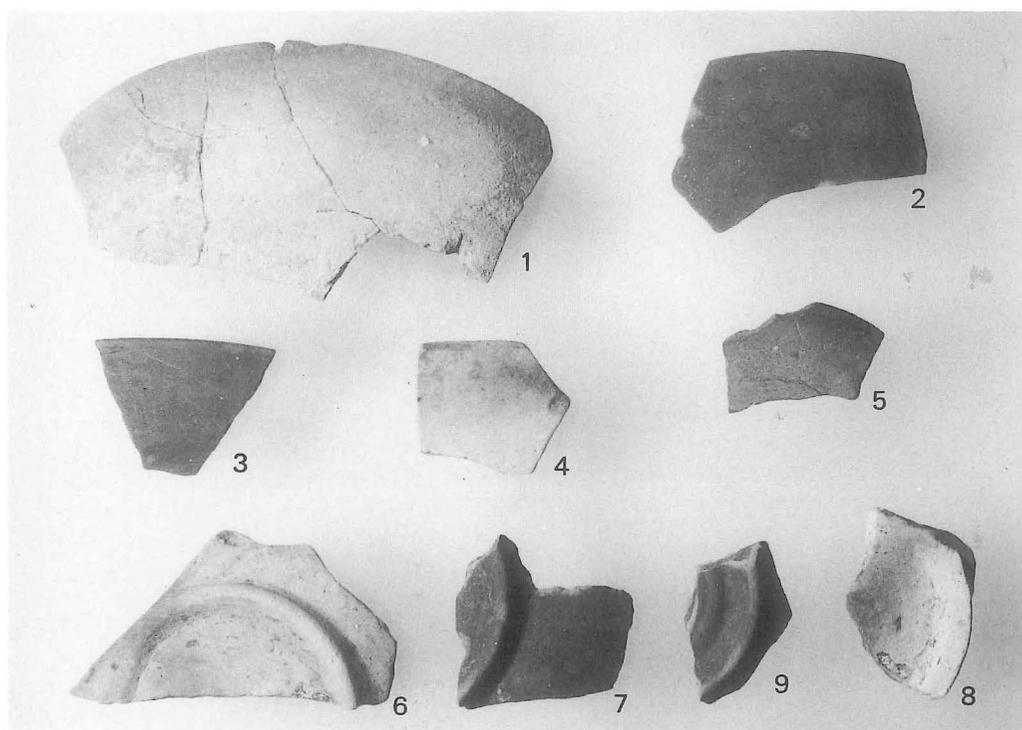
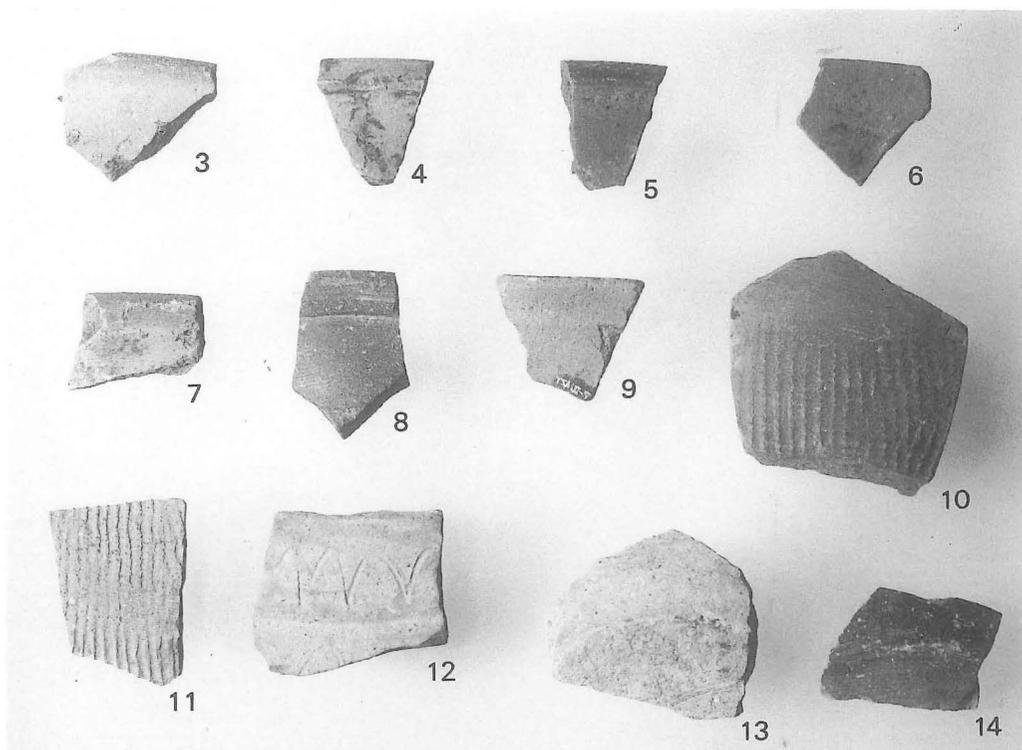
土 器 ⑧



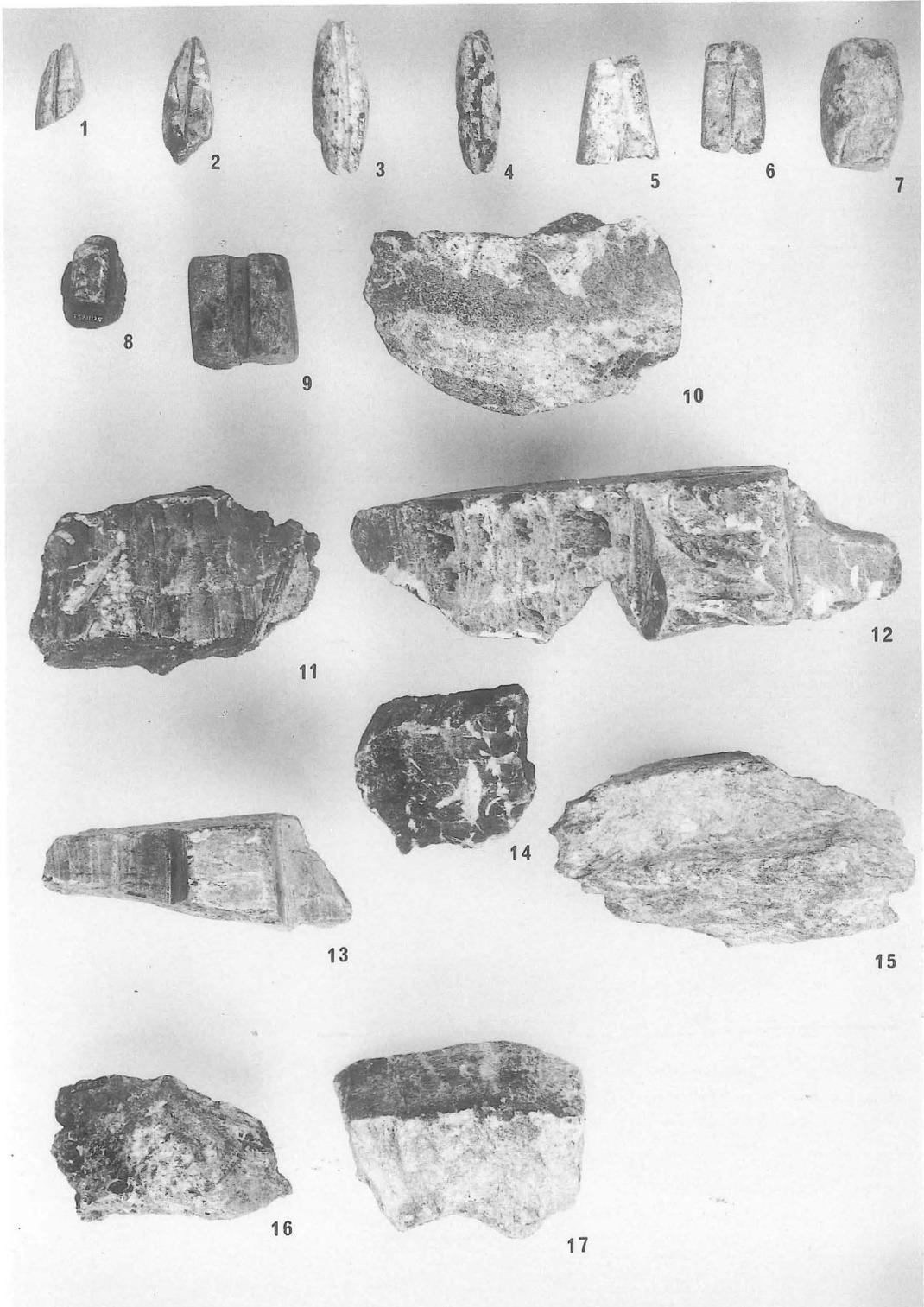
土 器 ⑨



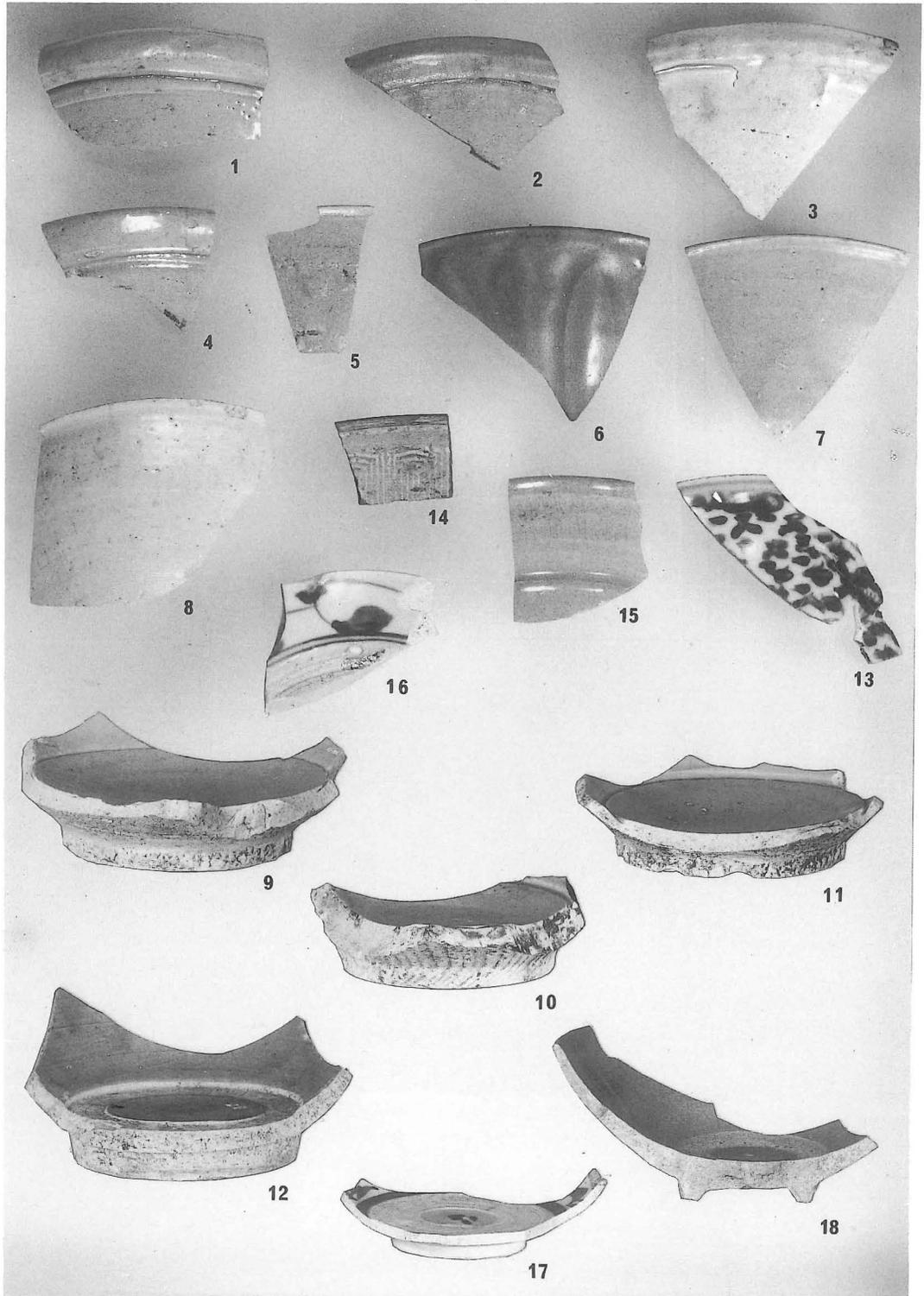
土器 ⑩



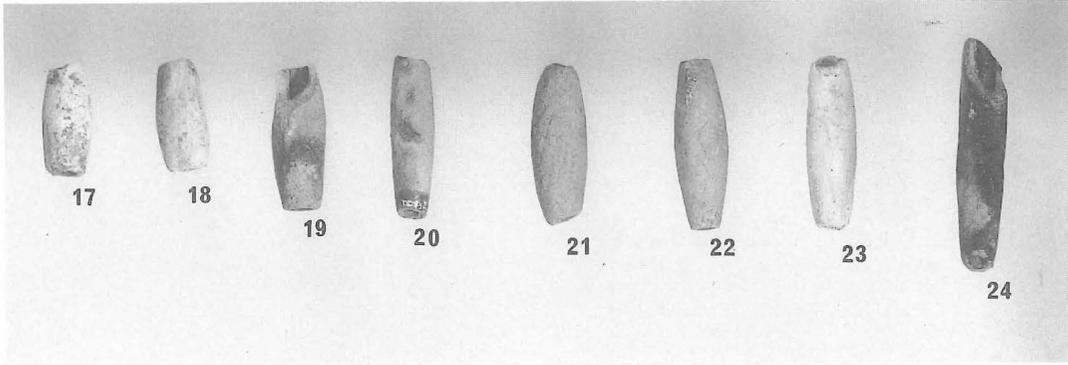
土器 ①



中世の遺物（滑石製品、石鍋）



中・近世の陶磁器 (中国製輸入陶磁器等)



中・近世の遺物（土錘、鞆の羽口）

飯盛町文化財調査報告書第1集

築 崎 遺 跡

平成2年(1990)3月31日発行

発行所 飯盛町教育委員会
長崎県北高来郡飯盛町開名1929番地3
〒854-11 ☎ 0957-48-1111

印刷所 川口印刷株式会社
長崎県長崎市田中町1020-7
〒851-01 ☎ 0958-38-2181
